2021 年度　インターゼミ・アジアダイナミズム班　論文

倭寇とモンゴル帝国史
～海洋の渡海民と大陸の遊牧民～

学部生

田中 千尋、天野 真一朗、羽田 キッティパッド、山埜 彦樹

大学院生

三田　大祐、谷ケ崎 真尚、森 勇太、森田 耕一郎
杉　由紀、多田　敏男

修了生

光永　和弘

指導教員

金　　美徳、水盛　涼一

2022 年 1 月 21 日

はじめに

私たちを取り巻く環境は、インターネット社会・ソーシャルネットワークの進展にともない、オンラインが当たり前の世界へと変化した。そして、2020 年の新型コロナウィルス感染症の流行による世界的なパンデミックにより、さらに加速度的な進化・変化が起きている。

貿易・流通においても、歴史の時間軸で見ると、陸のみから海そして情報ネットワークへと複合化して現在に至る。人という一個人も、民族の一員あるいは、国家における国民という立場から、そして国家・民族をこえてソーシャルネットワーク（SNS）や情報ネットワークにおける個人やコミュニティの一人としてより多くの顔を持つようになった。

加速度的に変化し、ますます不確実になる世界で、私たちは国家・民族を越えた個人として、グローバルな社会・世界とどのように繋がり、どのような視点をもって生きてゆくのか、使命や役割を果たしてゆくのかを考えなければならない。不確実な時代においては、歴史から得られる示唆、気づきは大きいと考える。過去の出来事や先人の思想から現代的意義を見出す視点は、今後ますます大切になっていくであろう。

インターゼミ・アジアダイナミズム班では、2017 年より、13 世紀にユーラシア大陸に一大帝国を築いたモンゴル帝国 700 年の歴史の研究・論文執筆を行ってきた。各年のテーマは、2017 年度がモンゴル帝国のユーラシア興隆史、2018 年度がモンゴル帝国の興隆と衰退、2019 年度モンゴル帝国と朝鮮半島、そして 2020 年度がモンゴル帝国時代のパンデミックのユーラシア史とポストコロナである。私たちはモンゴル帝国というフィルターを通して、現代に生きる私たちと、現代の国家・企業への数多くの示唆や気づきを見出してきた。

5 年目となる 2021 年度は、モンゴル帝国が 13 世紀に東西交流を活性・興隆・繁栄させた時代と、16 世紀における大航海時代のグローバルな交易が開かれる世紀、その間を接続していたといえる 14 世紀から 16 世紀の「倭寇」を軸に据えて研究を行った。

「日本人だけではない、朝鮮人・中国人などから構成される倭寇」「中国や周辺国、日本国内の事情から見た倭寇」「現代世界の海賊と倭寇」など様々な切口で、文献研究とフィールドワーク、過去の研究の積み上げを通じて、歴史の中での位置づけ、経営組織論、国際経営論の観点をとり入れて考察した。

本研究を通じて、私たち自身がグローバルヒストリーという歴史と現代を対比し、そこから得られる意義や示唆を現在に活かすという視点を養ってゆきたい。

目次

はじめに 6

第 1 章　中世の武装貿易商人 倭寇 10

第 1 節　倭寇の原点と実像 10

第 2 節　火器の変遷からみる倭寇 18

第 3 節　中世倭寇の影響力と痕跡 22

第 2 章　大陸国と周辺国の国内事情 26

第 1 節　前期倭寇とモンゴル帝国のつながり 26

第 1 項　高麗とモンゴル帝国と倭寇 26

第 2 項　モンゴル帝国・元と倭寇 27

第 2 節　後期倭寇とモンゴル帝国のつながり 28

第 3 節　倭寇とモンゴル帝国史の関連～フィールドワークより～ 30

第 4 節　明朝の北虜南倭（モンゴルと倭寇）の終息 33

第 1 項　明朝の海禁解除と後期倭寇の終息 33

第 2 項　明朝のモンゴルとの貿易認可による北虜の終息 33

第 5 節　倭寇と華僑の初期的形成 35

第 6 節　元・明各王朝の通貨体制が倭寇の興亡に及ぼした影響を考察する 36

第 1 項　経済環境と海賊の盛衰 36

第 2 項　元・明の中国王朝の盛衰と倭寇の勃興との関係 36

第 7 節　元の通貨政策 37

第 1 項　元朝前半 37

第 2 項　元朝後半 38

第 3 項　明朝の通貨政策 39

第 8 節　帝国を維持するコストと通貨・金融政策の重要性 42

第 9 節　琉球王国・奄美・台湾と倭寇の影響 42

第 3 項　第 1 項　カムィ焼の時代 42

第 4 項　第 2 項　琉球王国の成立と朝貢貿易 44

第 5 項　第 4 項　琉球王国と日本・朝鮮 45

第 6 項　第 5 項　琉球王国の朝貢貿易衰退期 46

第 7 項　第 6 項　台湾と倭寇 47

第 8 項　第 7 項　まとめ 48

第 10 節　前期倭寇の高麗への影響 48

第 11 節　倭寇と李氏朝鮮 49

第 12 節　新羅と日本　50
第 3 章　国内事情　52
第 1 節　前期倭寇発生の背景を考察するための国内状況　南北朝時代の南北朝の動乱　52
第 2 節　南北朝期の区分　52
第 3 節　14 世紀の経済状況　54
第 1 項　中世前期と後期の経済　54
第 2 項　南北朝の動乱による影響　54
第 3 項　まとめ　56
第 4 節　13 世紀から 16 世紀までの日本人の価値観について　56
第 5 節　前期倭寇について　57
第 1 項　三島倭寇について　57
第 2 項　前期倭寇と関わりがある人々　58
第 6 節　後期倭寇について　60
第 1 項　後期倭寇に属していた日本人たちについて　60
第 2 項　後期倭寇と関わりがある人々について　61
第 7 節　当時の日本人は倭寇をどう位置付けしたのか　65
第 4 章　過去現在の世界の海賊　66
第 1 節　海賊の起源　66
第 2 節　16 世紀から 17 世紀のアドリア海における海賊行為　67
第 1 項　16 世紀から 17 世紀のアドリア海における地政学的状況　67
第 2 項　16 世紀から 17 世紀の海賊「ウスコク」の実態　68
第 3 項　ウスコクは英雄なのか　69
第 3 節　フィールドワーク（ヒアリング）：16 世紀から 19 世紀初頭の北アフリカ海賊－近代国際秩序の形成－　70
第 4 節　「海賊行為」と「私掠行為」　72
第 5 節　イギリスにおける海賊　73
第 1 項　国家主導での略奪行為　73
第 2 項　イギリスの海賊行為の台頭と弾圧　75
第 3 項　被害者的側面を持つ海賊　75
おわりに　77
関連年表　78
参考文献一覧　79
2021 年アジアダイナミズム班年間スケジュール　83

最終発表スライド 84
謝辞 107
執筆担当 108

第1章中世の武装貿易商人 倭寇

第1節　　倭寇の原点と実像

本論ではこれから倭寇を多角的な視点から論じていく訳であるが、本章ではまず「倭寇」の輪郭を浮き上がらせていく。第1章第1節では、歴史的背景から出来得る限り時系列でその姿を追いかけてみる。続いて同章第2節では、倭寇が辿った道(航路)を切り口に活動を炙り出し、最後に本章第3節でその活動と実態から倭寇が後世に残した爪痕として「ポスト倭寇」を展望してみたい。

1-1古代海神族の流れを汲む氏族

まず、倭寇とは何か。世間一般に知られる「日本の海賊」と見るにしろ、海上貿易のプロとして歴史に名を刻む「武装貿易商人」と捉えるにしろ、倭寇の倭寇たる所以が海上での活動と切っても切れないことは疑いようがない。つまり、倭寇の活動の原点には出発地(九州五島や対馬)と到着地(朝鮮半島や中国大陸の沿岸地域)、それらを結ぶ航路、そして船はもちろんのこと、何より航海のためのノウハウを有していたと考えられる。ある時代に突如として武装した漂着民が倭寇としてその名を轟かせるに至ったのだろうか。はたまた、操船技術と比較的安全な航路を有した武装集団が倭寇と呼ばれるようになったのか。史料に残る船団の規模を鑑みると武装漂着民の前提は肯首し難い。では、倭寇はいかにして倭寇になり得たのか。如何にして、海を股にかける活動の素地が備わったのか。そのルーツから紐解いてみる。

有史以来、日本は比較的気候が安定した中緯度に位置する国家として栄えてきたといえるが、島国ながら豊富な水源を有するのはユーラシア大陸の東岸を流れる黒潮の影響も大きい。温暖で流れの速いこの海流が、雲を作り、時には激甚災害や異常気象をもたらしつつも、陸地に豊富な雨を降らし豊かな自然を育むためである。そして、この流れの速い黒潮が流れる東シナ海を渡るには相応の操船技術を要する。同海流を主たる起源として対馬海峡へ流れ込む対馬海流についても同様なことが言えるかもしれない。一方で、東シナ海の横断と対馬海峡を渡る場合には、決定的な違いも挙げることができる。それは、目視で対岸が確認できるか否かということである。操船技術が発達していない時代にあっても、対岸(玄界灘-壱岐島-対馬-朝鮮半島)を確認しながらであれば航海のめどが立つ。このようにして、ユーラシア大陸から海域という境界に隔てられるなかでも往来を試みようとしたのではなかろうか。そして、その試みを実践しノウハウとして蓄積した氏族が古代日本に生まれていたと考えられる。主に北九州を拠点に勢力を築いていったとされる安曇(または阿曇)氏や同氏に起源を持つとされる和珥一族であり、海神を祀った氏族であったため、またの名を海神族とも呼ばれている。

では一体、安曇氏をはじめとする海神族とはどのような氏族であったのか。古代日本の原風景を詳らかに出来る程の文献が残っておらず、歴史家の解釈もさまざまなことを承知の上で、この度は本論のテーマである「倭寇」に関連する視点で考察を加えてみる。

> 安曇氏は全国の海人集団、海部を管掌する伴造の地位にあった。『書紀』応神三年条には、海人の騒擾を平定した阿曇連の祖・大浜宿祢を「海人の宰」に任じたとされる。これは、漁撈民の長であり、水軍の長であったとみられる。(宝賀、2012、P29)

まず、沿岸部に拠点をもつ氏族として、その活動の場を海域に求めることは想像に難くない。よって、漁労に従事していた点は肯ける。一方で水軍という概念は、海上あるいは沿岸部での紛争を彷彿させる。仮に海を渡ってくる渡来のもの、或いは海を渡っての戦いがなされていたとすれば、規模の大小はあるにせよ、元寇あるいは倭寇を待たずして、古代より同地域では武装の必要を迫られていた可能性も伺える。また、海を渡ることができたため外交の役割も担っていたとされ、氏族としての身分の高さを示す記述も残っている。当時海域を自由に行き来が出来た海神族が日本国

家の黎明期に権力を持っていたと見受けられる。

> 二・三世紀代の海神族の国としては、博多平野の那珂川流域にあった奴国すなわち葦原の中国があげられるが、その王族嫡裔が和珥氏であった。和珥氏族の宗族は後に添上群春日に分かれた春日臣氏となるが、北九州にも「春日」の地名があり、那珂川と御笠川に挟まれた奴国の主領域にあった。（中略）従来から、海神族の阿曇連が奴国末裔ではないかとみられてきたが、阿曇氏の方が和珥氏のむしろ支流ではなかったかということでもある。（中略）海産物の貢進や大王の御膳に奉仕し、中国・韓地とも外交を行う任につく者を和珥一族から多く出した事情も肯ける。（宝賀、2012、P37）

> 和珥氏族からは、古くは塩乗津彦や大矢田宿祢が韓地関係で見え、七世紀以降では推古朝の小野妹子、文徳朝の粟田真人などが隋・唐への使節となっており、入唐学問僧として道観などが見えるなど、海外交渉や朝鮮半島関係で活躍するものが和珥氏族から多く出た。これら事情も、海洋関係部族に通じると見られる。和珥氏族には猪甘部首のように、阿曇氏同様、入れ墨の習俗をもつものもあった。（宝賀、2012、P18）

なお、上記引用「入れ墨の習俗」という独特の風貌についての詳細は以下の通りである。

> 海人を軍事の手兵に用いたこと、浜子の入れ墨が目のふちになされていた故か、世に「阿曇目」と言ったことも記されるが、入れ墨自体は、海神族では元からなされていた可能性もある。和珥支流の山代の猪甘部の祖先は、「間黥ける老人」として安康記に見える。『魏志倭人伝』でも、男子は黥面、文身であるが、これは、水人が海に潜って魚蛤をとらえる際に大魚水禽を避けるためだと記すから、入れ墨は海人関係者の古来の習俗であった。中国江南にも文身する習慣があり、古代倭人の文身は江南に連なるとみる見解がある。（宝賀、2012、P29）

引用中にある「黥面、文身」は、入れ墨をしている状態を意味している。国外の例にはなるが、インディアンやアボリジニ等、各氏族（一般的に原住民とも呼ばれる）には連綿と受け継がれるアイコンや風習が見られる。古代日本における海神族においてそのうちのひとつが、目のふちになされた入れ墨であろう。つまり歴史を紐解いていく中で、目に入れ墨がなされているという様子を垣間見たときに、何某か海神族の流れを汲むその伝統の表出と称することも出来るかもしれない。そこで、1枚の写真（写真1）をご覧いただきたい。本論テーマである倭寇のものと見られる挿絵である。裸足に半裸、右肩に太刀を担いだ出で立ちも特徴的であるが、顔面の目のあたりを注意深く観察すると目のふちが黒く囲われているようにも見受けられる。有史以来、日本の多くの場所では成人儀礼としての入れ墨文化は基本的に消失してしまっており、この1枚を持って断言することは難しいものの、十四世紀以降に九州沿岸を拠点として躍動する倭寇と、同地で海軍・外交を礎に勢力を誇った古代海神族との関係性に想像を膨らませることもできよう。

写真 1　明人の描いた野人と倭人

出典：村井章介『増補中世日本の内と外』pp205.（原典：『万宝全書』(1694 年)内閣文庫蔵）

1-2海商の時代

古代から時代が少しくだり、中世へとさしかかる平安時代へ移っていくと、朝鮮半島の新羅を拠点に、海上の行き来や交易活動に関する史料が多く見られるようになることから、当時の活況な具合が伺える。いわゆる新羅商人の始まりである。彼らは船を用いて、半島と日本（九州のあたり）、大陸を自由に動き回る存在として、海上を活動のフィールドとしたことから「海商」とも呼ばれている。前述の通り、古代から海上を往来する人々がいたことは事実であろうが、本格的に商業を目的に船に乗り込むようになるのはこの時代からと考えられる。もちろん、航海の経験があって成り立つ生業であるため、連綿と受け継がれてきたものを否定することはできない。一方で、ではなぜ新羅商人は海商として一時代において一世を風靡したのであろうか。一時代の証として例えるのであれば、中世 14～16 世紀に名を刻んだ倭寇ともどこか同じ印象を受ける。その共通項を見出すべく、新羅商人の発端から考察を試みてみたい。

背景をつかむために、比較的わかりやすい当時の世相から確認していく。

> このころの新羅では、八世紀後半以来貴族、民衆の反乱が相次いでいた上、飢饉・疫病もかなり頻発していた（中略）同時期の九州でも不作が続いていたようで、八世紀末から頻繁に九州飢民への賑給が行われているが、特に八一五年には九州諸国が連年不作のため、三年間田租免除の特別措置が講じられている。同年の五月から九月に長雨が降ったため、諸国で被害が出たとも言う（『日本後紀』弘仁六年今年条）。この頃に九州に近接する新羅でも同様だったのであろう。八一四年五月、新羅西部で洪水が起こり、おそらくこの影響で翌年には西辺の州郡で、飢饉の中で盗賊が蜂起し、討伐軍によって鎮圧されている（『三国史記』新羅本記、憲徳王六年五月条）。新羅でも九州と同様に夏に大雨が続き、その影響で洪水が起こったのではないだろうか。異常気象が不作と災害をもたらし、栄養失調が疫病を蔓延させ、追い詰められた民が盗賊に身をやつし、さらには暴動を起こす。こうした負の連鎖が、当時の新羅でも起こっていた。（榎本、2020、P48）

引用から読み取れるように、当時八世紀末から九世紀にかけて、新羅では内乱と天候不順に伴う不作・食糧不足よって世が乱れていたことが推察される。朝鮮半島含め、黒潮の影響も有り気象

の影響を受けやすい土地柄であることは前述のとおりであるが、現代と異なり、天候不順や自然災害が人間の生きていくための生活と直結する時代においては、まさに死活問題となった。そのような状況下、いかにして命をつなぎとめるか。そこで一部の人間達が取った活路から、新羅商人の活動へと繋がっていったように考えられる。

> 追い詰められた新羅人たちの中では、外の世界に活路を見出そうとしたものもいただろう。八一一年には対馬海上に三艘の新羅船が現れ、一艘は佐須浦に来着したものの、二艘は行方をくらませた。ところがその翌日には二〇艘以上の新羅船が火をともして現れたため、対馬ではこれを海賊船と判断し、先に佐須浦に上陸していた一艘の乗員一〇人中五人を殺害した。(中略)また八一三年には新羅船五艘・新羅人一一〇人が小近島(五島列島の小値賀島)に来着し、島民と戦闘に及んでいる。(中略)おそらくは飢饉と疫病・盗賊にあえぐ新羅人たちが、一か八か海外に可能性をかけたものだったのであろう。(中略)つまり異常気象に苦しんでいた新羅人たちの中には、すでに食料の交易や略奪のために一時的に日本に来た者もいたが、八一四年以後には事態がより深刻化して、日本移住を決意して来航する事例が多くなったのであろう。(中略)彼らはまず飢民として移住し、海外に拠点を築いた上で、祖国との間での通商活動をはじめたものではないか。(榎本、2020、P49)

さて、新羅商人の黎明期を語る表現の中で、「海賊」というフレーズが出現することが実に興味深くはないだろうか。本論をつうじてこの後テーマとして取り上げられる「倭寇」も「海賊」としての認知が一般的である。一方で、貿易商人としての顔を持ち合わせていたことについて後段で詳述されると思われるが、新羅商人においては、まさしく商人であったそのイメージだけが後世に残っているとも言える。その後世に残った商人像には無い一面にもう少し触れてみる。

> 新羅人が身内の「ごくつぶし」を商品として売りさばくことがあった(中略)飢饉に苦しむ新羅国内では、人身売買に関わる需要は限界があったはずで、海外に向けて売られることも少なくなかったと思われる。この頃、唐人が新羅人をさらって奴隷にしてしまう事態があり、新羅はこれを問題視して唐に訴え、唐もたびたび禁令を出した。奴隷売買の手順は、「海賊、新羅の良口を訛掠し(誘い連れ去り)、当管(平盧軍節度使の管下。節度使は要地に置かれ、地方の軍・民・財・政を掌った)の登莱州界及び縁海の諸道に将到し(連れて行き)、売りて奴婢と為す」という (榎本、2020、P50)

こちらは新羅と当時の中国である唐についても言及がなされているものの、端的にとらえるのであれば、奴隷売買の話である。こちらも、倭寇による「被害」として後世記録に残っていく内容との共通点が見出せる。では、話を新羅商人の発端から、実際の活動に移していく。まず、その活動拠点についてである。

> 山東は朝鮮半島の対岸にあるため、古くから中朝交流の舞台となっており、唐羅交通の拠点として多くの新羅人が居住したようである。赤山浦は新羅の中央政界でも力を持った張保皐の拠点でもあり、(中略)張保皐は新羅から唐にわたり、三〇歳頃には軍中少将として武寧軍節度に仕えていた。新羅の飢饉を避けて、唐で軍人になったのかもしれない。その後帰国し、八二八年に興徳王に進言して、奴隷貿易禁止を名目として新羅西南の莞島に清海鎮の設置を建言し、自らその大使となった(中略)ここは以降、唐羅日貿易の一大拠点となる。(榎本、2020、P52)

唐羅日貿易とは、言うまでも無いが、新羅と唐そして日本を股に掛けた貿易を意味している。張保皐に関する記述が続くため、先に参照しておく。

張保皐が清海鎮を設置したのは、海上貿易に対する影響力の増大が主要な目的であろう。彼は「海島人」と呼ばれる海民の出身であり、海のもたらす富への関心は強かっただろう。（榎本、2020、P52）

さて、本節では張保皐と言う人物について詳述する紙面が割けないため、深入りは避けるものの、当人が「海島人」という海民の出身であることと、活動の拠点が大陸山東であったことは、倭寇の出自と活動域の原点を探る上でも重要な手がかりとなるように思われる。そして何より、海商として日常的に海上を往来していた彼らの航海術や造船術は後世へも引き継がれていくこととなる。

彼らは海を通じた物資輸送をなりわいとしている以上、生き残って帰ってきた後もまた公開に従事することになる。彼らはその時の経験から、地理や気候など航海に関わる知識を蓄積していったことだろう。その知識は仲間内で共有され蓄積され、彼らの航海を確実で安全なものにしていった。（榎本、2020、P60）

また、新羅船については当時の日本国内でも評価が高く、「新羅船が風波に耐えることができるP59」との理由から、太宰府でも新羅船の活用を推奨したと思われる記録も残っている。加えて、新羅商人についても「船の性能のみ（中略）ではなく、船員の航海知識 P61」を評価しつつ「「新羅海商たちは、日常的に海を越えて行き来する人々であって、海上交通を生業としていた専門家 P61」と称して一目置かれていた様子も伺える。

そのような新羅商人であったが、時代の変化に伴って衰退への道を辿ることとなる。

東シナ海の交流を一変させた新羅海商だったが、まもなく日本が資料では、彼らの活動がほとんどみられなくなる。これは八四一年一一月、張保皐の滅亡から始まった。張保皐が同年に反乱を起こすと、閻長という人物がこれに合流すると称して、清海鎮の張保皐幕下に投降してきた。張保皐はこれを信じて受け入れ、ともに酒を酌み交わしたが、張保皐が酔うと閻長はその剣を奪って惨殺してしまった（中略）これ以後新羅と海商たちの関係はギクシャクし始める。（榎本、2020、P63）

ある意味においては、海商として影響力を持ち出した新羅商人に対して、新羅という中央政府が歯止めを掛けに行ったという見方も出来る。このように、当事者たちは生業として変わらずに活動している中でも、外部環境（含む中央政府の意向、法施行等）の変化によって、ある時期を境にならず者やアウトローというレッテルを貼られることを余儀なくされる場合があった。これは、新羅商人や倭寇のみならず、歴史を紐解いていくほどに見落とされてきた数多の人間集団に当てはまるものではないだろうか。

また、時を同じくして新羅商人に代わり、唐を拠点とする唐海商が台頭してくることとなる。しかし、ここで注目に値するのが、呼称と拠点、そして構成人員の出自の関係性である。

つまり唐海商と扱われている者が民族的な意味で唐人だとは必ずしも言えず、実際には唐に拠点を置いた新羅人を唐海商と扱う場合も多かった。（榎本、2020、P66）

恐らく、現代のように個人の籍を証明するパスポートのような証明書が存在しない時代においては、そもそも国籍を意識していた人間が少なかったと推察する。歴史を復元していく際に陥りがちな現代の感覚での認識（バイアス）を避けることも肝要である。その上で、唐海商として記述が残る人間を想像すると、彼らの拠点、ないしは風貌に代表されるイメージに紐付く地域が呼称に付随したものと考えることが自然に思われる。これは、先の新羅商人においても、必ずしも新羅で生まれ育った貿易をする人間を指すわけではなく（もちろん、その黎明期においては実際に新羅の土地出身者が多かった可能性を否定するものではない）拠点とした新羅の地名との関係が深く、倭寇についても、倭という当時日本地方を指した土地の出身者を示すものというよりは、倭を拠点として

いた人間集団と捉える方が理に適っているのではなかろうか。
　最後に、その後の時代へと残る航海航路に触れつつ、倭寇の出現に繋がる時代背景を簡単に確認していく。

> 張保皐滅亡の影響はもう一つあった。この頃から新羅沿岸を経由しない東シナ海直航ルートが用いられるようになるのである。（中略）新羅海商からすれば新羅を経由したほうが安全だった上、清海鎮を含む新羅沿岸部との関係もあったから、あえて東シナ海を利用する必要はなかった。だが、新羅の混乱は、新羅沿岸部を避ける動機になったはずで、その結果東シナ海直航ルートが開拓され、恒常的に利用されるようになった（中略）技術の壁を乗り越えれば、直航ルートの方が経済的には可能性を秘めいていた。（中略）十五世紀には東シナ海直航ルートが明によって日本の入貢路に指定された（中略）つまり遣明使が絶えるまでの七〇〇年間この航路は東シナ海の動脈であり続けた。（榎本、2020、P65）

また、海商が担った貿易の形態についても、「九世紀末以後も日唐・日宋間には一定の頻度で海商の往来があり、船便もあった P95」という程度で、新羅商人によって頻繁な往来があった時代から、十世紀にはすべての貿易が国家の管理下に行われるようになる。その主な要因として、朝廷による貿易品の嗜好が挙げられる。

> 朝廷が優良品を確保するためには、海商が来航したらすぐに公的管理の下に置かなくてはならない。海商管理と搭載品の確認は、来航地が九州ならば大宰府、九州以外なら国司が担当した。（中略）このように日本では、九世紀の間には官貿易を確実に遂行するためのシステムが出来上がっていた。（榎本、2020、P101）

なお一方で、すべて国家が把握するようになるとその弊害もうまれてくるのが必然であった。

> 当時は商取引一般について公定価格が存在し、官貿易に当たってはそれに従って支払えばよいともいえるのだが、それがあまりにも実勢レートとかけ離れてしまうと、官貿易自体が忌避されて、貿易船の来航がなくなったり、密貿易に走られたりする恐れもあった。（榎本、2020、P101）

さらに時代が下り、12 世紀の平家滅亡前後になると朝廷の力も及ばなくなってなのか、大宰府による海商や貿易の全面管理もなくなっていったようである。当時の太宰府の姿勢は、「その貿易への関与というのは、貿易を行う当事者が鎌倉幕府による代行者としてのものであり、往来する貿易船全体に対する管理者としての姿は、もうない。（中略）一元的な貿易管理は終わりを告げた。」（榎本、2020、P149）に表れているように、積極的な関与はだいぶ薄れていった。その姿勢と呼応するかのように、海商たちの活動が盛り返していった。

> 大宰府による一元的貿易管理は、海商からすれば国家による大口取引や滞在中の安全を保障するものでもあった。その終焉によって、海商たちは恒常的な取引相手や保護者の獲得に走らざるを得なくなる。（榎本、2020、P150）

つまり、海商たちはある種の自由市場のなかで、自らの商売と身の安全のため活発に日宋間を往来していくこととなる。そして活動が活発になる中、中央政府が定めるルールと、その管理限界を突くような形で実需を優先させた動きも見られるようになる。
　貿易の活性化に伴って、宋では違法行為も問題にされるようになってきた。特に問題になったのが、宋銭密輸である。この頃日本に大量に輸入された宋銭は、宋では原則的に輸出禁制品だった。宋はたびたび宋銭密輸の禁令を出しているが、たびたび出しているということは、あまり守られていなかったということでもある。市舶司では入出港時に必ず船内のチェックをすることになっていたの

だが、実際には銭を海辺の人家に預けたり海島に埋めておいたり、小船で銅銭だけ運び出しておいたり、チェック前に船を出してしまったり、さらにミもフタもないが、ワイロで見逃してもらったりと、様々な脱法手段があった

ただ、このような時代も 13 世紀には終焉を迎える。モンゴル帝国、元の台頭である。南宋が元の支配下に下ると日本の貿易相手となっていた浙江が一転して、軍事的対立相手の元に様変わりしてしまう。また、「弘安の役後、日元間では警戒態勢が極限に達し、数年間（中略）貿易船の往来した形跡がなくなる。（中略）有事体制下、鎮西探題の設置に象徴されるように、博多への支配を強めた鎌倉幕府は、軍事的な必要があると判断する場合、交通統制を行うこともあった」（榎本、2020、P175）のである。このような時代状況、そして対馬・北九州に元寇が残した爪あとも絡まる形で、いよいよ倭寇の発生へとつながる。

1-3倭寇の台頭（十四-五世紀）

ここからは、本論のメインテーマである倭寇について論じていく。なお、後段との重複も避けるため、前述からの時代の流れを汲みつつも、倭寇の概要についてなるべくシンプルにまとめていく。

まず、時代背景である。十三世紀に入ると大陸で勢いを増したモンゴル帝国による侵攻がアジア各地で繰り広げられる。その中でも十四世紀の半ば頃まで、およそ一世紀半もの間侵入を繰り返され戦争状態にあったのが当時の高麗、現在の朝鮮半島である。度重なる侵略と、長期間にわたる戦争の上、モンゴル帝国（元）の支配下に下ることとなる高麗では、多くの犠牲者を出しつつ民は疲弊し切っていたと言われる。「高麗に侵入した蒙古軍は、男女無慮二十万六千八百余人を捕え、多くの高麗人を殺し、その通過地区は灰燼に帰した」（田中、2012、P34)という。高麗が堕ちたことによって、日本への足掛かりを得たモンゴル帝国（元）が目指した先が日本であった。文永の役・弘安の役と呼ばれる元寇である。一般的な認知としては、見事に敵襲を追い払ったため日本は無事であったという類いのものであるが、実際には「文永十一（一二七四）年一〇月五日、元軍・高麗軍あわせて三万数千人が、（中略）対馬の防衛隊を破り、壱岐をひとのみにして」（村井、1993、P139)と、通過地点であった対馬・壱岐が制圧され、その有様は高麗で見られた灰燼ともいえる甚大な被害をもたらしという。人心と田畑を踏みにじられ、命をつなぎとめるための行動への動機がもたらされる状況は、八世紀にみられた新羅と通底する。

次に、倭寇の特色を見ていく。その際たる特色は、現代において「倭寇＝海賊」のイメージとしても残るとおり、海賊まがいの活動である。時代背景でも述べたとおり、前述の新羅商人の誕生前夜と状況的に類似点が見られ、それに伴い活動の側面においても、命をつなぎとめるためという大命題が意識される。

> 倭寇の特色は、（一）行動の目標が、米穀などの生活必需品の獲得におかれていたこと。すなわち、租税としての米穀を運ぶ漕船と、それを備蓄しておく官庫とが主要な攻撃対象とされたこと。（二）高麗の南部沿岸ばかりでなく首都開京（開城）付近にまで、しばしば攻撃していること。（三）はじめ二十隻くらいであった船団から、兵数三〇〇〇とか、船数四〇〇余とかいわれる大規模な倭寇があらわれたこと。などがあげられる。（田中、2012、P36）

船団の規模に目を向けると、新羅商人の時代からの技術革新が見て取れるように大規模化が進んでいる。また、その規模が大きくなったためか、「『高麗史』によりますと、これを境に倭寇は女・子どもまで皆殺しにするようになり、朝鮮半島西南部の海岸地帯は「蕭然一空」、人影がなくなってしまった」（村井、1993、P190）というように新羅商人の時代と比べてより被害や残虐性に関する記述が目立つ。また、倭寇の構成人員についても触れておくのであれば、「倭人は一～二割で、朝鮮人が和服をかりに着て徒党して乱をなしたのだということを聞いている」（田中、2012、P40）のように、必ずしも倭人（日本人）ではなかったとの見方もある。一方で、新羅商人・唐商人について述べた、当時の国民観と拠点とした地域の呼称からの分析を試みるのであれば、朝鮮・日本（対馬・壱岐・

九州）という元寇により疲弊した地域を拠点にした人間集団であったとも考えられるだろう。当事者の名前から、日本風の名前か朝鮮風なのかというアプローチにより、服装は A 人ながら、実際は B 人と思われるとの筆者が当初見出した考察も興味深く受けとられるものの、判別をしようとする価値観そのものが、現代の捉え方に寄った思考なのかもしれないと改める。加えて、倭寇の活動地域であるが、朝鮮・日本のみならず中国大陸へも進出をしている。「中国での舞台は、朝鮮半島に近い山東の沿岸が最もはなはだしく、ついで江蘇・浙江・広東の諸地方におよんでいる。倭寇は沿岸の住民を掠めたり、官米を襲ったり、高麗で行ったのと同様な行為を明でも行った。（田中、2012、P64）」この東シナ海を舞台にした版図は、新羅商人から時代とともに受け継がれてきたものとも考えられよう。

そして、十五世紀も程なくすると、倭寇の被害に頭を悩ます朝鮮・中国の中央政府が倭寇対策に乗り出すことになる。単なる軍事行動や規制のみならず、貿易商人や役人として取り立てることによって懐柔するなどの方策によって倭寇の活動は、一旦沈静化へと向かう。

> 政治折衝と軍備の拡充、倭寇の首領に対する降伏勧告、通商許可、倭寇自身が奥地に深く入りすぎて自滅したことなどの諸要因がかさなって、倭寇は変質・分解を余儀なくされた。（田中、2012、P55）

1-4 中世倭寇国の王 王直（十六世紀）

本節の最後では、後段に続く倭寇の輪郭を具体化するため、倭寇の最も隆盛を極めた時代（十六世紀）に栄華を誇った王直という人物像を確認して締めくくりたい。

十六世紀となると、主に朝鮮で行われていた倭寇の懐柔策が予算の都合などにより影響力を落としていくとともに、明（中国）では民間による貿易を制限する海禁政策が取られるようになる。このことによって、端的には、貿易商人としてその貿易を認められていた人間（元倭寇など）がある時点を境に、貿易商人という肩書きを外され、そして貿易そのものが違法となる状況が生まれた。さて、昨日まで半ば中央政府に認められつつ当たり前のように生業としていた活動が一転、中央政府の後ろ盾（ルールや規範）をなくすわけである。それどころか、その活動が違法、つまり取り締まりの対象となっていく。そこで現れてくるのが、王直のような武装した密貿易商人である。明確なルールの無いなかでは、貿易において双方の不正を未然に防ぐことが肝要であり、取引をまとめるためには調停者の存在が必要になる。ときに力尽くで、取引に応じようとする相手には、武力を持って対抗するための武装も辞さなかった。

王直をこのような大勢力にのしあげたのは、かれの商業取引の方法が適切だったからである。密貿易はもともと違法の貿易であり、大きな利益がある一面では予測できない危険をはらんだ行為でもあった。需要者と共有者はつねに一定しておらず、浮動的だったし、決済の方法も現金のときもあれば商品で支払われることもあった。信用の基礎はなく、紛争がおきてもその処理を訴えでる機関もない。このような不安定な状態での取引には、双方の当事者から信頼され、不当を断乎として制裁する実力をもった者の存在が必要である。王直は学問もあり計数にも明るく、それに衆望をあつめる性格をそなえていたから調停者としての条件をそなえていたといえる。（田中、2012、P142）

さらには、その影響力を発揮するために公権力までも味方につけていたとも言われている。

> 王直は自分と敵対する海寇の頭目らを倒し、そのことによって官憲に協力して恩を売りながら、自己の海上における覇権を確立していった。（田中、2012、P144）
>
> 五島付近に根拠地をおき、博多や薩摩の日本人と密接な連絡を取っていたばかりでなく、大内義隆などの有力大名とも接触があったことが知られるのである。（田中、2012、P143）

さながら、現代にみられる飛ぶ鳥を落とす勢いの新興企業の創業社長のように、法整備がなされていない、曖昧な間を縫いつつ、既存の大きな勢力を巻き込みながら自らの組織規模を拡大していったとも言えよう。

以上のように、本節では古代海神族から新羅商人、倭寇へと時代とともに主人公を変えつつ、主に東シナ海・対馬海峡という海域を舞台にした歴史を追うことによって、倭寇の原点と実像を考察した。ひとつ確証を持って言えることがあるとするならば、人間の「正しい行い」「悪い行い」の判断は容易につけられないということである。断片的に見れば全く「悪い行い」としか捉えられない人間の活動であっても、その背景に目を転じると、「悪い行い」の中に「正しい行い」とされるものが見出され、共感を禁じ得ないこともある。大切なことは、視野をなるべく広げて高い視座を保つことであろう。

第2節　　火器の変遷からみる倭寇

1-2-1. はじめに

本節では、倭寇に侵攻されていた朝鮮と明の火器に着目しながら、時代認識をしていく。朝鮮は、前期倭寇によって幾度となく侵攻されたにも関わらず、その殆どを防衛に失敗している。火器を利用した戦略、火器の発展方法の特徴を捉え、当時の朝鮮について考察する。明では、後期倭寇が密貿易を主体としていたため、朝鮮と前期倭寇との関係とは異なっていた。一方、火器の発展が目覚しいのはこの時代だっただろう。この火器発展が進んだ時代について考察していく。

1-2-2. 朝鮮の火器からみる軍力

朝鮮の火器について語る前に、東アジアにおける火器の歴史に触れたいと思う。

火薬を用いた兵器、所謂火器は北宋時代の中国で開発された。南宋の時代には、火器が実用化されたと言われているものの、火器が主戦力となって活躍したとは言い難い。何よりも、当時火器を保有していなかった女真族や蒙古族によって滅ぼされたことを考えると、現代に想像されるような簡単に人を殺める道具としての活躍は難しかった。日本の記録として有名な『蒙古襲来絵詞』では、元が「てつはう」という投擲火器を用いている。しかし、元寇の後に日本が投擲火器の実用がないように、魅力こそあれ、実用性には欠けていたと考えられる。しかしながら、このような抗争における緊張感が武器の開発を発展させる。元末になると、金属製銃筒を持つ火器が出現する。また、それらの金属製銃筒には編号を示す刻銘があるものも存在し、元朝統制下における火器の規格化・量産化がうかがえる。朱元璋は、元末の内乱中から台頭した明の始祖となる人物である。彼は、火器の重要性を認識し、明朝樹立とともに火器制度に着手し、専門機関として軍器局及び平仗局を設立した。このことは、火器の管理・統制を強化したことを意味しており、火器技術に対する機密性保持、外部への流出阻止を考慮していることがうかがえる。(久芳 2010 P6)その後の進展として16 世紀に入ると、鳥銃や火縄銃、仏狼機砲といった、実用性に長ける火器へと発展する。これらの火器は、ヨーロッパから伝来したもので、東アジアの軍事的、戦略的発展に大きく関わっているのは言うまでもない。16 世紀における火器の発展は、琉球の貿易に大きく関わり、硫黄の需要が伸びた要因の一つである。

朝鮮における火薬の製造法は、崔茂宣によって高麗末に確立する。崔茂宣は、倭寇の撃墜手段として火薬に着目し、中国商人にその製法を学び、火薬と火器の製造主任となる。

1.　八月，遣海道元帥羅世・沈徳符・崔茂宣，以戦艦百艘，追捕倭賊。(『高麗史節要』巻三一　禑王六年)

2. 倭賊五百艘, 入鎭浦口, 以巨絚相維, 分兵守之, 遂登岸散入州郡, 恣行焚掠, 屍蔽山野, 轉穀于其舶, 米棄地厚尺, 羅世・沈德符・崔茂宣等, 至鎭浦, 始用茂宣所製火砲, 焚其船, 煙焰漲天, 賊燒死殆盡, 赴海死者亦衆, 賊盡殺所俘子女山積, 所過波血, 唯 三百三十餘人, 自拔而來, 賊脫死者, 趣沃州, 與登岸賊合, 焚利山永同縣。(『高麗史節要』卷三一 禑王六年)

3. 倭賊五百艘, 入鎭浦口, 以巨絚相維, 分兵守之, 遂登岸, 散入州郡焚掠 . 羅世・沈德符等, 至鎭浦, 用火炮, 焚其船, 賊守船者, 燒溺殆盡。賊窮怒益盛, 盡殺所俘子女山積, 所過波血 . 唯三百三十餘人自拔而來, 守船賊脫死者, 趣沃州, 與登岸賊合, 焚利山・永 同縣,(中略)(『高麗史』卷一二六)

本内容は、1380 年に発生した倭寇と高麗の最大規模の戦闘であり、高麗軍が勝利した記録を記したものである。本記録にも記載されている「崔茂宣, 以戰艦百艘, 追捕倭賊」「始用茂宣所製火砲, 焚其船, 煙焰漲天, 賊燒死殆盡」「用火炮, 焚其船, 賊守船者, 燒溺殆盡」という点から、崔茂宣ら率いる水軍、崔茂宣による火器の活躍がうかがえる。

本内容で抑えたい点として、火器の使用によって、500 隻の大軍でおしよせる倭寇を撃破したことにある。当時、どのような火器によって撃破したのか詳しく供述されていない。しかし、1409 年による火薬を用いた鐵箭を数十本発射する火車を御前に披露した記録が残っている。(『朝鮮太宗實錄』卷一八 世宗九年)また、この火車に関しては、崔茂宣の功績を継承し製造したものとあることから、当時使用されていた火器もこれに近いものだと思われる。

崔茂宣の活躍もあり、朝鮮における火器の利用を広げていく考えがあった。事実、実戦投入されることは多くなった。しかしながら、倭寇に対する防衛としては効果が現れなかった。理由は命中精度の低さと射程距離である。当時、弓矢での闘いが多い中で、1,000m 以上の距離が出る火車は牽制として大きな意味を持っていた。しかし、その射程距離と牽制という性質から最前線に設置しなければならず、倭寇が近づいてきた時に、短距離戦が不得意な火車、火砲軍が最初に対峙しなければならなかった。このことから、倭寇の牽制役としての火車、火砲軍に所属したい人は殆どいなかったという。(山本 2016 P247)

1. 傳旨咸吉道都節制使金宗瑞。火砲之於應敵。其利大矣。倭寇・野人之所長者在此。然戰則火砲軍爲先鋒。故人甚厭之。欲避火砲軍而投他役者多矣。(『朝鮮世宗實錄』卷八三 世宗二十年)

2. 威吉道監練官啓。火炮放射之法。最是禦賊急務。今本道六鎭各堡軍人等。因愚惑懶惰。全不顧慮。(『朝鮮世宗實錄』卷九七 世宗二四年)

3. 傳旨成吉道都節制使。火砲最禦敵之利器也。(中略)慮其界所儲軍不敷。隈養爲難。若火砲別無利益。不可用。則姑欲停之。其悉熟計以聞。(『朝鮮世宗實錄』卷九三 世宗二三年)

当時、李氏朝鮮の国王であった世宗は、火器という兵器が絶対的なものになると信じ軍備強化等を行っていたが、財政難ということもあり、銅や硫黄といった火器開発、火器訓練に必要な材料を輸入するのは難しかった。加えて火砲軍の人材不足から、前期倭寇に対する防衛策として火器に対する関心は薄れていった。

-小結-

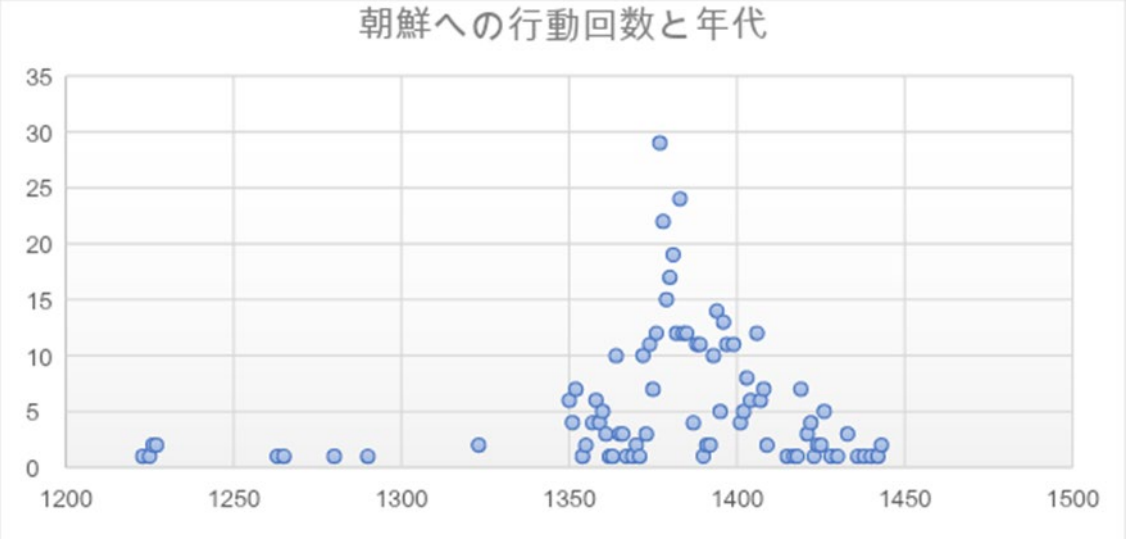


図 1 朝鮮への行動回数と年代

出所:田中 2012 P212 より筆者作成

朝鮮の火器開発は、倭寇の対抗策として重要視されていたものの、さほど進展がなかった。財政的理由もあったが、実戦における利用を避ける人が多かったからである。火砲軍からすると、白兵戦に持ち込まれた場合は死が待ち受けていることを理解していたからだと言える。加えて、上図から伺えるように、1400 年以降は倭寇による侵攻が減少している。倭寇を撃退する機会が減ったことも起因して、火器開発の必要性が薄れたと考える。

1-2-3. 明の火器からみる軍力

明の時代における火器はどのようなものだったのだろうか。前述したように、明における火器開発は朱元璋によって、早い段階で専門機関が設けられる。そのため、14 世紀後半には火器の製造が見受けられた。明の火器製造は朝鮮と異なり、全長 1m にもなる大型火器「大将軍砲」に加え、規格化された鋳銅製小型火器の製造が行われた。これらの製造数は、15 世紀前半には 6 万、15 世紀半ばには 10 万を超えていた。当時の火器には、いずれもトラニオン(筒耳、砲耳)や照準が備わっておらず、命中に対する精密性が欠けていた。しかし、大小の火器を保有する明は、周りに火器を有する勢力がいないことも含め、圧倒的と思われる高い勢力を有していた。実際、明代皇帝の永楽帝は、火器使用の専門部隊である神機営を創設し、本格的な軍事に組み込まれていた。明の火器が長期製造されると、朝鮮や琉球にも伝えられた。(久芳　2010　)

16 世紀から 17 世紀にかけて西欧から伝来した火器が、東アジアの火器技術の躍進をもたらしたことは有名である。この火器の元を辿ると、元代にイスラームからヨーロッパに伝わり、西欧の技術によって改良され、明に戻ってきた事実はあまり知られていない。

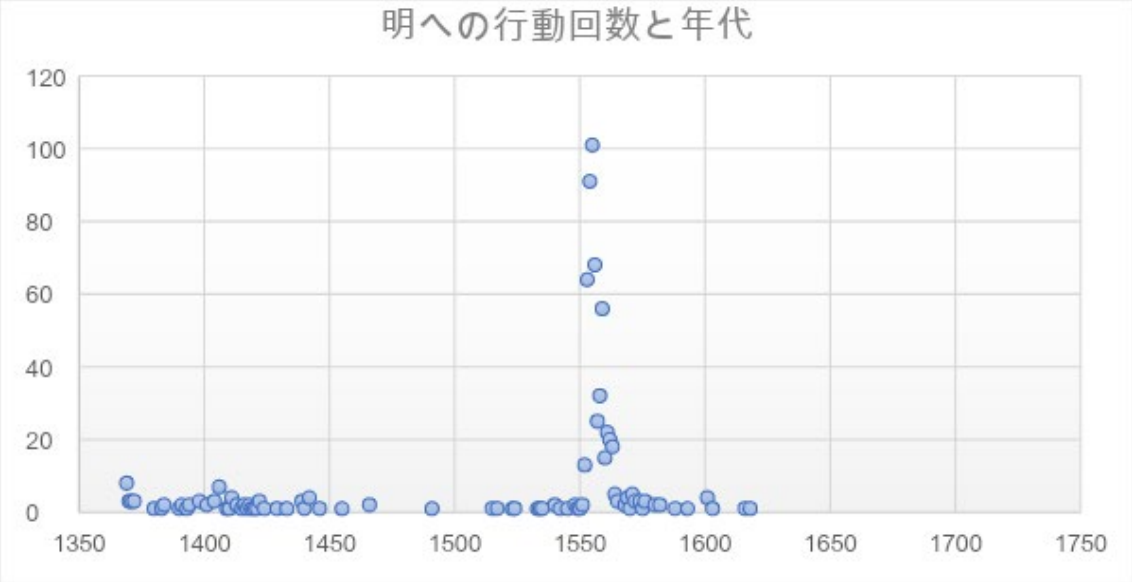


図 2 明への行動回数と年代

出所:田中 2012 P215 より筆者作成

明における倭寇の出現は上図のようになっている。14 世紀後半から明でも見かけるようになった倭寇は、当時朝鮮で最も活動していた。15 世紀半ばに活動が少なくなっているのも、朝鮮に出現する倭寇と共通している。16 世紀に入ると再び活動が増えていき、特に侵攻回数が急増する 1550 年以降の数年は王直の台頭時期と重なっている。ここまで急な侵攻の増加の影に何があったのだろうか。

1. 若曾按、鳥銃之製、自西番流入中国、其来遠矣。然造者多未尽其妙。嘉靖二十七年都御史朱紈、遣都指揮使盧鏜、破雙嶼港賊巣、獲番酋善銃者。命義士馬憲製器、李槐製薬。因得其伝而造作、比西番尤為精絶云。(『籌海図編』巻一三 1562 年)
2. 総兵盧鏜、攻破雙嶼、得寇鳥嘴銃與火薬、方其伝遂広。(『定海県志』巻九)

【久芳 2010 年 P14】

明軍が 1548 年に後期倭寇の拠点としていた「雙嶼」を攻撃し、「鳥嘴銃」を獲得したことが伺える。そして、この時初めてポルトガルの銃が伝わった。この銃は、当時の明が製造していた鋳銅製小型火器と比べて命中精度が高かった。明はこれを製造しようとしたが、製法は伝わっていなかったためうまくいかなかった。後期倭寇の活動が増えたきっかけとして、明軍の雙嶼攻撃は大いにあり得るのではないだろうか。また、後期倭寇が明に侵攻すると、自ずと明軍における火器の命中精度が低いことを感じ取ったのではないだろうか。後期倭寇がポルトガルの銃を使用していたかは明確ではないが、明の趙士楨によって書かれた『神器譜』では、倭寇の鉄砲対策や、鉄砲に対する比較が書かれているため、実際に使用された可能性は高いだろう。

-小結-

明の火器は、元朝の火器を元に改良し製造を行っていた。明代の火器も命中精度は高くないものの、その膨大な製造数と、周囲に火器を利用する勢力がいなかったこともあり、軍事力として大きな意味を有していた。しかし、後期倭寇の登場以後、明の火器は圧倒的な軍事力とは言えなくなる。その要因は、火器を利用した勢力である後期倭寇の出現。加えて、明式火器を超えた命中精

度をほこったことである。明は後期倭寇との接触が増えると、倭寇の火器を中心とした対抗戦略を研究するようになった。日本式銃の模造もその一つであった。当時、倭寇から入手した銃の模造を試みるも、明の技術では実現できなかった。後期倭寇衰退後、降倭、所謂明・朝鮮等に協力する捕虜となった倭寇から技術を教わり、模造に対する技術も少しずつあげていた。このような模造を幾度となく繰り返していた記録からは、現代の中国における模倣からの発展に共通点があるようにも思える。

1-2-4. 火器の変遷からみる倭寇　-まとめ-

前期倭寇では朝鮮を中心に、後期倭寇では明を中心に火器について述べてきた。朝鮮も明も共通して、大型火器を製造し遠距離戦を倭寇の防衛策として活用しようとした。しかし、装填時間や中途半端な射程距離、命中精度の低さもあり、結果的に白兵戦に持ち込まれるのが常であった。白兵戦になると大型火器の価値がなくなるため、朝鮮では防衛策として失敗だったと言える。明においても防衛策としての価値が薄かった。小型火器においても、精度、戦略的利用ともに後期倭寇の方が高かったことから、明の防衛策としては十分ではなかったといえる。

火器の導入過程は、その国々の現代と過去において類似している。例えば朝鮮では、当時では真新しい火器の改良を試み早い段階で活用した。現在の韓国では、芸術的な分野で常に最先端を走っていることを考えると、このスピード感は現在も過去も類似している。明では、相手の模倣と研究を重ねることによって自分の力に変化させようとした。現代の中国で、当初は模倣から始まった杜撰な技術でも、模倣を繰り返すうちに技術力が蓄積され、最先端の技術力を有する国に変化したことと共通するのではないだろうか。

第3節　　中世倭寇の影響力と痕跡

3-1 倭寇の発生要因と行動範囲

十一世紀以降、日本船が高麗へ渡って貿易することはしばしばあった。高麗史の歴史的な書物によれば、とりわけ対馬の人の数が最も多いと記されている。対馬からの貿易船が多かった理由は、生活の資を島外に求めなければならぬ状態であった経済事情と、地理的条件が重なったためだろう。貿易船は美術工芸品・真珠・水銀・柑橘等の方物（土産の物）を献じ、それに対する反対給付をうけることを目的としていた。

当時の高麗はモンゴルの圧力が大きく及んできた時期と倭寇の先駆と目される高宋朝の海寇がみられた時期であった。対モンゴルの折衝に忙殺され国勢の衰えた高麗であった。それまでは進奉船と呼ばれる船が幾度となく日本から渡航していたが、高麗の国勢の悪化により日本からの貿易が拒否されはじめた。これに加えて、先に述べた対馬をはじめとする三島の経済事情から、日本からの進奉船の人々が一転して海賊に転じたのであった。

倭寇の行動範囲は、恭愍王(きょうびんおう、1330―1374)の時代から辛ドン王（高麗末期、恭愍王の時代の僧　https://ja.wikipedia.org/wiki/%E8%BE%9B%E3%83%89%E3%83%B3）の時代にかけて北朝鮮の開城付近から内陸深くに及んでいる。これは華北の主食は粟であり、租の基本的な納税物である粟が四方から開城付近に集中するためと、中央政府に圧力をかけようとするためであったらしい。

このとき倭寇は租粟も強奪したが、沿海の人も強奪したといわれている。ここで捕虜となった人は日本で安価な労働者力として使役され、転売されることもしばしばあったとされている。また、朝鮮側へ適当な価格で売り戻すことも計算に入れて人の強奪をしていたらしい。捕虜の送還で反対給付を受けることを計算に入れていたことから、倭寇の首領が無学無頼ではなかったことが想像できる。（田中健夫、2012、P34.P35）

南朝勢の快進撃に頭を悩ませた幕府は、室町幕府きっての智将として名を馳せた今川了俊を、最後の切り札として 1370(応安 3)年に九州探題に任命した。了俊は朝鮮側の依頼によって捕虜の送還に努力し、数次にわたって数千人を送還した。このことは今川氏と倭寇との間に緊密な関係が

あったことを想像させるとともに、捕虜の送還は単に人道上の問題としてだけではなく非常に割の良い事業であったことが想像できる。

3-2 密貿易者と沿海官豪～中国　詔安(しょうあん)県梅嶺(ばいれい)の事例から～

中国の詔安県は周囲は山や谷で囲まれている地域であり、その地域のなかにある梅嶺は詔安県のさらに断崖絶壁の山や谷に囲まれた場所にあった。梅嶺にアクセスできるのは港のみであり、その地理的条件により密貿易の温床となった。梅嶺にはいくつかの一族が住んでおり、彼らは密貿易経営を行うとともに、海賊勢力ともに結びついていた。またそこの地域に住む家族の衣食住に関わる資金は皆、海賊行為による収入であったとされている。「一族の中から親や子や甥が海賊となって強奪を働き、それによって一族が郷里で生活する資金がもたらされていたのであった。また、郷里で暮らす者たちは、海賊となった親族を恥じることもなく、資金が送られてくることを地域社会の中で自慢していたという」(山本編、三木 2010、p77.p78)

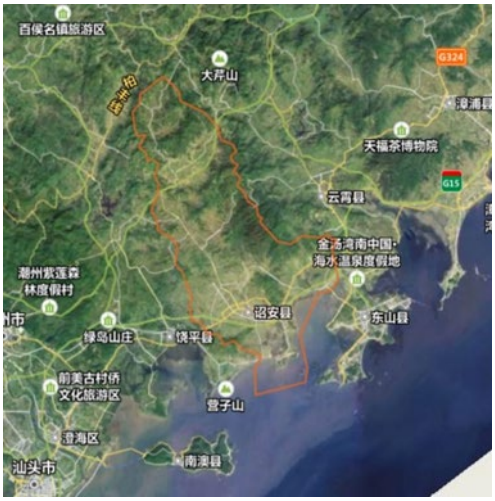


写真 2　中国　諸安県梅嶺

捜拘地図の詔安県　衛生写真

このように海禁を犯してまで海上へ出て貿易を繰り返していたのは、中国の福建・広東・浙江地方の沿岸の人民であった。これらの地方は、地理的な条件としては漁業や沿海航路による物資の中継運搬によって生活が支えられており、歴史的条件としては、南海・東海への門戸としての貿易港を持ち、海上活動のための条件をそなえていた。とくに福建省などは海上生活に依存するものの人口比率が全人口の 9 割にもおよんでいたことが『天下郡国利病書』に記されている。（田中、2012、p183）

3-3 国際貿易への発展

国際貿易の歴史を振り返ったときに、造船技術など移動手段の発展だけでなく、密貿易というグレーな貿易形態が今日にいたる国際貿易への始まりであったのではないかと考えた。「16 世紀になると東アジア海域の貿易がにわかに活発化した。南海諸国に通商移住していた中国人が、ポルトガル人を東アジアの海域に誘導したことがきっかけとなった。1499 年、バスコ・ダ・ガマが率いる 4 隻の商船隊がアフリカの喜望峰を迂回してインドの西岸カリカットに到着した。当時、インド地方の商業はアラビア商人の支配下にあったが、ポルトガル人はこれを駆逐した。1510 年アルフォンソ・デ・アルブケルケはゴアを奪取してインド西岸の商業支配に確固たる地位をきずき、ついで 1511 年にはマラッカを攻略した。

ポルトガル人はさらに香料の主産地であるモルッカ諸島に向かうとともに、明への進出をこころみた。ポルトガル人が明朝に対して公認通商貿易を求めて広東に入港したのは 1517 年である。しかし外交折衝は失敗に終わり、1522 年には商船隊が海上で砲撃駆逐されるという事件さえもおこった。けれども中国貿易の利点に着目したポルトガル人はこれに屈することなく、広東方面においては密貿易の形式で、北方の沿岸方面では海上における出会い貿易の形式によって貿易を継続しようとした。

こうしてポルトガル人の密貿易は、広東から次第に漳州（しょうしゅう）・泉州を経て浙江（せっこう）の寧波（ねいは）方面に展開された。寧波付近の双嶼（そうしょ）港と福建省の漳州（しょうしゅう）月港とは密貿易の中心地となった。このようなポルトガル人の中部シナ地方への進出は、やがて中国海商を仲介として、南下する日本商人の勢力との接触を招くことになるのである。」（田中、2012，p184，p185）

図 3　スペイン・ポルトガルの進出地図

出所：世界の歴史マップ「スペイン・ポルトガルの進出」 より

3-4 拉致家族に対する保障システム

3-2 で梅嶺の衣食は皆、賊の資を頼っていたという事例を紹介した。彼らが行った海賊活動は、非公式の取引活動であり、命を落とす危険性もあった。そのような時代背景のなか、〈澳（※地域の名前）〉という地域は拉致家族に対するある種の保障システムがあったという。「海賊による拉致が頻繁に行われるという現実の中から派生してきたものと思われるが、〈澳〉では拉致家族に対するある種の保障システムとして機能していたのであり、そこからは〈澳〉社会のもつ独自性と〈澳〉社会に暮らす人々の生存のための智恵を看取することができるのではなかろうか」（山本、2010，p85） とある。「ここに見える〈澳〉の内容は、当該地域社会の住民が船隻で航行中に海賊によって拉致された場合、三か月を経過しても行方が分からず、郷里に戻らなかったときは、同船の者がその家族に対して一定の銀両を支払わねばならないというものである。また、その金額は「祭奠」、すなわち葬儀の費用に相当するものだったのである」（山本編、三木 2010，p80）

3-5 澳甲制からサブスクリプション定額への発展

この澳甲制を理解するためには「里甲制」を理解する必要がある。里甲制とは中国、明代から清代初頭にかけて行われた地方村落の自治制度である。1381 年制定。110 戸を 1 里とし、そのうち富裕な 10 戸を里長、残りの 100 戸を甲首戸として 10 戸ずつ 10 甲に分け、毎年輪番で 1 里長と 10 甲首の正役となり、租税徴収・治安維持などにあたる制度である。 明末の福建沿海地域には、これに似た〈澳甲制〉といえる制度の存在が確認することができる。

「沿海の澳港」に「総甲一人」を置くとともに、当該の澳港に停泊する船隻に字号を刻印し、かつ船隻を治安維持のため保甲的システムに編成した。澳港の船隻が倭寇・海賊と通じることを防ぎ、沿海地域の治安を維持する狙いがあった。 海賊や密貿易に対する「接着」等を防止するために「里甲」と「澳甲」との一体化が図られたのであった。

澳制のおかげで治安が良いこの地域で漁業活動を行うにあたっては、定額を銀で納める必要があった。安心して漁業を行うことができる安心料の仕組みが形成されていったことが窺える。

『以上のように、明大の後半から明末にかけて、福建の沿海地域には「澳」を単位とする地域社会が形成されていたといえよう。地形的に入江や海湾に当たる「澳」に施行されていた澳甲制は、一方で治安維持の組織として機能すると同時に、他方では魚課徴収の役割を担っていたのである。その後オウ甲制は、広汎に展開していたと思われる。従って澳甲制の浸透・展開とも相俟って、「オウ」という地域社会に暮らす人々を規制する〈澳例〉が出現してきたと考えられる』（山本編、三木 2010, p83）

3-6 平和的処理への方針へ向かう

李氏朝鮮は応永の外寇で対馬に侵攻したが、対馬の倭寇に痛棒をくらわせる目的で太宗が企画決行した事件で、もともと対馬以外の幕府や大名を対象としたものではなかった。しかし、その鉄槌は突如として対馬の周辺地域へも下り、倭寇はその最後の灯をかき消され、朝鮮側もまた多少の成果を収めたが、戦後処理の問題は対馬及びその周辺地域と朝鮮にとって微妙重大な課題としてのこった。（田中、2012, p82、p83）

朝鮮にとっては、外征に出る軍事行動は国にとって無益なものであることに加えて、日本からの報復にも備えなければならず、国の統制にも影響を及ぼしかねない状況になった。一方で対馬にとっても、朝鮮との貿易が断交されたことは痛手であり、平和的解決へ進むこととなった。

第2章大陸国と周辺国の国内事情

第1節　　前期倭寇とモンゴル帝国のつながり

第1項　高麗とモンゴル帝国と倭寇

『高麗史』によると、1350 年以降がいわゆる倭寇の始まりとされている。1350 年は中国においてはモンゴル帝国・元の統治であり、朝鮮半島においてはモンゴル帝国・元の属国であった高麗国の時代である。さらに時代を遡ると、11 世紀以降には日本船が高麗と貿易活動を行った。13 世紀中頃には、日本船は進奉船と呼ばれ、高麗との貿易が定着していた。しかし 1251 年から 1259 年までの長期に渡るモンゴル帝国の高麗侵攻により、日本の進奉船の貿易活動が途絶えたのである。さらに、1274 年の文永の役、1281 年の弘安の役の二度のいわゆる元寇が起こる。高麗はモンゴル帝国の属国であり、日本の脅威を監視する立ち位置であったため、日本と高麗の交易が復活する環境とはならなかったのである。1350 年からの前期倭寇の活動が盛んになる土壌がすでにあったと考えられることは、田中が以下の様に述べている。（田中、2012、p30）

> やがて、進奉貿易がとだえるときがきた。その時期は、北方におこった蒙古の圧力が大きく高麗におよんできた時期であり、また、倭寇との先駆と考えられる高宗朝の海寇が活動しはじめた時期と一致している。日本から高麗に渡った進奉船は、蒙古との折衝に力を使い果たして国力の衰えた高麗から拒否されて海盗に一転する可能性をつねにもっていたのである。

さらに倭寇の活動が盛んとなる土壌について、田中は以下のように述べている。（田中、2012、p35）

> 倭寇発生の年として注目される 1350 年は、高麗では忠定王の二年、蒙古はすでに国号を元と改めており、その順帝の至正十年である。日本と高麗との通交関係が絶え、元と高麗軍の戦争がおこり、高麗の国内が空前の疲弊の状態におかれていたときに、倭寇という海民の運動がまきおこったのである。キッカケさえあれば倭寇はいつでも発生しうる環境が作りだされていたのである。

つまり、モンゴル帝国による高麗侵攻、その後のモンゴル帝国の属国としての高麗国の立ち位置から日本との交易が途絶えたことが、前期倭寇発生の要因と考えられるのではないだろうか。

高麗は元朝末期の 1356 年に、元の直轄領となっていた元々の高麗領・双城総監府を武力で奪還し、元からの独立を図った。さらに 1359 年には、中国国内で元朝への反乱・紅巾の乱を起こした紅巾賊が高麗に侵攻した。倭寇の活動が活発になった 14 世紀後半は、高麗国内が混乱したこの時期だったのである。

高麗国のモンゴル帝国・元からの独立については、森平が以下の通り述べている。（森平、2011、p71）

> 王権のゆらぎは、高麗官人奇轍（きてつ）の妹が順帝トゴンテムルの皇太子を生み、皇后に冊立されるにおよんでピークに達する。高麗の臣下が元朝皇帝の外威として国王に匹敵する権勢を手に入れたのである。1356 年、恭愍王（きょうびんおう）は奇轍ら国内の元朝害外威勢力を排除し、勢威にかげりのみえはじめた元から離脱政策を開始する。恭愍王の試みは、元（北元）・明との外交戦、倭寇や紅巾軍の侵奪、国内抵抗勢力との葛藤という内外の流動化した情勢への対応におわれるなか、必ずしも十分な成果をあげられなかった。

前期倭寇の始まりである 1350 年から、高麗国滅亡までの 14 世紀後半の倭寇の盛んな活動については、「1350 年から高麗が滅びる 1392 年までのあいだに 300 件あまりの倭寇があったとされ、

1377 年の 1 年だけでも 29 回を数える。」（上田、2005、p97）と述べていることからも分かる。

このように、1350 年に倭寇が発生するに至る土壌、1350 年以降の高麗国内の混乱期に倭寇が数多く発生していた背景には、モンゴル帝国・元と高麗間の情勢が少なからず影響していたものといえる。ここにモンゴル帝国と前期倭寇のつながりを見出すことができると、筆者は考えるのである。

第2項　モンゴル帝国・元と倭寇

朝鮮半島から目を移し、中国への前期倭寇の活動は明代に本格化するが、モンゴル帝国・元の末期にも見られたのであろうか。田中は以下のように述べている。（田中、2012、p63）

> 『元史』の至正二十三年（1363）の条に、倭人が蓬州に襲来して、守将劉暹（りゅうせん）がこれを撃破した、十八年以来倭人は、しきりに浜海の郡県に襲来していたが、ここにいたって平和になった、としている。蓬州という地名は広東省にもあるが、ここに書かれているのは山東省の蓬州であろうという後藤秀穂氏の考証がある。
>
> 朝鮮半島で行動していた倭寇が、そのまま山東方面に移動していったものと考えて大過ないであろう。後に明代の倭寇としてあらわれるものが朝鮮への倭寇と一心同体のものであったことから考えても、山東の倭寇の実体は容易に想像できるであろう。『元史』には、右の記事以外には倭寇に関する記述はほとんどないのであるが、さきにも述べたように、これは記録の不備が原因であって、実際にはかなり多くの倭寇活動があったと考えてよいであろう。

また、上田も以下の通り記述している。（上田、2005、p.99）

> こうした流れの中で倭寇は中国にも達するのである。一三五八年は、朝鮮半島でも倭寇が多く襲来していた年にあたる。三月と七月、半島の南海岸に現れた倭寇の船団は、西海岸へと進み仁川に侵攻している。『元史』によると至正一八年（一三五八）に倭寇が山東に現れ、至正二三年（一三六三）までのあいだ、毎年のように沿岸地域を襲うようになったとある。明朝が成立したあとも、山東半島は倭寇の攻撃目標となっている。

これらの記述から、前期倭寇は元の末期には山東半島で活動しており、モンゴル帝国時代に倭寇とモンゴルは接点があったことが分かる。その後、明代に入り前期倭寇は山東半島から活動範囲を東シナ海沿岸地域へと広げていった。

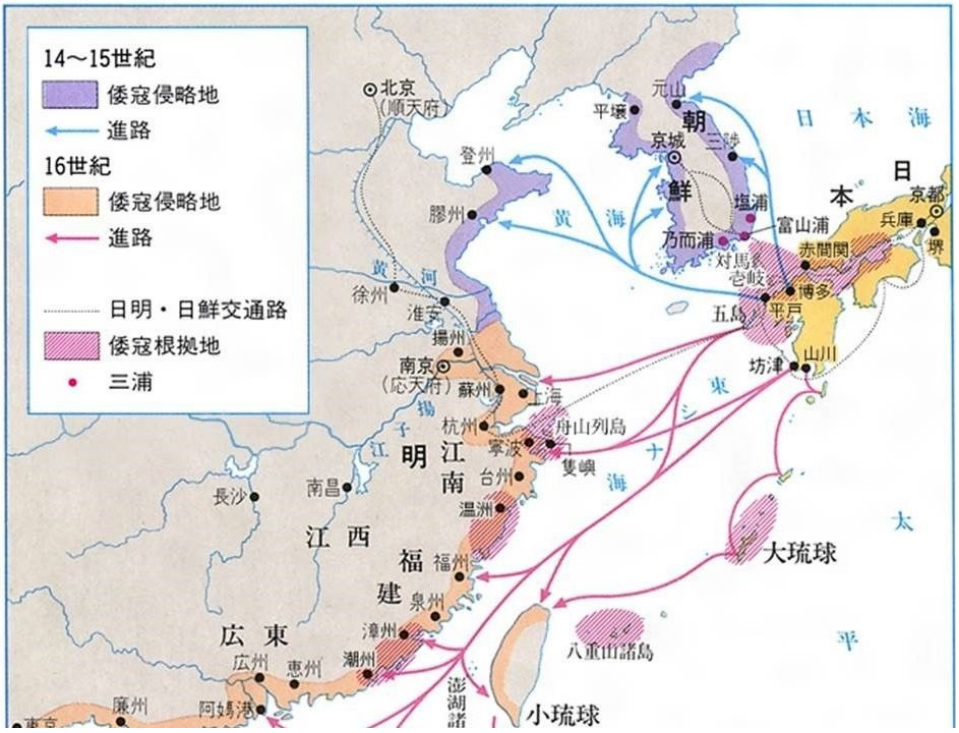


図 4　倭寇の侵略と根拠地

出典:日本大百科全書ニッポニカ　小学館

第2節　　後期倭寇とモンゴル帝国のつながり

海禁政策を講じていた明において、16 世紀に入ると密貿易が盛んとなり後期倭寇へとつながっていった。密貿易が盛んとなった背景は、岡田・神田・松村共著にて以下の様に述べられている。(岡田・神田・松村 2006、p135)

> 16 世紀になると密出国や密貿易がはげしくなり、シナ商人が会場に進出してきた。その結果、福建省漳州の月港や寧波の双嶼(そうしょ)のように漢人やポルトガル人が密貿易にあつまる根拠地ができてきたのである。また、明の商船は、ちょうど最後の遣明船がだされるすこしまえごろから、にわかに日本の各地に来航するようになった。むろん禁令をおかした密貿易で、そのおもな目的は、日本から銀をもちかえることであった。銀は十五世紀なかごろからシナで流通がさかんとなり、これまで現物をおさめていた地租も金花銀(きんかぎん)といって銀で納入し、徭役(ようえき)もしだいに銀で代納することがおこなわれた。当時のシナ社会においてなににもました貴重な存在となった銀は、シナ国内での産出が少なかったのに対し、日本では十六世紀のなかばちかくから急激に増産されたのである。明の商人がこれに目をつけるとともに、彼らに誘導されて、日本商人もシナへ往来しはじめ、ここに密貿易がにわかにさかんとなってきた。

このように日本銀をめぐっての密貿易が、1552 年から 10 年間の後期倭寇の最も激しい時期に至るのである。

そもそもの銀をめぐる交易について 13 世紀のモンゴル帝国・元の時代に遡ると、ユーラシア大陸の広い地域で銀を軸とした交易が繁栄し興隆を極めた。しかしながら、交易を支えるだけの銀の

量に限界点が来ると、経済は破綻した。そして、元から明の支配に変わると、銀を使用しないシステムへと移行したことが上田信の記述からも分かる。（上田、2005、p.91）

> 朱元璋が造ろうとした帝国は、こうした貨幣経済メカニズムの不調を前提としてデザインされた。まず交易は銀を用いず、現物で行うことを目指した。人民から税金を徴収するのではなく、直接にその生産物と労働力とを徴発する。その前提として、人民をその身体レベルで把握することが必要となる。さらに、支配領域の外から貨幣経済が帝国を侵食することを恐れ、外国との交易を民間人に委ねるのではなく、帝国が直接に管理する方法を採用した。

杉山も「社会全体が物々交換による自然経済に近い状態に回帰した。モンゴル時代の経済活況は昔日のものとなった」（杉山、1996、p.232）と述べている。

つまり、モンゴル帝国・元の経済政策から一転して 14 世紀からの明の政策は銀・貨幣から穀物などの現物と徭役としての労働力に転換したのである。しかしながら、明は 15 世紀半ばから再び税糧と徭役の銀納化を認め、16 世紀には日本銀が密貿易により流入することにより一層加速したのである。

その背景には、モンゴル帝国・元が北へと追われた以降も、北元としてその勢力を保ち、16 世紀に至るまで継続的に明を脅かしてきたことが挙げられる。明が 1429 年に北京に遷都すると、1449 年にはモンゴル高原で勢力を拡大していたオイラト部族のエセン・カーンが明に攻め入り、当時の皇帝・正統帝を捕虜とした土木の変が起きた。この事件をきっかけに、国境防衛線となる万里の長城をより堅固なものへと改修することとなった。

さらに、1550 年には北元のモンゴル皇帝となったアルタン・カーンが長城を越えて北京を包囲し、当時の皇帝・嘉靖帝に対し、貿易を拓くことを要求した庚戌（こうじゅつ）の変が勃発した。この事件によって長城のさらなる大規模改修が実施された。

このように、北へ帰ったモンゴルの度重なる脅威から、防衛費用が増大してゆく過程において、銀により税を徴収することがより効率的であり、銀納化へと転換していったのである。そのことは、上田信も以下の様に述べている。（上田、2005、p.230）

> 徭役のなかでまず銀納化が進展した部分は、遠隔地に赴いて堤防の建設など国家的な建設プロジェクトに従事する「雑役」である。こうした徭役は銀に換算して徴収し、建設現場で労働者を雇用して進めれば、遠隔地から強制的に集められた農民などを駆り立てて行うよりも効率的であった。十六世紀のなかばになると、日本から大量の銀が中国に流入するなかで、銀納化はいっそう加速される。

ここまでの経緯を見ると、モンゴル帝国・元の時代から、北へ帰った北元が明を脅かし、その脅威に対抗すべく銀を必要とした明であったが、国内の銀が枯渇してくると密貿易の倭寇による日本銀の流入を抑えることは出来ない状況となったのである。ここにモンゴル帝国と後期倭寇のつながりのひとつを見出すことができる。

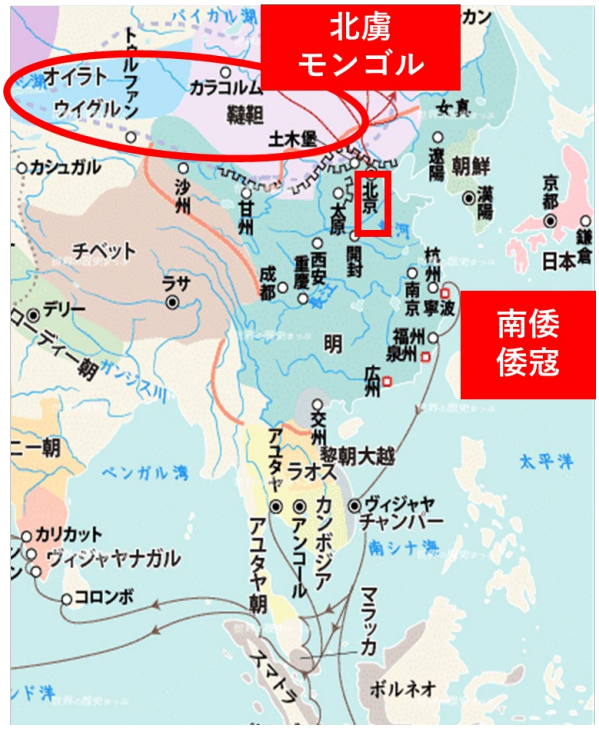


図 5　明代のモンゴルと倭寇の脅威（北虜南倭）

出典：世界の歴史まっぷ　より筆者作成

第3節　　倭寇とモンゴル帝国史の関連～フィールドワークより～

2021 年 8 月 8 日に実施したアジアダイナミズム班・フィールドワークにおける、信州大学准教授・豊岡康史氏の「倭寇の背景・東アジア交易構造の歴史」と題するレクチャーから、倭寇とモンゴル帝国との関連を考察する。

1350 年頃から前期倭寇が本格化した背景として豊岡氏は 2 点を挙げている。1 点目は、日本の南北朝期の戦乱を挙げている。南朝系の松浦一族が南朝系支配地域で調達した物資を高麗に売り渡っていたことと、当時の高麗王朝の貿易制限政策が噛み合わなかったことにより、暴力沙汰がたびたび生じたのである。2 点目に 1350 年代のモンゴル帝国・元の財政悪化を挙げている。モンゴル帝国・元は当時、高麗の宗主国であり、高麗王朝の王は北京で育ち、妻はクビライ・カーン一族の娘であったという関係性の中、高麗を守るべき立場の元朝が、急速に財政で失敗し、治安維持機能が減衰し給料不払いが増えていた。治安維持機能の減衰が、前期倭寇の混乱を収束させることが出来なかった要因といえる。

モンゴル帝国との関連性という点においては、豊岡氏が挙げる 2 点目はモンゴル帝国の財政事情が、元朝末期において、前期倭寇が本格化し収束に至らなかったことと密接に関連しているといえるのである。

図６　フィールドワーク資料
出典:信州大学・豊岡准教授

次に、後期倭寇とモンゴル帝国との関連について、筆者が第 2 章第 2 節で述べた、モンゴル帝国・元の滅亡後、北へ帰ったモンゴルが北辺をたびたび脅かすことへの防衛費としての銀需要と倭寇の密貿易のつながりを豊岡氏の見解と照らし合わせてみる。

豊岡氏は、後期倭寇とは中国の銀のニーズに対応する商人の話であると述べている。明代の銀需要は戦争の話だけではなく、明朝が貨幣使用の必要に迫られ、元代以来の銀使用に戻ったことも要因である。明朝は、税金は銀納、財政は銀で動かし、取引も銀を用いる方向に転換したことにより、銀需要の構造が出来上がったのである。銀の調達においては、明国内では課税率が高いことから銀鉱山開発の抑制につながり、国内での調達は乏しいものであった。そこで日本からの銀の輸入需要につながるのだが、貿易は王朝の独占である。民間貿易は密貿易で即ち後期倭寇が本格化するのである。

そして、明に日本からの銀が流入したことにより、明の経済は拡大し、周辺国との貿易ニーズが高まっていった。また、明朝政府は治安維持と独占貿易の観点から民間貿易を禁じていた為、北辺防衛ラインに兵隊を常に並べていた。その理由は、北へ帰ったモンゴル・北虜といわれる遊牧民が儲かる貿易を求め、戦争を仕掛けると圧力を掛けていたからである。明朝は、北辺防衛をある種公共事業化していたといえるのである。このことを豊岡氏は「北辺防衛は銀流通のマッチポンプであった」と表現している。

密貿易と銀流通、北へ帰ったモンゴルと倭寇は、明朝を介して影響し合っていたといえるのではないだろうか。

図７　フィールドワーク資料
出典:信州大学・豊岡准教授

さらにモンゴル帝国と倭寇の関連性について、明朝は漢民族支配、元朝・清朝は漢民族以外の支配、であり、支配する民族によって、貿易に対する考え方の違いはあったのかという筆者の問題意識に対して、豊岡氏は以下のように見解を述べた。

貿易に対する考え方は、支配する民族によって変わる性質のものではなく、儒教をメインに据えるか否かに考え方の違いが表れるものである。科挙官僚、すなわち儒教を学び、儒教の価値を重んじる人達が権力をもっているか否かであり、支配層の問題といえる。その視点においては、元朝は科挙官僚が居てもいなくても良い時代であり、清朝では科挙官僚は必ずしも全てではない時代であった。一方、明朝は科挙原理主義を信じている社会層が強い時代ではあり、原則主義・農本主義によって貿易に対して否定的な考え方であったことが、むしろ倭寇、北虜南倭を過激化させたといえる。

筆者の問題意識に対しては、支配する民族により貿易に対する考え方が異なるのではなく、社会層の問題であるという結論である。

モンゴル帝国と倭寇の関連について、さらに広い視野で見てゆくと、豊岡氏は「高麗を噛ませた東アジア貿易、東南アジア貿易への華人の主体的な関わり、倭寇は東南アジア貿易と日中貿易を組み合わせた方式によって利益が上がる、という貿易の原型をつくったのがモンゴル帝国・元朝の時代である」、「モンゴル帝国滅亡後も、17 世紀・18 世紀に至る迄、ポストモンゴルと理解すべきであり、即ちモンゴル帝国ありきといえる。モンゴル帝国が無いと次が無い。モンゴル帝国が中央アジアから銀取引の慣習を持ち込んだから、銀の流通が盛んとなり、その後の後期倭寇の銀の密貿易にも繋がっているのである」と述べている。

文献研究によってモンゴル帝国と倭寇の関連性を見出すことが出来たことに加えて、豊岡氏のレクチャーを通じて、前期・後期倭寇の背景にあるモンゴル帝国、さらに 14 世紀～16 世紀の倭寇発生の時代の前後にもモンゴル帝国の影響を見出すことができたのである。

第4節　　明朝の北虜南倭（モンゴルと倭寇）の終息

第1項　明朝の海禁解除と後期倭寇の終息

1521 年～1556 年の嘉靖期は、後期倭寇の最盛期であり嘉靖の大倭寇と呼ばれている。後期倭寇の大頭目である王直は、長崎県・平戸、五島列島に交易拠点を設け、東南アジア・中国・日本を結ぶ交易を殆ど独占していた。王直のめざすところは、明朝に海禁政策を解かせて、海洋商人による交易を認めさせることであった。明朝の側でも浙江総督の胡宗憲が、王直の要求に応じる懐柔策により、投降させて、倭寇を鎮静化させてゆくことへと動いていった。1557 年、王直は浙江総督の故宗憲に降伏し、投獄された。「十一月、王直は千余の部下とともに胡宗憲に降伏した。王直の来投を迎えて、明朝の延議は二分した。王直の願い通りに互市を許そうという意見と、皇朝の対面を重んじて王直を殺そうという意見である』（田中、2012、p.162）。その結果、王直は 1559 年 12 月に斬首された。

倭寇の大頭目である王直の死の影響は大きく、倭寇の活動は杭州・浙江から福建・広東と南方に変わっていくと共に、次第に倭寇の勢力は衰えていったのである。同時に明朝の側も、海禁の緩和へと向かうのである。『王直の死後、倭寇が終息に向かうと、明朝もまた海禁の緩和に向けて動き始める。ついに降慶元年（1567）に「東西二洋」、すなわち華南からヴェトナム・マラッカ方面に向かう西洋航路と、中国から台湾・フィリピンを経てブルネイ方面に向かう東洋航路について、対外交易を行うことが認められた」（上田、2005、p.251）。

明の建国以来、実に 200 年の時を経て海禁が解かれ、海外渡航が認められ、密貿易とされていた交易が公に認められるようになった。但し、日本との交易及び、硝石・硫黄・銅・鉄などの禁制品は引き続き禁止されていたことは付け加えておく。こうして、明の時代における北虜南倭の南倭・倭寇が終息を迎えたのである。

第2項　明朝のモンゴルとの貿易認可による北虜の終息

前項で述べてきた、海禁解除と倭寇の終息と時を同じくして、モンゴルとの北辺地域のおける長年の北虜についても、貿易認可の動きが加速していった。この背景には、1557 年の海禁解除により東南の安定が図れたことがある。中島は「海域アジアにおいて、海禁緩和が東南沿海の安定をもたらしたことは。明朝政府が内陸にアジアにおいても、モンゴルとの通商を公認することをうながした」（中島、2010、p519）と述べている。

そして、モンゴル帝国・元が滅びた後、北へ帰ったモンゴル、北元アルタン・ハーンと明朝との間で、1570 年には和議が成立した。モンゴル帝国・元の滅亡以来の約 200 年の節目といえる事象について、上田は以下の通り記述している。（上田、2005、p.253）

> 隆慶四年（1570）には、アルタンと明朝とのあいだの和議が成立し、大同などに場所と期間を定めて交易を行うこととなった。モンゴル側からは金・銀・ウマ、中国側からは絹織物・糧食・鉄製品などが取り引きされた。以後、相対的に安定した状況となる馬市と呼ばれる交易もまた互市であり、海と陸の二つの局面は連動したもので、明朝は隆慶年間に現実の経済活動に対応した政策を採り始めた考えることができる。

また岡田は、明と北元の和議による貿易認可による双方への効果を以下のように述べている。（岡田、2015、p.223）

> この講和のおかげで、明朝は防衛費の大幅削減に成功し、国境貿易が繁栄した。モンゴル側でも正常な貿易のチャンネルができたために経済が安定し、チベット仏教文化が流入するなど、文化水準も高まった。アルタンは馬市貿易で富を築き、一五七八年、チベット第一の高僧であったゲルク派のデブン寺の座主ソェナムギャツォにダライ・ラマ（第三世）の称号をおくった。

ここに、南倭といわれた倭寇鎮静化への海禁解除により、東南沿海の安定をもたらしたことが、北虜であったモンゴルとの和議へと繋がっていったことに、明を媒介としたモンゴル帝国と倭寇との接点を見つけることができるのではないだろうか。

さらに、海禁解除とモンゴルとの和議が、朝貢システムだけではない周辺国との貿易をもたらし、衰退の道にあった明朝の経済繁栄と延命をもたらしたといえる。

しかし一方で、貿易商人が財力を蓄え、その支援を受けた女真族のヌルハチが台頭し、1583 年にマンジュ国を建国、ヌルハチの後継であるホンタイジが 1636 年にモンゴル帝国の正当継承国家ともいわれる、大清帝国の皇帝・カーンとして君臨することへと繋がっているのである。

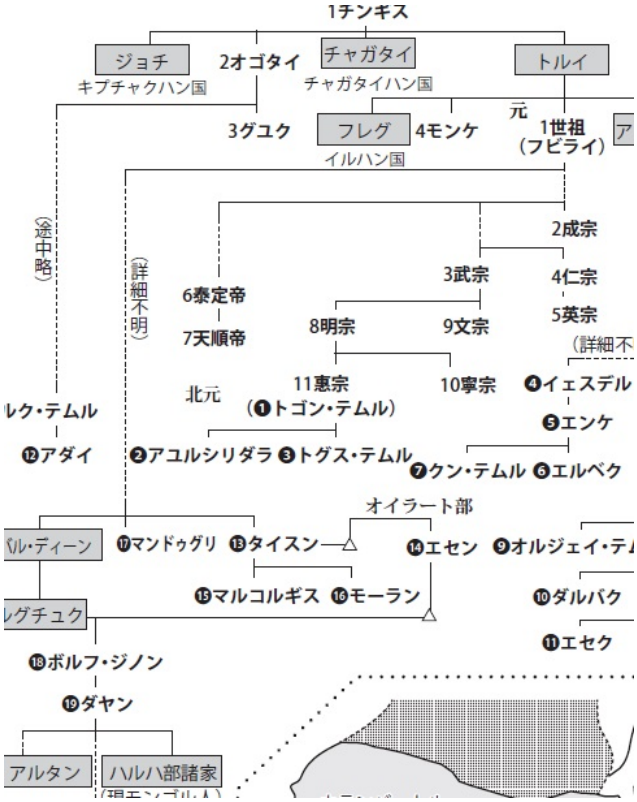


図 8　モンゴル系図

出典：八幡和郎「蒙古史を知らずに中国を理解できない③：アルタンと豊臣秀吉」
（アゴラ言論プラットフォーム　2021 年 5 月 2 日）

第5節　　倭寇と華僑の初期的形成

前節で述べた 1567 年の明朝による海禁政策の解除は、中国東シナ海沿岸地域の海商や住民達の東南アジア地域への移住を促すことに繋がった。

「明における政策転換は、中国人の海外貿易とフィリピンをはじめとする南方諸地域への移住を容易にし、その傾向を促進した。」（田中、2012、p.168）と田中は述べている。

その頃、スペインはアジア進出と、アジアからアメリカを結ぶ航路を確保すべく、1565 年にフィリピン・セブ島に拠点をつくり、1571 年にはスペイン領フィリピンとしマニラに拠点を築いた。1580 年頃には、メキシコ銀が太平洋を渡りマニラに到着するようになるのである。マニラが貿易拠点となったことから、上田も以下の様に述べている。（上田、2005、p.255）

> アジアに於いても、太平洋を越えた銀を吸収する条件が整っていた。マニラを出港して中国に向かった交易船は、互市が行える海澄港と名を改めた福建省の月港にまっすぐ向かった。銀はこの港で水揚げされ、帰路には大量の絹製品と陶磁器が満載された。このマニラー福建間の交易を狙ったのは中国商人である。マニラは海域世界のなかで急速に重要性を増し、多くの中国人が定住するようになった。

海禁政策の解除による後期倭寇の終息が華人の東南アジアへの移住をもたらし、華人社会が現地に形成されていったことは、東南アジアに現代の華僑が形成されてゆく初期段階だったといえるのではないだろうか。

16 世紀の後期倭寇終息後の華人の移住が華僑の始まりと言えるのであろうか、という問題意識について、インターゼミ・アジアダイナズム班の 2021 年 8 月フィールドワークにおいて、信州大学准教授・豊岡氏に見解を求めたところ、豊岡氏はおよそ以下の様に述べた。

> 初期というならば、16 世紀より以前、元末である。元朝の最後の頃に海外の現地に行って居を構える動きがあったことから、本格的に移住者が出てくるのは元末であったと考える。それを統制したかったのが明朝の鄭和の大遠征、永楽帝時代である。その時代にはすでに、現地の華人が居たのである。統制とは、王朝による貿易の独占だ。明代・鄭和の大航海の目的は、貿易の統制だった。海外で民間人が勝手にやることは可としない。元末に移住者が存在し、明代はそれを統制し貿易を独占する動きとなったから、後期倭寇が発生したという流れになった

豊岡氏が述べた様に、元の時代、モンゴル帝国による海上とユーラシア大陸における交易が盛んとなったことからも、華人の移住があったことは事実である。その上で、後期倭寇の活動が、その後の海禁政策解除と交易認可に至り、華人の集団的移住、即ち華僑の初期的形成に影響をもたらしたと筆者は考えるのである。

倭寇と華僑へのつながり、モンゴル帝国・元の時代の華人の移住・定住、19 世紀アヘン戦争期以降の華僑形成、現代の華僑・大中華圏にどのような関連性が存在するのかという点については、残された課題としてゆきたい。

第6節　元・明各王朝の通貨体制が倭寇の興亡に及ぼした影響を考察する

前節と少し重なる部分があるが、ここからは倭寇が出現し活動を広げていく要因のうち、経済的な環境の変化について、通貨の側面から考察する。

第1項　経済環境と海賊の盛衰

現代でも同様だが、海賊や山賊は、警察や海軍の統制力が十分に行き届かないところで発生し活動を広げる。前期・後期倭寇はともに元・明の帝国にとって周辺地域である海域を中心として勃興した。前期倭寇については朝鮮半島と元の周辺海域、後期倭寇については明の沿岸部から東南アジアにいたるまでの広範な海域であるが、いずれも二つの王朝の勢力が弱まるか、周辺地域である日本や朝鮮半島の勢力に混乱があり、隅々まで行き届かなくなった時期と考えられる。

そこで、各王朝の勢力、つまり統制力の強弱を測るものさしの一つとして、当時の通貨の使われかたを振り返ってみたい。当時は過去の王朝時代の銭貨や紙幣、金銀、私鋳銭、物々交換が併存しており、その中で王朝が発行した通貨が使われる度合いや範囲は状況によって大きな変化があった。各王朝が認可した通貨の有効度は、各王朝の統制の有効度合いと連動するのではないかと考えるためだ。

この考え方は、倭寇(海賊、海商)が衰退していった理由を理解する助けにもなりそうだ。後期倭寇は明の軍による討伐、九州の大名による統制強化、1588 年の豊臣秀吉による海賊禁止令などを経て衰退していった。明軍や戦国大名が火器・重火器を備え、それまでより規模が大きい軍事力が勢力の必須条件となっていく中で、私兵であり大規模軍事力となりにくかった海賊・海商の活躍余地が低下したと考えられるのではないか。倭寇は最大時で船数百隻規模の勢力が記録に残っているが、中～大規模の軍勢が長期にわたって規模を維持できた例はない。

この点については 15～19 世紀の北アフリカ海賊の盛衰からもヒントが得られる。フィールドワークの一環としてお話をうかがった桃井治郎清泉女子大学准教授との議論では、欧州で常備軍を持つ近代国家の定着、植民地体制の強化などが進むにつれてヨーロッパ中心の国際関係が成立し、各国の個別外交が国際社会の統一見解の押しつけへと変化するなかで北アフリカの海賊が消滅していったと考えられるとの示唆をいただいた。

第2項　元・明の中国王朝の盛衰と倭寇の勃興との関係

ここで元・明の王朝および高麗・挑戦の勢力の状況と、それに関連する倭寇の活動時期を簡単に振り返っておく。

前期倭寇の活動は朝鮮半島とその周辺が多く、その活動も 14 世紀半ばから 15 世紀にかけて拡大した。朝鮮半島で倭寇の記録が初めて現れたのは 1223 年で、以降、繰り返し朝鮮半島で略奪等を行った。同時期、モンゴル帝国は 1231 年から 1259 年までの長期に渡って朝鮮半島に侵攻し、1259 年に高麗朝廷の降伏によって朝鮮半島は元の支配下となった。高麗王朝は、南北で戦乱を強いられていたといえる。かたや、後継者争いをクビライが制してモンゴル帝国第 5 代の皇帝となり国号を元としたのが 1260 年であり、国としてまだ安定していなかった時期といえる。高麗王朝を支配下に置いた後、日本へ 1274 年(文永の役)、1284 年(弘安の役)の二回にわたり侵攻した。

この後、クビライは 1274 年の第一回日本遠征の後、1276 年に南宋を下して肥沃な江南地方を手に入れた。そしてモンゴル帝国はクビライとその子孫が帝国の東半分を、そしてチンギス裔のその他の皇族が皇帝の下に地方王国をおさめる連合体のような形で安定した。

しかし、1300 年代にはいると後継者争いが激化、また日本、ベトナムなどへの出兵で戦費がかさみ、1300 年代半ばになると財政が逼迫し、紙幣が乱発され、紙幣の価値が暴落していく。さらに 1351 年には紅巾の乱が起こり、経済の中心地であったとされる江南を失った。前期倭寇が最も活発化したのもこの頃である。

第7節　　元の通貨政策

第1項　元朝前半

クビライは元朝の皇帝になった 1260 年、諸路通行中統元宝交鈔(ちゅうとうげんぽうこうしょう)を発行した。当初から通貨として発行された世界最初期の紙幣である。それ以前は、宋代に鉄銭の預り証から発展した手形が数多く流通し、紙幣に近い使われ方をしていたが、その発展形である。

日本銀行金融研究所・貨幣博物館によれば、金の末期には「銅銭は国外流出や鋳潰し等により絶対量が不足する中、地方の軍事勢力により発行された各種紙幣のほか、銀や絹が主たる貨幣となっていた」(日本銀行金融研究所)。そうした中で紙幣発行に踏み切った背景には、広大な交易圏をかかえた元朝としては、ムスリム商人による西方の国際交易のために銀を確保しておく必要があったこと、南宋の海上貿易路が勢力範囲に入り、交易圏がいっそう拡大する中で、補完するものとして低コストで迅速かつ大量に製造が可能で、持ち運びやすい紙幣が選ばれたようだ。

それまで紙幣として流通していた手形(会子、交子など)や金、銀は、兌換機関である平準庫で鈔への交換が進められた。金、銀、銅貨は民間使用を禁じた。

塩の専売で鈔を使用したほか、商税の納税も鈔へ移行し、鈔の発行量も増大していった。価値の下落を抑えるため、傷んだ紙幣の交換機関「回易庫」を設置し流通量のコントロールをはかったほか、1287 年は至元通行宝鈔を発行し、中統鈔 5 対至元通行宝鈔 1 の交換比率で回収をはかった。

図 9　復元された至元通行宝鈔

出所:日本銀行金融研究所

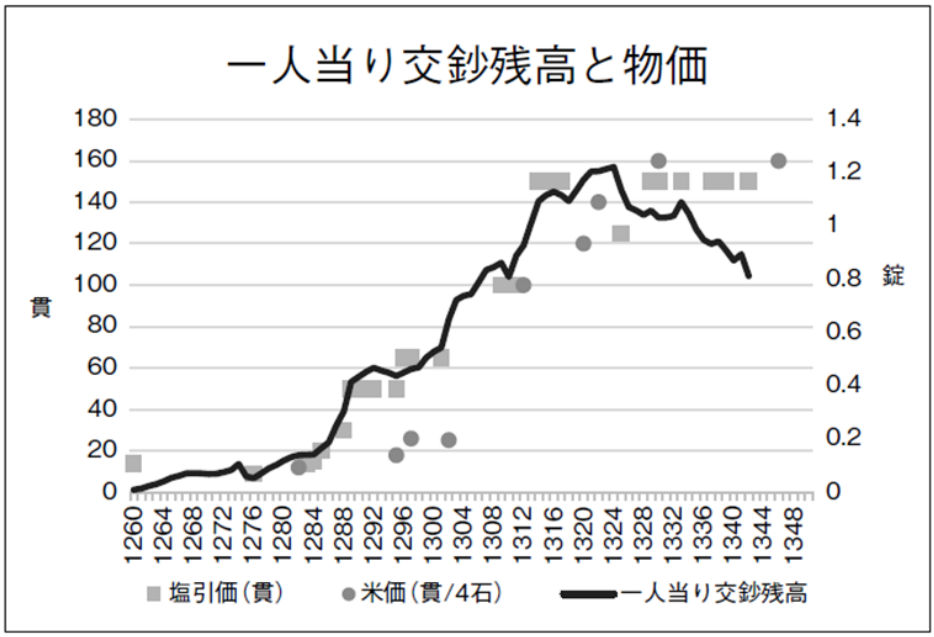
ただ、鈔だけが通貨として元の全土で使用された訳ではない。徴税においても、鈔の比率は増えたとはいえ、銀、絹、綿、米なども引き続き使用されたことが分かっている。江南の一部や福建など支配が徹底できなかった地域では「大量の銅銭が残留し、旧銅銭使用禁止にもかかわらず、江南支配の脆弱性もあって、その使用は排除できなかったようである」(明石、2021、p.53)。雲南では地方発行紙幣やタカラガイなども通貨として流通していたようである(安木、2012、p.129)。紙幣の減価を抑えるために流通量をコントロールしたこと、またモンゴル帝国の分散型統治スタイルから地方の独自色を許容したことと、その裏返しとして元王朝の統制力が行き届かない地域があったこと、などの要因がからみあっていたと思われる。

こうして完全ではないながらも共通通貨が安定的に使用されるようになり、銀による西方を主とした広域貿易を補完した結果、パクス・モンゴリア、パクス・タタールと言われるような広範な地域で比較的安定した時代が訪れた。しかし、元にとって周辺地域である朝鮮半島における倭寇は散発的に続き、14 世紀半ばに大きく拡大することになる。

第2項　元朝後半

現代のような経済理論や貨幣理論がないこの時代、専門知識を持つ専門家を欠いた状態での元の貨幣政策は経済の安定に必ずしも強い支えにはならなかったといえる。

1300 年代に入ると元朝の後後継者争いが激しくなった。また日本、ベトナムなどへの出兵で戦費がかさみ、1300 年代半ばになると財政が逼迫し、紙幣が乱発され、紙幣の価値が暴落していく。図は明石(2021)が推計する交鈔の紙幣価値と米価(江南米価)、塩引価(公定価格)の推移である。1200 年代末から発行残高が急増し、1320 年前後には 1280 年頃の 120 倍程度となった一方、物価は 8 倍強になった(明石、2021、P.59-60、P.66)。



注）交鈔残高は本文参照。人口は趙・謝 (1988: 318) を基本に 1260-76 年戸数は陳・史 (2000: 24-26) ならびに『新元史』食貨志 1,『元史類編』記載戸数により戸数時系列を導出し，趙・謝による人口・戸数比をもとに人口数を求め，欠落時期は区間の人口増加率をもとに補完して人口時系列をもとめて，一人当たり交鈔残高を導出した。物価は前田 (1973: 119, 126-27) から引用。

図 10　交鈔の残高と物価の推移

出所:明石茂生 (2021)

1325 年頃以降は物価は高値安定しているが、「銀の私的売買の解禁により市場の銀取引の比重が高まり、交鈔価値の維持のためその発行を抑制せざるを得なくなったことや、また財政の実物部門への依存が高まっていったことなどが変化の要因として考えられる」(明石、2021、p.60)。

1350 年、銅銭「至正通宝(しせいつうほう)」を鋳造・発行するとともに歴代銭貨の通用も認め、またこれら銭貨と等価とする新たな中統鈔(銭貨 1000 文 中統鈔 1 貫)を発行し、銭貨により紙幣価値の保証を図る改革を断行する。しかし、元朝の支配力が低下する中で、銅銭に対する紙幣価値の暴落により、元朝による紙幣制度は破綻・崩壊を余儀なくされた。1351 年には黄巾の乱(1351～1366 年)が起こり、元は経済の中心地であったとされる江南を失った。前期倭寇が最も活発化したのもこの頃である。

朝鮮半島においては高麗では親元勢力が排除され元から独立する。紅巾軍は朝鮮半島にも到来し高麗が撃退に成功したが、同時に倭寇の襲来も激しくなった。またこの時期、倭寇はモンゴル帝国の蓬州も 1363 年に襲ったと記録されている。高麗は 1389 年に対馬に侵攻したが、1392 年に滅亡し李氏朝鮮となった。

このように帝国の政治的安定が揺らぐのに連動して通貨も弱体化し、法定通貨に依存しない密貿易が増加した。周辺地域の政情も連動して不安定となり、海賊の活躍余地が高まったと考えられる。俯瞰すれば、帝国を維持するコストの大きさに耐えられなかった、帝国のコストを維持できるだけの財政構造がなかったということも言えるだろう。

第3項　明朝の通貨政策

1368 年、元は朱元璋に敗れ、明王朝が成立した。それに先立つこと 5 年前、1361 年に、物価安定を狙ったて発行されたのが銅銭「大中通宝」である。当時は、元朝銭、宋銭などの歴代銭、元の交鈔が同時に流通していた。紙幣の鈔でなく銅銭としたのは、元末のインフレで、鈔に対する民衆の信頼が低くなっていたことがあるようだ。(宮澤、2002、p.94)

続いて 1368 年、明の成立とともに洪武元年となり、それとともに洪武通宝を新たに鋳造した。大中通宝も引き続き使用された。宮澤によれば、洪武通宝は最初の鋳造から 2 ヶ月で鋳造中止され、しかし国用が銭が不足して再開されるなど、当初から銅銭を財政運用の基本に据える方針は一定しなかった。鋳造額も初年度で 8900 餘文と少なく、その後増加したものの財政の基軸になるほど十分ではなかった。軍兵士に対する銭賜給が鋳造量を上回る記録が残るなど、銅銭が国家の備蓄に回らない状況であった。当然のことながら、民間における銅銭の流通も十分ではなかった。一方、銀の貨幣的使用は公的には禁止され、金銀を国庫に納入して銅銭と交換することのみ認められていた。

銅銭の供給が不十分な状態が続き、明の経済システムは実物経済の併用を前提とせざるを得なかった。時期によっては、軍糧郡料納入の代価は塩引、文武官の俸禄は米建てだったという(宮澤 、2002)。よく対比されるようにモンゴル帝国が貿易重視だったのに対し、明は農業重視の農本主義であったことも背景にある。農業振興により綿や絹などの貿易取引も盛んになっていた。だが、言えることは当初から財務規律がなかったことだ。経済理論も通貨理論も未発達な時代のことではあるが、現状追認型の場当たり的な通貨政策だったといえる。

1375 年、紙幣の宝鈔「大明通宝」を発行した。銅銭不足、遠隔地取引のため。民間の銀の使用は引き続き禁止された。軍への報償(地方には行き渡らず)、納税の一部として使われた。宝鈔一貫が銅銭 1,000 文(一両)の固定レートとし、これは米一石に相当した。

図2　明　初　の　鈔

図 11　明初洪武年間の鈔

穂積文雄博士所蔵（栄田幸三、1986、p.16）

銅銭の供給量の少なさとは対照的だが、宝鈔発行量は大きく、その価値の維持はあまり重視されていなかったように見える。洪武8年(1375 年)の発行時は宝鈔一貫が銅銭一両＝米一石であった。公定価格はこれ以降も維持されたが、実際に使用された記録からは、洪武19−24年には 0.2 両、30 年が 0.1 両、つまり宝鈔は銀に対して 10 分の 1 に減価したことになる(宮澤、2002、p.109)。

しかし、明政府は宝鈔の価値維持のために印造額、発行額、流通額を抑えようとしなかった。税収に紙幣の使用を拡大するなどの有効な回収策も講じられなかった。洪武 27 年(1394 年)には銅銭の使用を禁じたが、減価はとまらなかった。この状態で財政が破綻しなかったのは、実物財政があったからだと言われる。紙幣の信用が低く十分に流通せず私鋳銭も横行し、民間取引では銀の使用が徐々に拡大していった。実際の使用で等価関係がくずれ物価高騰を招いたことから「鈔法不行」といわるようになった。

ただ、新しく発行された通貨価値の低下が、すぐに王朝の統制力の低下につながったという訳でもなかった。三代皇帝の永楽帝時代、1405 年から 1433 年にかけて 7 回にわたって鄭和の艦隊による大航海が行われたが、その際、マラッカ海峡の海賊行為をやめさせることに成功し、マラッカ海峡での商船の自由な往来が可能になった。

とはいうものの、「外交や異文化交流における功績がいかに大きくても、鄭和が手にした経済的見返りは微々たるものだった」とバーンスタインが『華麗なる交易』で書いたように(バーンスタイン、2010、p.136)、300 隻、3 万人の乗組員という大船団で長い時は数年にわたる大航海は、国としての貿易規模を拡大するほどのものではなかった。むしろ財政的負担の方が大きかったと見られる。

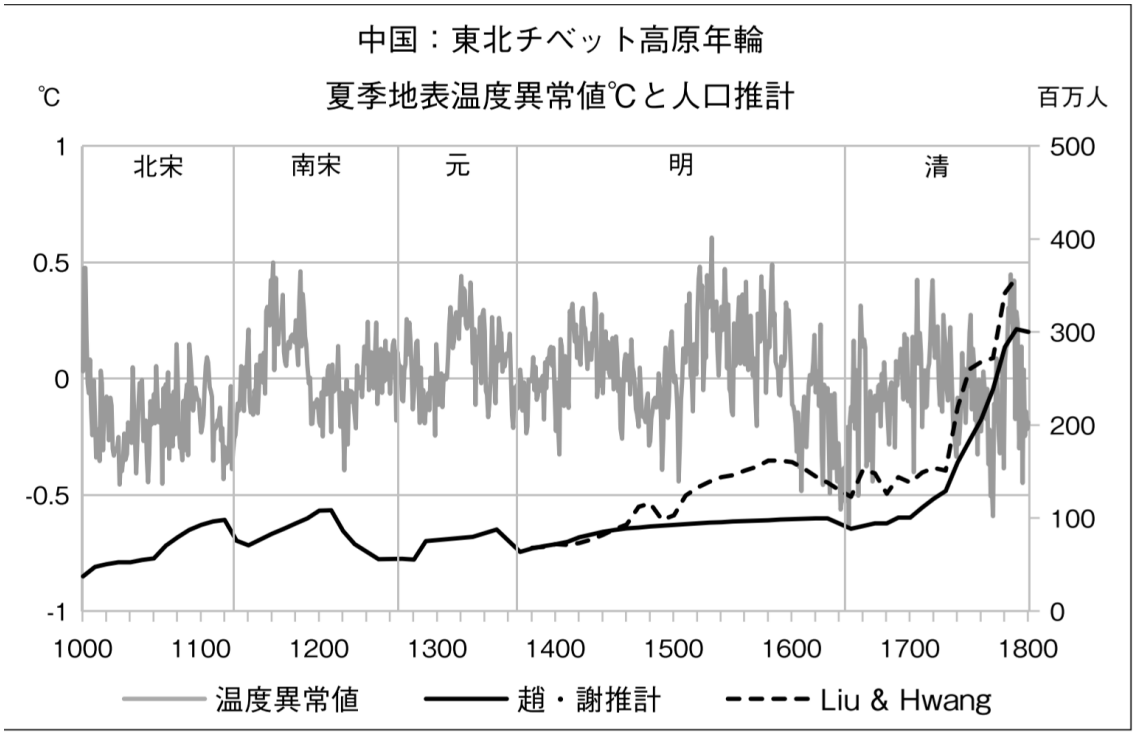
1424 年に永楽帝が没すると明の政治は急速に内向きに転換した。1433 年に最後の艦隊が帰着した後は大船団の派遣は中止された。1500 年代に入ると外航船の建造が禁止され、大型船の建造を行ったものは死罪に処せられた。

通貨の動向に話を戻すと、銅銭鋳造が不足する一方で、宝鈔の発行は過大で価値の低下が続

く中、補完するものとして銀の流通量が徐々に増えていった。明国内の銀の産出力はきわめて限られたので、銀の流通増加は密貿易による輸入によって支えられた。結果として、15 世紀末にはなし崩し的に銀の流通を公的に認めることになる。

現代の目から見れば、明代を通じて通貨政策は一貫しないどころか場当たり的で、鈔は発行当初から減価が続いた。貿易政策も一貫しなかった。あくまで専門外の西洋経済史からの視点ではあるが、明石によれば、実質 GDP は北宋から明にかけて大きく下落したあと明代に回復したものの、明代を通じた成長率は 0.26%に過ぎなかった。明末の 1620 年の一人当たり実質 GDP(1840 年価格)は、980 年とほぼ同水準だったという(明石、2021、p.37)。また、栄田によれば、里甲制度のもとに記録された人口は、明代後半の寒冷化に伴う農産物産出の減少もあって、1393 年から 1578 年の約 200 年間に 6,054 万人から 6,609 万人に 9%増加したに過ぎなかった(栄田、1986、p.3)。

明帝国の統制は周辺まで行き届かない状態が長く、また日本では戦国時代となるなど、東アジア全般で海賊行為が広がる環境がもたらされたと考えられる。



注）Wang, Yang and Ljungqvist (2015)，趙・謝 (1988)，Liu and Hwang (1979)

図 12　中国の夏季地表温度異常値と人口推計

出所:明石茂生、2021、p.35

第8節　　帝国を維持するコストと通貨・金融政策の重要性

中国王朝の通貨政策とその有効範囲を振り返ることで、王朝の統制力の低下するにつれて倭寇の活動が活発化する背景には、通貨の価値が暴落したことも大きな要素の一つであることが確認できた。

逆に地域を支配する政権が安定し、海賊を討伐する動きが強まることによって倭寇の活動が低下し、また衰退するともいえる。明の軍による討伐、九州の大名による統制強化、1588 年の秀吉による海賊禁止令がそれにあたる。

これと表裏一体の環境として、技術変化による軍事力の差の拡大も大きな要因となったと思われる。戦国大名が火器・重火器を備え、それまでより規模が大きい軍事力が権力の必須条件となっていく中で、私兵であり大規模軍事力を持てなかった海賊・海商の活躍余地はさらに低下したと考えられるのではないか。第 7 節で触れたように、15 世紀から 19 世紀の北アフリカの海賊が衰退した要因として、欧州で国民国家が定着し植民地体制の強化が進むにつれて、欧州国家を中心とした国際関係が成立し、各国の個別外交が国際社会へ昇華し異文化へ統一見解を押しつける力が強くなったのと共通する。

重装備の常備軍を支えるにはある一定規模で安定的な財政収入と、それを支える通貨政策が必要である。裏返せば、中世の中国では、広大な帝国を長く維持するコストを賄える財政規模こそあったものの、管理体制にはやや難があったともいえる。

現代では、国家と通貨は一体であり、単独通貨であれ、欧州のような多国間共通通貨であれ、通貨は国の隅々まで行き渡っている。また、通貨・金融政策は専門的教育を受けた専門家がいて政策は常に吟味、検証されている。IMF(国際通貨基金)、世界銀行などの国際組織も同様である。一部の国ではポピュリスト政権による金融政策への介入によって急激なインフレや通貨価値の低下が見られるが、経済の混乱が社会の不安定化を招き、内乱や海賊や反政府勢力の活発化を招いている。経済理論と金融政策の発展、そして財務規律が守られることが安定した国家運営を支え、社会的な安定をもたらすのだということを改めて意識させられた。

第9節　　琉球王国・奄美・台湾と倭寇の影響

第3項　第1項　カムィ焼の時代

1983 年鹿児島県大島郡伊仙町（徳之島）でカムィヤキ陶器窯跡が発見された。（吉岡　康暢、『日本の対外関係 3--通交・通商圏の拡大--中世須恵器の語る列島海域の物流--琉球海--カムィ焼きの世界--』吉川弘文館、2010 年、P323）（村井章介、『東アジアのなかの日本文化』北海道大学出版、2021 年、P103）カムィ焼は 11 世紀から 300 年にわたって作られたものであり、鹿児島県から与那国島に及ぶ地域に分布している類須恵器である。奄美や沖縄で、九州産滑石製石鍋、中国産白磁などの穀物と一緒に見つかることから、活発な海上交易農耕に支えられたグスク時代の始まりを示す代表的な遺物として知られている。（伊仙町教育委員会『国指定史跡　徳之島カムィヤキ陶器窯跡--琉球列島グスク時代の焼き物センター--』伊仙町教育委員会、2016 年）この時代は琉球王国形成以前であり、海商集団が非合法な経済活動を展開する兆しが見えた時代であった。

カムィ焼は、製作に用いられている技術が朝鮮半島の高麗に見られる陶芸技術である点から、高麗陶工が参入していることは明らかであるが、奄美・沖縄から訪朝した形跡はないことから、南九州からもたらされたものではないかと推測される。

奄美諸島は単なる中継交易基地ではなく琉球列島へ供給する鉄とカムィ焼の生産基地でもあり、流通経路は、まず、沖縄の流通拠点に搬入され、その後、行商人によって南下して行った。カムィ焼はヤコウガイなどの南島の特産物入手の為の対価物でもあり、民需品でもあったと考えられる。

徳之島を生産拠点とするカムィ焼が奄美諸島から八重山諸島にかけての琉球列島全域に流通するというのも、すでに琉球列島全域に政治的あるいは経済的なまとまりが形成されていたからと考えるよりも、倭寇が琉球列島全域で活動し、また各地に拠点を置きながら海商・海賊行為を行っていたからであると考えた方か良いのではないか。（吉成直樹、福寛美『琉球王国と倭寇--おもろの語る歴史--』森話社、2006 年、P278）

10 世紀頃の奄美諸島は、奄美賊徒が出没する地であり、平安朝廷や幕府の流刑地にもされていたが、本土人がしばしば訪れる交易の地でもあったのである。（村井章介『古琉球--海洋アジアの輝ける王国--』角川選書、2019 年、P64）

写真 3 カムィ焼き（伊仙町歴史民族資料館にて撮影）

写真 4　伊仙町カムィ焼き陶器窯跡（現地にて筆者撮影）

第4項　第2項　琉球王国の成立と朝貢貿易

琉球には、14 世紀後半から海商が住み着くようになる。彼らが琉球の島々を通る航路を選び、そこに居付くようになったのは、対立する倭寇の妨害から少しでも逃れる為であった。そのきっかけは、中国の元の時代の末期に騒乱が盛んに起こり、時勢が険しくなってきたことで、航路を大洋路から南島路に変更したのである。

10～13 世紀の中国からの認識としては、琉球と台湾との区別がなかった。（上里隆史『海の王国・琉球（新装版）』ボーダーインク、2018 年、P40）しかし、中国との正式な外交である明の対琉球外交は 1372 年楊載の発遣に始まる。日本からの帰途、琉球を訪れて王に入貢を勧め、中山王の察度は率先して弟の泰期を派遣、入貢させた。ここに琉球王国が成立したとも言える。（来間泰男『琉球王国の成立と展開--よくわかる沖縄の歴史--』日本経済評論社、2021 年、P70）

琉球は、15 世紀に統一されるまでは三山時代と言われる三人の王の統治下にあり、琉球国中山王の入貢から 8 年後の 1380 年には南山王の承察度が、1383 年には北山王の帕尼芝が朝貢をしてきた。（吉成直樹『琉球王国は誰がつくったのか--倭寇と交易の時代--』七月社、2020 年、P167）

海禁政策下であった明であったが、海商勢力は琉球という逃げ道を得たことで、琉球は受け皿のような存在として繁栄していったと考えられる。そして、倭寇的な勢力を明が朝貢体制に組み込み、正当な交易者に転化したのである。

しかし、三山のそれぞれが対立関係にはなかった可能性や、固有の領土をもつ王とは考えられないことなどから、倭寇の受け皿として琉球を利用としたよりも、琉球そのものが倭寇勢力と一体化した存在であったために、琉球に対して朝貢において非常に優遇することで、海賊活動を抑えようとしたのではないかとも考えられる。（吉成直樹、福寛美『琉球王国と倭寇--おもろの語る歴史--』森話社、2006 年、P227）

琉球における朝貢貿易は琉球にいる中国人が主体であったとされている。明より航海、通訳等で琉球の朝貢貿易を支援する位置付けとして福建人である閩人三十六姓が派遣され、華人の居留地が久米村に自然形成されていった。しかし、華人の中には琉球王に仕える者もいたが、海賊

集団に身を投じる者もいて、それが琉球使節を巻き込むこともあった。
　琉球王国は硫黄鳥島を有しており、そこで産出される硫黄と馬が明への朝貢品とされていた。（入間田宣夫、豊見山和行『日本の中世--北の平泉、南の琉球--』中央公論新社、2002 年、P188）当時、馬の調達ルートはモンゴル人の影響下にあり、調達が難しかった。また、元に対抗するために火薬の原料となる硫黄を必要としていたという理由からヤコウガイなどの貝殻類だけでなく、琉球原産の馬や硫黄が好まれていた。しかし、それ以外にはめぼしい加工技術や物品もなく、主に行われていたのは中継貿易であった。中国へは、胡椒、蘇木、象牙、扇、日本刀など東南アジアや日本産の朝貢品も献上していた。
　琉球は、明よりジャンク船を何度も無償で支給され、朝貢回数無制限等の琉球優遇措置がとられていたのである。

第 3 項　琉球とモンゴル遺民

　琉球が明との朝貢貿易において優遇されてきたことは先に述べたとおりであるが、北山は明との朝貢に中山、南山よりも遅れ、海船も賜った記録がないとされている。ここで、北山についての珍説を紹介したい。
　北山の今帰仁(なきじん)グスク(城)からは、元朝に仕えたアラン人と呼ばれるイラン系遊牧民に由来するものや中世のモンゴル騎兵軍団の鏃と類似する物や同様の由来の小刀が多数出土していることから、モンゴル遺民が北山に逃げてきたのではないかとも考えられている。
　そして、経歴の多くが謎に包まれている最後の北山王攀安知(はんあんち)の名についても、最初の北山王である怕尼芝(はにし)と同じ発音であることから、明実録にて明側が両者を区別するために違う漢字を当てただけであると考えられ、羽地一族が代々治めていたと想像されていたが、攀安知という名はモンゴル語やトルコ語に由来し、アラン人の末裔なのではないかとの説もある。そして、愛刀の千代金丸の形状もモンゴル帝国との関係を結びつけるのではないかと想像することができる。
　以上のことや、北山が北からの新参の倭寇勢力が上陸する格好の場所でもあったことから、モンゴル遺民と倭寇的勢力が結びつき、彼らを北山の人々が受け入れていたということが示唆される。（上間篤『中世の今帰仁とその勢力の風貌--元朝に仕えたアラン人と攀安知--』ボーダーインク、2018 年、P143）（吉成直樹『琉球王国は誰がつくったのか--倭寇と交易の時代--』七月社、2020 年）

第5項　第4項　琉球王国と日本・朝鮮

　日本との外交は、主に禅僧が担っていた（来間泰男『琉球王国の成立と展開--よくわかる沖縄の歴史--』日本経済評論社、2021 年、P186）
　が、15 世紀以降民間勢力による交易活動も多く存在し、那覇には中世日本人社会を内在化した倭人居留地があり、日本人の他に朝鮮人、東南アジア人も滞在していた。16～17 世紀にかけて畿内・日本海・南九州方面出身者が沖縄に集中して居住し、さまざまな王府職に着任していた。
　朝鮮との外交に関しては、1389 年に朝貢として朝鮮への使節派遣が開始されたが、1421 年に朝鮮へ向かう琉球船が対馬海賊に襲撃される事件が発生した。以降、琉球が直接朝鮮へ船を派遣することは無くなり、この事件により、防衛の為、武器を搭載するようになる。
　その後の 1431 年には、対馬の海賊衆を雇い、朝鮮王朝との通交を再開する。このように倭寇と相互に協力し、交易を行っていたという事も伺える。しかし、次第に琉球王朝の偽使として倭寇が朝鮮との交易を行うようにもなった。
　朝鮮出身の倭人、金元珍のように平戸を拠点に朝鮮と琉球を往来し、漂流者送還や通事など、両国家間の外交の担い手として活動していた者も生じた。15 世紀前半には那覇に奴隷市場が存在しており、14 世紀後半には琉球には倭寇に連れ攫われた朝鮮被虜人や朝鮮からの漂流民が存

在していた。琉球中山王は何度も朝鮮人を送還している。このことからも倭寇が琉球で活動していたということが考えられる。そして、倭寇には朝鮮を出自とする人も少なからず含まれていたのである。（上里隆史『日本の対外関係 4--倭寇と「日本国王」--琉球の大交易時代--』吉川弘文館、2010 年、P154）（上里隆史『海の王国・琉球（新装版）』ボーダーインク、2018 年、P105）

第6項　第5項　琉球王国の朝貢貿易衰退期

16 世紀には、中国の官軍に敗れた倭寇の船が琉球に漂流したが、倭寇船を殲滅し、被虜人を中国へ送還していた。しかし、那覇港で活動する民間勢力を活用していた琉球王国にとって外来者の受け入れは不可欠であり、厳重な倭寇対策と相反するような交易勢力の受け入れ方針を取らざるをえなかった。

一方で、倭寇的な性格を内包した琉球王国による海賊行為も絶えなかった。1474 年の琉球使節による福州懐安県民の殺害、強盗事件を機に、朝貢回数は2年に1回と制限され、琉球の優位は失われていった。そして、倭寇問題が収束すると、明朝は琉球を優遇するメリットがなくなり、徐々に朝貢回数も減少させられ、優遇措置がとられなくなった。ジャンク船の支給もなくなり、15 世紀後半には琉球船が造られるようになった。

優遇措置の廃止に関しては、琉球方面から見ると上記のように思われるが、明朝としては国際秩序保持の目的での朝貢体制から国として手を引くことにしたので、周辺国から朝貢品を得て、明が倍返しをする朝貢の費用が高くつくことで廃止とした。倭寇が収束したので廃止したのではなく、倭寇の活動が活発になり、朝貢を辞め、互市体制に変更したので、朝貢国への倍返し分が割りに合わなくなってしまった。おそらく、他の冊封国も同様であると考えられる。

アジア各地の特産物を中継する国家間貿易から、銀の取引を中心とした民間の貿易に変化したことにより、琉球王国の国営貿易は衰退していった。朝貢貿易から倭寇的貿易に変化していったと考えられる。

琉球王国は、1609 年の薩摩の侵攻により占領され日本の幕藩体制の影響を強く受けるようになるが、それまでの 14～16 世紀の間、東アジアの交易ルートを支え、重要な役割を果たしていたのであった。（上里隆史『海の王国・琉球（新装版）』ボーダーインク、2018 年、P163）

図 13　琉球諸島

出所：沖縄県 「琉球諸島の自然特性　概要（No.2）「琉球諸島の自然特性」2 位置より

第7項　第6項　台湾と倭寇

14 世紀から 16 世紀の倭寇は中国の沿岸地域を荒らしまわり、官憲の反撃にあうと、まずは澎湖列島に逃げ、さらには台湾に逃げていた。官憲は澎湖列島までは追撃するが、台湾までは追撃しなかった。16 世紀頃、明王朝はまだ台湾の地理に不案内で、そこは風土病の蔓延する恐ろしい未開の地と考えていたのである。当時、澎湖列島は、台湾から出没する倭寇や海賊を防ぐための中国の前線基地であった。14 世紀末には警備と治安に当たる巡検司が置かれていた。1387 年には「澎湖廃墟」政策により廃止されたが、次第に密貿易の拠点となり、倭寇対策の一環として 1563 年に復活した。

台湾は、密貿易の拠点の一つであった。先住民が住む以外に、中国の海賊や海商、日本や琉球を含む各地の商人たちも台湾へ来ており、明の海商は台湾産の鹿皮、硫黄も中国や日本で販売していた。

前期倭寇の関わりはほとんどなかったが、後期倭寇が台湾の南部を基地とし、台湾の仲介貿易の地位を高めた。倭寇は、台湾南部、北部やルソンに出没し、船隻は百余隻にのぼった時もある。漢人は台湾を海賊の基地として利用していたが、生活の為、漁業や農耕を行い農産物も生産していた。しかし、台湾はまだ開発されておらず、持久の策をとることができなかった。

台湾の先住民は、言語も様々であり、部族間の文化交流がほとんどできない部族もおり、文字による伝承は 17 世紀になって漢人やオランダ人が台湾にやって来てからである。その為、先住民による統一した政権が樹立しないまま外来者に押されることになった。しかし、北部の先住民は操舟に長けており、中国沿岸部まで交易に行くなど、海で生活をする伝統を持っていた。

17 世紀、台湾はオランダ人東インド会社の統治下となるが、1662 年最後の倭寇と言われた鄭成

功がオランダ軍を下し、台湾統治を成功させた。
（楊合義『決定版　台湾の変遷史』展転社、2018 年）（伊藤潔『台湾--400 年の歴史と展望--』1993 年、中公新書）

第8項　第7項　まとめ

中世の琉球、奄美、台湾を倭寇との関連性に焦点を当て述べてきたが、琉球は、中継貿易という大事な役割を担ったことで、中国大陸や朝鮮、日本からの影響を受け、琉球独特の東南アジアの文化が入り混じった文化が生成されたということが伺える。そして、他国の政治的な背景から、奄美、琉球独自の文化が形成されていったのではないだろうか。

琉球王権の樹立に関しては、倭寇勢力が関係したと考えられ、琉球統一を果たした尚巴志(しょうはし)が日本本土人ではないかという説（吉成直樹『琉球王国は誰がつくったのか--倭寇と交易の時代--』七月社、2020 年、P191）や、琉球王朝の起源を倭寇勢力そのものに求める説（村井章介『古琉球--海洋アジアの輝ける王国--』角川選書、2019 年、P248）

も唱えられている。

琉球王国からは、シャム、マラッカ、ルソンに訪れた記録も見られ、自ら倭寇的勢力として海を渡り、活発な交易を行っていたと考えられるが、それだけではなく、琉球、台湾は貿易を行う海商の中継地点として大事な役割を担い、倭寇集団や海外からの移住者が、国家形成に多大な影響を与えていたのではないだろうか。

第10節　　前期倭寇の高麗への影響

10～12 節では朝鮮が倭寇によって受けた被害・そこからもたらされた影響をまとめ、反対に朝鮮が倭寇に与えた影響・共通点を新羅の時代にまで遡り考えていく。

『高麗史』によると、明確に倭寇という名称で活動が史料に出てきたのは 1350 年からである。だがそれ以前にも高麗史で倭寇という言葉が史料で使われていたことがある。それは海賊としての倭寇が確認される 100 年以上前の 1223 年の「倭寇金州」の記事である。これは寇が動詞であり、倭すなわち日本が金州を略奪したという意味であって倭寇という固有名詞ではない。なおこの倭寇は12世紀中期から13世紀前半において非法行為を行なっていた日本人のことを指していて、これ以後史料に倭寇という言葉が現れるようになった。あくまで寇という言葉が使われるようになったのが 1223 年ということであり、固有名詞としての倭寇の活動が始まったのは 1350 年になってからの出来事である。

この 1350 年の倭寇の略奪以降も、継続的かつ大規模に倭寇の略奪が行われるようになる。倭寇の略奪によって主に被害を受けていたのは、沿岸地域に住んでいる人や漕船で運搬をされている米穀などであったとされている。拉致された人の扱いとしては日本に運んでくるだけでなく、琉球に転売され、日本に派遣をされた高麗の高官に買われ帰国できることもあった。日本は捕虜を高麗に送還することで、相当な対価を得ていたようだ。

こうしたことから倭寇は高麗にとって恐怖の象徴ともいえるものになっていた。それがわかりやすいのは 1370 年代から 80 年の活動がピークの時だろう。その規模と被害については図 14 の14世紀～15世紀の部分を見れば読み取ることができる。より詳しい内容については村井が以下のように述べている。（村井、1993、p.27）

> 多数の船と騎兵を擁する倭寇集団がいくつかあって、それらが連続的に各地を寇掠していくようすが読み取れる。この一年だけで、咸鏡道（はむぎょんど）と江原道（かんうぉんど）をのぞく朝鮮半島の全域が被害にあった。
> （中略）
> じっさい、南方の多島海地域では、倭寇を避けて内陸部に「僑寓（かりずまい）」を余儀なくされた郡県がすくなくない。

上記の内容から、倭寇の略奪は苛烈であり、土地を明け渡すような行動をしていることからも対処をすることが難しかったのだということがわかる。

高麗が倭寇に反撃をしたのは 1376 年からで、崔瑩(さいえい)・李成桂(りせいけい)・羅世(らせい)・鄭地(ていち)・朴葳(ぼくい)といった有力武将によるものである。次第に倭寇に打撃を与えるようになり、1376 年には崔瑩が鴻山で、1380 年には李成桂が荒山で、崔茂宣・羅世が鎮浦で、1383 年には鄭地らが南海島観音浦で勝利を収め、1389 年の対馬攻撃以降、倭寇の侵入は激減することとなった。ほぼ同時期の 1388 年に、倭寇などとの一連の戦いで功績をあげた李成桂がクーデターを引き起こし、政権を掌握した。1389 年に恭譲王(きょうじょうおう)を擁立すると、親明派の支持を受けて体制を固め、1392 年に恭譲王を廃して自らが国王に即位し、朝鮮王朝を興した。これによって高麗は滅びることになった。

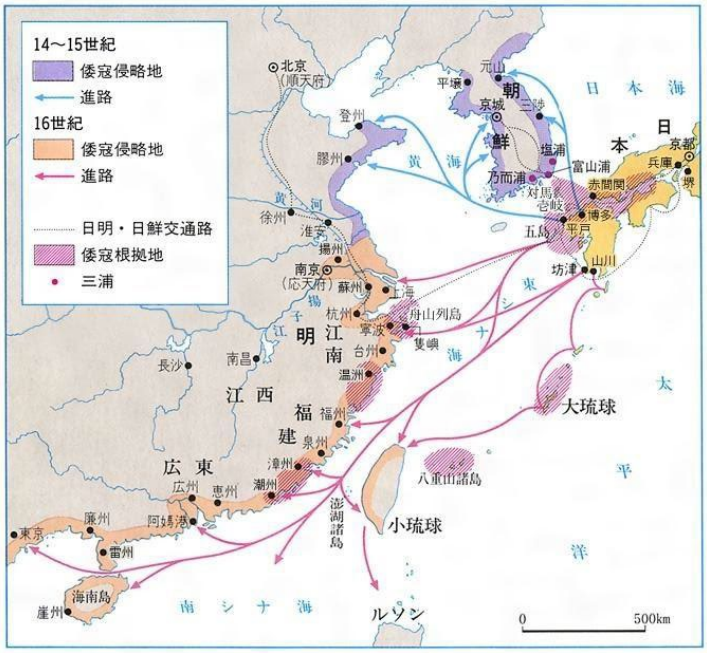


図 14 倭寇の侵略

出典:小学館、日本大百科全書(ニッポニカ)

第11節　　倭寇と李氏朝鮮

高麗が滅び、李成桂が国王に即位をした朝鮮王朝の時代になると、倭寇の活動は下火になっていた。(村井、1993、p.30)しかし 1419 年、飢饉のため対馬から数千人の倭寇が明に向かう途中、食糧不足から朝鮮を襲撃した。船が焼かれ、城がほぼ陥落し、場外の民家は略奪された。さらに数日後にも海を侵犯し、朝鮮軍およそ 300 人を殺害・捕虜にすることまで起こった。これが対馬からきたということを知った世宗が出征を命じたのが応永の外寇である。結局朝鮮は敗北し、その後は朝鮮内にいる対馬人を僻地に移転させた。

応永の外寇以降、倭寇の活動はなくなった、しかし 1429 年に日本を訪れた通信使、朴瑞生の帰国報告では倭寇問題について述べている。(村井、1993、p.30)

> ここで倭寇の侵略が「かつてあったこと」として述べられているように、倭寇の軍事活動自体は、もはや大した問題ではなかった。だがとりこになった朝鮮民衆にとって、倭寇はまさしく現在の問題だった。朴が船で瀬戸内海を通過したとき、港に寄るごとに、奴婢として

使役されている俘が逃げてこようとするけれども、かたく枷(かせ)鎖でつながれていて果たせない、まことにあわれむべきである……。ここから、相当多数の朝鮮人が倭寇によって日本に連行され、奴隷として使役されたり、遠い国に転売されていったことが知られる。日本の諸勢力に交渉してそれらを返還させる(これを当時のことばで「刷還」(さつかん)といった)という課題が、朝鮮政府に重くのしかかることになったのである。

この内容から分かるように、倭寇が活動しなくなっても多くの被害は解決することが難しく、後にも影響が残るものであった。倭寇によってもたらされた影響はそれだけではなかった。朝鮮では倭寇懐柔のため倭人通交者に対する優遇措置をとるようになった。物資の買い付け・調達の優遇に始まり、滞在中の食糧・宴会・旅費などの全てを朝鮮側が負担するという好待遇であった。これが広く知られると、数多くの通交者が朝鮮を訪れるようになった。通交者が持ってくる貨物運搬などのストレスによって、民衆の中には流民になるものが増えるなど、民衆が弊害を受けて国家がついえた理由になったと言われている。

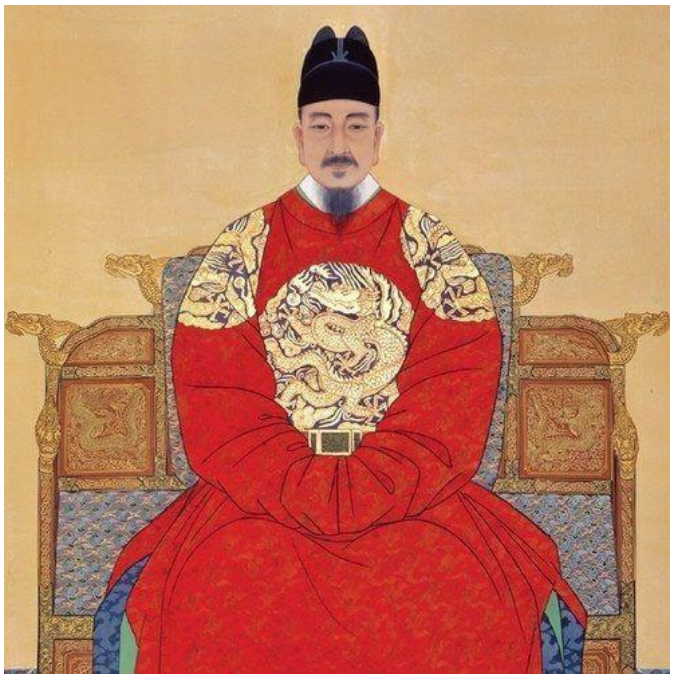


図 15　朝鮮4代王「世宗」 世宗大王遺跡管理所

第12節　　新羅と日本

新羅は前57年から935年まで続いた国であり、その歴史の古さから残っている資料も少なく、今回の倭寇とは時代的に関わりがない。しかし、「新羅の入寇」という海賊行為を行なっていたとされていることから、倭寇との共通点や、倭寇に影響を与えた可能性を探ってみたい。

「新羅の入寇」は、新羅からの流民・帰化人による犯罪行為と、新羅王の勅命による国家規模の海賊行為の総称とされていて、新羅の賊とも呼ばれている。新羅の賊は新羅国内が混乱をしていた811年から滅亡する935年までの間に度々日本を襲撃したとされている。実際に8世紀以降からかなりの頻度で対馬や北九州を襲っている。襲撃者の中には組織的な大規模集団も多く、国や豪族が支援していたとされている。新羅の賊が現れた原因は、8世紀の中頃に起きた飢饉や疫病による社会的疲弊にある。その影響で日本に亡命し、帰化した新羅の民が数多くいた。その移民の

数の多さから、新羅からの帰化人に対し、帰化したい者がいれば食糧を与え帰国させるようにと天皇が勅令を出した。当時の新羅は混乱期にあり、民衆を政治的混乱によって苦しませていた。この時の新羅は唐とは友好的であったが、日本や渤海（後の高麗）とは敵対していたとされている。

その前までは、新羅が日本への朝貢を行なっていたが、新羅が国力をつけて朝鮮半島を統一し国家意識が高まり、日本に対等な関係を申し入れるが受け入れられず、朝貢を継続した。こういったことが何度か繰り返され、新羅は日本の属国のようになった。780 年には遣新羅使が停止されたが、民間レベルの交易は続いていた。

811 年になると、対馬に新羅からの賊が現れるようになった。特に 813 年の新羅の賊の襲撃は規模が大きく、島民が数人殺害され、100 人以上が捕虜になった。日本は警備を強化したが、820 年に在留新羅民 700 人が反乱を起こした。殺害や放火を行ない、穀物を奪って船で逃走したが失敗に終わったとされている。その結果 841 年には新羅人の日本への帰化が禁止され、民間交易しかできなくなってしまったのである。

新羅の賊の次の活動があったのは 869 年である。豊前の貢調船を襲撃し、年貢の絹綿を掠奪し逃げたという記録がある。この時代には唐や新羅の商船が利用する港があり、そこを利用したのではないかとされている。その後も襲撃は続き、893～895 年まで新羅の賊が毎年のように襲撃し、特に 894 年には唐人も交えた大軍で対馬を襲った。新羅は不作による飢饉、重税が問題になっており、反乱を避けるために新羅政府が外国の襲撃略奪を計画したことが日本側に記録されている。

これらの情報から新羅の賊と倭寇の共通点としてあげられるのは、パトロンがいることである。新羅の場合は国のバックアップなどもあったが、金銭を持っている人の支援を受けているという点で同じである。倭寇と新羅の賊は異国のものと協力している点で同じである。

倭寇が新羅の賊の影響を受けているのかどうか、この共通点だけで判断するには不十分だ。しかし、倭寇が他国の賊となぜ協調できるのかという疑問に示唆を与えるものである。奪い合いではなく協力し、多国籍な賊として活動した背景には何かしらのノウハウがあり、それが唐の人と協力関係にあった新羅の賊のものではないかというのが筆者の考えである。

田中健夫は 1987 年の論文『倭寇と東アジア通交圏』において、「14世紀の倭寇の主力は、日本人と朝鮮人の連合した集団あるいは朝鮮人のみの集団だった」と述べており、その論拠として 1446 年に半中枢府事、李順蒙が国王に呈した上書きの一節と、1380 年代につくられた『高麗史節要』の記事を示している。些か年代が離れすぎているという意見もあるかもしれないが、新羅が滅亡した後にも新羅の賊の活動は続いていたということと、新羅の賊といわれなくなっても、その流れを汲んだ賊は高麗に残っていた、そうやって海賊のノウハウを受け継いでいくことは可能だったと筆者は考えるのである。

図 16 明治十二年大蘇芳年「大日本史略図会」の「第十五代神功皇后」仲哀天皇九年以降の三韓征伐

第3章国内事情

本章では、前期倭寇が発生した 14～15 世紀当時の日本国内の歴史的に背景について調査・報告する。図の通り14世紀は鎌倉時代、室町時代から南北朝時代と位置づけられている。南北朝時代は日本全国を巻き込んだ動乱の時代であり、南北朝の動乱という時代背景を抑えることは倭寇発生の国内背景を考えるにあたって、重要な情報となる。

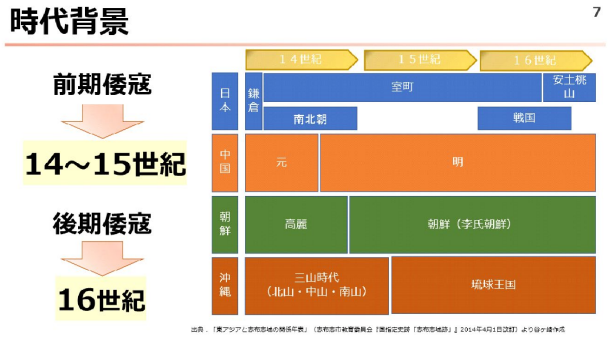


図 17　本研究での時代背景一覧（著者作成）

第1節　　前期倭寇発生の背景を考察するための国内状況　南北朝時代の南北朝の動乱

南北朝時代は、日本の歴史区分の一つであり、その鎌倉時代から室町時代にまたがる。その時代は、北朝と南朝という二つの朝廷が併存する王権分裂状態であり、それに伴う大規模な戦が続き南北朝の動乱といわれている。

建武の新政の崩壊を受けて足利尊氏が京都で新たに光明天皇（北朝・持明院統）を擁立した。それに対し、後醍醐天皇（南朝・大覚寺統）が京都を脱出し、吉野に逃れ、分裂状態が出来上がった。分裂の背景は、鎌倉時代の後半から持明院統と大覚寺統という二つの相容れない系統に別れ状態が続いたことに由来する。

日本の各地の守護や国人たちがそれぞれの利害関係から北朝あるいは南朝に与し、それぞれが勢力を拡大し、大規模かつ長期化し、日本全国に広がる戦乱となった。

第2節　　南北朝期の区分

南北朝期の時代区分はいくつかあり、人物区分と年代区分に分類される。それぞれ共通する部分は以下の通りである。第 1 期は、内乱の前史をどこまで含めるかに差があるが、建武政権の成立が含まれている。第 2 期と第 3 期は分類に差があるが、観応の戦乱から全国に内乱が広がる時期をさしている。第 4 期は、足利義満が将軍職につき国内統一が完了するまでの期間とされている。

図 18 南北朝時代区分　（参考文献を整理）

	①人物区分	②年代区分-1	③年代区分-2
第 1 期	建武政権の成立から王朝権力の没落で、結城宗広、楠木正成、足利尊氏が代表	内乱の前史。13 世紀後半の鎌倉幕府執権体制の崩壊から、元弘の乱、建武の新政、建武の乱、室町幕府成立を経て、後醍醐天皇の吉野への脱出（1337 年）まで。	1336-1348 年、南朝成立から、四條畷の戦いで楠木正行が戦死、後村上天皇が行宮を賀名生に遷すまで
第 2 期	観応の擾乱によって南朝も一時的に勢力が回復した時期で、後村上天皇が代表	内乱の展開。後醍醐天皇が吉野へ脱出して南朝が成立してから、1348 年 1 月に高師直が四條畷の戦いで楠木正行を敗死させ、2 月に南朝の吉野行宮を攻略、後村上天皇が賀名生に行宮を遷すまで。	1349-1367 年、観応の擾乱から足利義詮の死まで。
第 3 期	室町幕府の守護が強大化し、権力が分散され、やがて再編される過程で、佐々木導誉が代表	内乱の深化。1367 年に南北朝間の和平交渉が再開される頃まで。	
第 4 期	国内統一の完成期で、足利義満が代表	内乱の終焉。1367 年の細川頼之の管領就任から南北朝合一まで。	1368-1392 年、足利義満の将軍就職から両朝統一まで。
出典	林屋辰三郎 『南北朝 日本史上初の全国的大乱の幕開け』 朝日新聞出版〈朝日新書〉、2017 年	佐藤和彦 「南北朝の内乱」 『国史大辞典』 吉川弘文館、1997	永原慶二 「南北朝時代（日本）」 『日本大百科全書』 小学館、1994 年

第3節　　14 世紀の経済状況

南北朝の戦乱による日本の国内への社会、経済への影響は、石沢澈が「中世後期の経済学」(1968 年)でまとめている。

第1項　中世前期と後期の経済

石沢によると数々の経済史家は、中世前期(13 世紀)は荘園経済の経営で説明がつき、中世後期(14 世紀)は荘園経営中心の経済から変質して異なった様相を呈してくるとしている。

中世前期の荘園経済とは、荘園領地を地域の中心とした地域内の自給自足経済である。

中世後期は、石沢(同、P.96)によると、「中世後期の経済は楕円経済が行われた」とし、「どちらか一方の焦点を中心として説明しつくすことはできないということと、両焦点は相互に作用し影響している」という。楕円経済におけるそれぞれの焦点は、「中小名主級・作人級の経営権の掌握・経済的実力の獲得」と「財貨経済」であると論じている。

以下それぞれの焦点についてまとめる。

中小名主級・作人級の経営権の掌握・経済的実力の獲得とは、「荘園経営の崩壊、それに伴う経営権の主体が中小名主級や作人級の手に移り、彼らは荘園領主の隷属関係から独立する傾向を著しくした。」ことをいう。

財貨経済とは、「高利貸活動などによって、多くの金銀財宝・米銭を蓄積して、有徳な百姓、有徳人を生み出す経済」であるということ、「室町中期には名工・名匠が排出して、名器・名作を発表し、全盛期となった。金銀が流通貨幣というよりも、財宝として貯蓄され、また多くの高級工業品などが畜蔵されるようになった。このような経済を貨幣経済と区別して財貨経済」という。

第2項　南北朝の動乱による影響

本節では、南北朝の動乱による影響を、①権力の分権化、②商人の顧客の変化と分布の変化、③価値観変化(土地から財貨を重視)、④価値観の変化による職人気質の発生、の 4 点で論じる。

①権力の分権化

石沢(同、P.91)によれば、「13 世紀後半から 14 世紀初めにかけて、荘園制的名田体制の解体があり、14 世紀前半になると、明らかに荘内の諸階層の間に新しい動きがみられる。有力名主層の小領主化傾向、中小農民の小商人的活動、荘内外の高利貸的名主の進出、手工業生産者の自主的な分離の進展、これらの諸階層による新しい分業体繼、即ち、地域内分業体制の形成、惣的・地縁的共同体の形成がみられたといわれている」とあり、荘園内の諸階層の間で権力の分権化が起こっている。この変化により商人の顧客と分布の変化、そして価値観の変化、職人気質の発生につながる。

財貨経済貫徹の一貫として、荘園経済の主体であった地頭職や名主職・作職などが、完全に得分権化されて、売買され、名田経営(勧農)の如きは問題ではなくなった。祇園社記の建治 4 年正月廿五日の条によると、すでに京都の土倉が寄合衆を組織して、質流れになった備前可真郷の処分について協議したことがみえており、所領の売買、質入も甚だしくなったので、鎌倉幕府は、これも制限、もしくは、禁止せねばならぬほどであったといわれている。南北朝以後になると、この傾向が、いよいよ甚だしくなった。

②商人の顧客の変化と分布の変化

石沢(同、P.88)によると、「荘園経済の自足経済の崩壊からして、荘園内で広く自給していた農器具や生活必需品にいたるまでも、中小名主級や作人級の経営者を相手とする商業へと変じた。また、年貢輸送ルートとはかぎらず、地方に広く商人が分布するようになった。」としている。

これは商人の顧客は、中世前期は荘園内での自給自足を中心とした経済活動の範囲内にとど

まっていたが、南北朝の動乱により中世後期には、経済の中心が京都といった中央から地方に移っていることは、石沢（同、P.88）により論じられている。

> 南北朝以後の、中世後期にも、京都・奈良は最大消費地であって、商業の繁栄を続け、国内商業の中心を成していたことに変わりはないが、それらの都市商業繁栄の基礎条件は著しい変質を遂げた。その一つには、前期の商業を支えていた荘園領主層の荘園支配の後退と、それにともなう領主経済の縮小が避けられなかったことである。ことに京都の場合は、それが著しかった。中央都市商業に占める荘園領主経済のウエイト軽減は、明らかであるが、しかし、京都などでは、それ補うような形で、武家の駐留や商工業人口の増加があって、これらのものが新しい都市商業の重要な基礎となっている。
>
> （中略）一般的ないいかたをすれば、中小名主級・作人級らを相手とする新しい必需品的な商品の流通が比重を高め、全体としては中央都市商業は繁栄をつづけた。
>
> （中略）後期になるとその比重を、低め地方の中小名主級・小作人級らの購買力を背景とする地方の商業、または地方の封建領主制の進展にともなって、地方城下町、港湾都市、門前都市のような、初期封建都市商業が台頭してきて中央都市商業の集中的な繁栄と地位はゆらぎだし、国内商業に占める地位も、前期に比しては低下せざるを得なくなった。

後述する財貨経済と関連するが、地方でも経済が発展することにより貧富の差が生じ、貧しいものが徒党を組み倭寇の土台となったと推察できる。

③価値観変化　土地から財貨を重視

価値観の変化について、石沢（同、P.91）は、「地頭職も、名主職・作職も、たやすく財貨で入手できるようになった」、「土地というものが、一族・一家にとっての唯一の富、一生懸命の土地ではなくなった」、「富としての価値の相対的低下」、と述べており、経済の発展に伴う土地中心から財貨への価値観の変化あったと理解できる。

荘園経済体制が多くの困難にぶつかり、経済的に絶対的な信のおけない不安定なものになってくると、財宝や財貨の蓄積を主とするような世相になった。困難な自足的荘園の経営よりも、交換手段でもある財宝の獲得と蓄積の方が、有利な経済活動とされるようになってきた。金銀、舶域品、書画、骨董品、名刀、名器などの財宝に価値が見出された。多くの米銭をも蓄えた長者が、戦乱の際などには、米銭には目もくれず、金銀財宝(名宝・名器など)の持運びに努力したいといわれる。（石沢、同、P.91）

④職人気質の発生

職人気質の発生の背景について、石沢（同、P.91）は「荘園経済の不信が、他方では高級衣服や高級工芸品、書画、骨董品などの財宝を尊重する経済思想を生みだし」、そしてそれが「芸術趣味的な名器・名作などを尊ぶ経済的価値観念」の発生につながり、「それらのものをつくる名工、名匠などの職人気質を生みだした。」と論じている。

さらに職人気質の事例として石沢（同、P.91）があげている物を以下に記載する。

> 室町前期の作と思われる「庭訓往来」には、各地の銘産品をあげているが、名器・名作を尊ぶ意識があらわれている。1370 年代頃より窯業は盛んになったといわれるが、瀬戸焼などに天目釉が行なわれてすぐれたものを作るようになり、それにおくれて、備前・信楽・伊賀・常滑・丹波などの製陶業が発達した。製紙では美濃国の美濃紙、越前国の鳥の子紙など、醸造業の京都の柳の酒屋がもっとも有名で、京都・博多・堺・西宮の銘酒が知られた。鋳物では、楠葉の鍋、河内鍋・、播磨鍋が知られた。1403 年には井手家太刀(備前長船盛光)の名刀がつくられたし 1426 年には北野神社梅蒔絵箱が作られた。室町中期には

名工は、一国の所領を賜わるにも似てありがたいこととされるようになった。(石沢、同、P.91)

上記から、職人気質の発生は良質な産業発展の土台となり、倭寇にとって有力な武器となることと、生産品の輸出意欲の下地、つまり、輸出して販売するモチベーション、貿易の土台となったといえると考える。

第3項　まとめ

本章では、倭寇を理解するための日本国内事情について倭寇前期の時代背景を中心に研究調査を進めた。国内の政治状況、南北朝の動乱による全国的な展開、それの伴う経済の変化を権力、商人、価値観、職人気質としてまとめた。

特に中心として記載した経済については、南北朝の動乱による影響を①権力の分権化、②商人の顧客の変化と分布の変化、③価値観変化(土地から財貨を重視)、④価値観の変化による職人気質の発生、の 4 点で論じてきた。

南北朝の動乱による荘園内の諸階層の間で権力の分権化、経済の中心が京都といった中央から地方に移ることによる地方経済が発展とそれに伴う貧富の差、貧しいものが徒党を組んで倭寇の土台にもなったと推察する。

また、経済の発展に伴う土地中心から財貨への価値観の変化、それに伴う職人気質の発生が良質な産業となり、倭寇にとって有力な武器となることと、産業の生産品の輸出意欲の下地、つまり、輸出して販売するモチベーション、貿易の土台となったといえると考える。

第4節　　13 世紀から 16 世紀までの日本人の価値観について

13 世紀から 16 世紀までの日本人の価値観を考察していきたい。まず、「喧嘩両成敗」という言葉がある。喧嘩しても片一方が悪いという訳ではなく、どちらにも非があるという意味合いを持っている。この言葉は室町時代の分国法に書かれたことで頂点を示す。実際に駿河・遠海・三河に君臨した今川家の氏親・その子義元が定めた「今川かな目録」にも「喧嘩した者たちは善悪を問題せず、両者とも死刑にする。もし相手が攻撃してきたとしても、我慢して、さらに負傷した場合は、被害者側に原因があったとしてもその場を穏便に対処したことに免じて、勝訴とする。」(清水克之、2018*一部現代語訳されている)と書かれていた。この前半の部分は、喧嘩した者は理由を問わずに死刑ということである。典型的な喧嘩両成敗の規定である。ここからこの時代の日本人は現代の日本人気質とは違い、武力行使な面が強く出ていることが考察できる。また他にも琵琶湖の「海賊」の話として次のようなものがある。

> ある日、 出羽の羽黒山(現在の山形県)から一五人の山伏と一人の少年の一団が堅田に来訪した。彼ら少年を京都の総本山聖護院で出家させるための長旅の途中で、このとき兵庫の持ち船に乗って、琵琶湖を南下、淀川を下り京都をめざす予定 となっていた。 おそらく彼らは往復の旅費のほか、本山に納めるための、それなりの上納金も所持していたはずである。こともあろうに兵庫は、その彼らの所持金に目をつけ、強盗を思いたったのである。その計画は非常に巧妙かつ残忍なもので、船が堅田を過ぎ、五 〜 六キロほど南の対岸、烏丸ヶ崎(現在の草津市)に差し掛かったところで、手下の者たちの武装船を送り込み、一気に彼らを皆殺しにするというものだった。かくして、 山伏一行の長閑な船旅は暗転する。人目のない岬の陰にまわりこんだところ、船は突如、不審な海賊船に進路を阻まれることになる。それに呼応しいままで山伏たちを乗せていた船の船頭も海賊の正体を露わにする。船のまえには海賊、船のなかにも海賊。湖上はあっという間に阿鼻叫喚の修羅場と化す。なかには、逃げ場を失い水面に身を投じる者も出る。しかし、水練に 巧みな兵庫の手下の者どもは、ひそかに槍を構えて船底に潜り込んでいた。彼らは湖に飛び込み逃げようとする山伏たちを水中から一人ひとり槍で串刺しにしていく。血に染まる湖面 ―

―。船上にいた山伏たちはひとたまりもなく、わずかな時間で、そのほとんどが殺害 されてしまった。（清水克行、2021、P36～37）

というように荒っぽい気質があると述べられている。ただ、やみくもに掠奪目当ての荒っぽい暴力を振るうばかりの集団だけではなく、多くの場合は勝手に間所を自分たちで作り、縄張りの通行を許可するかわりに通行料をせしめるという形で、金銭を徴収していた。室町時代の応永 27 年（1420）に日本にやってきた朝鮮国の使節宋希璟の紀行文では、「この土地には東と西に海賊がいる。東から来る船は 東の賊一人を同乗させて行けば、西の賊はこれを襲わない。西から来る船は西の賊を一人同乗させて行けば、東の賊はこれを襲わない。」（清水克行、同、2021、P32）と書き残されている。武力をもって人から見せしめ物を取るという荒さはありつつも、稼ぐために効率を重視する冷静な面もあったことがわかる。

第5節　　前期倭寇について

第1項　三島倭寇について

三島倭寇について、「中世日本の内と外」の著者である村井氏は、「倭寇の活動期間中、「倭寇」という言葉の「倭」は「日本国」とは明確に区別されていたとしたら、「倭人」は対馬、壱岐、博多などの「三島」を中心に住む人々であり、この三島の「倭人」が倭寇集団の中核であった』と述べている（村井章介、2013、『日本中世境界史論』、P.128-137）。

これに対しては、宋鍾昊による反対意見もある。

> 三島の各地方が「倭」としてのみ認識され「日本」とは区別されていたという村井氏の見解とは異なり、この地域を「日本」と呼んでいる事例は史料上大変多い。例えば、朝鮮王朝の建国から 15 世紀末までの 100 年余りの間、『朝鮮王朝実録』において「日本」又は「日本国」という記述の後「対馬」、「壱岐」、「松浦」、「覇家臺」（博多）など三島の地名、又は「志佐」、「田平」、「鴨打」など三島地域の領主の名が記録されている箇所は少なくとも 1,000 以上確認される。また『朝鮮王朝実録』では「昨見慶尚道監司啓本、日本国使臣出来云。大抵如此倭使出來、…」のように「日本」と「倭」という二つの表現が一つの文章で同時に使用されるなど、「日本」と「倭」の用語を混用している事も多い。一方で村井氏の主張を裏付けできる史料上の根拠は乏しい
> （宋鍾昊、2017、P67）

このように専門家のなかでも意見は統一されておらず、「三島」＝「前期倭寇」と位置付けるのは早急な面がある。そこで、少し違う視点として、襲撃を受けた朝鮮側の視点で見てみる。朝鮮半島に出没した倭寇に関して述べている文章を以下に整理する。

『高麗史』巻 37 忠定王 2 年（1350）2 月条では、「倭寇固城・竹林・巨濟，合浦千戶崔禪・都領梁琯等戰破之，斬獲三百餘級，倭寇之侵始此。」と書かれている。この資料等を踏まえた近藤氏によると、

> 庚寅年（1350）から倭寇の活動が本格化しその被害に苦しめられていた。前述の通り既存の研究のなかでも、この倭寇の主体を最も具体的に論じたのは李領氏である。李領氏は、それ以前の倭寇（13 世紀の倭寇）との違いを明確にして，その規模や頻度が以前と比較できないほど拡大した 1350 年以後から 1391 年の高麗滅亡までの倭寇を〈庚寅年以降の倭寇〉と命名し，倭寇による高麗での略奪行為は，日本の南北朝の抗争を背景に一律日本人の専門的武装集団（中世武士団・悪党）が携わっていたとした。具体的な目的には，その始まりの 1350 年の倭寇は観応の擾乱に伴い筑前・対馬守護兼大宰少弐であった少弐氏（少弐頼久）が兵糧米など軍備品の確保にあたったためとし，禑王 3 年（1377）の倭

寇にいたっては北朝軍の激しい攻撃を受けた南朝勢力下にあった松浦党が食糧の確保はもとより一時的避難の場所としたことを挙げている
（近藤浩一、2014、P.127-P.128）

『高麗史』巻 41 恭愍王 4 年(1365)3 月己巳条では、「倭入昌陵，取世祖眞以歸」、『高麗史』巻 39 恭愍王 6 年(1357)9 月戊戌条では、「倭入昇天府興天寺，取忠宣王及韓國公主眞而去」とある。ここから、倭寇が昇天府の興天寺に入って忠宣王と韓国公主の肖像画を持ち去ったり，昌陵（高麗を建国した太祖の父墓）に入り太祖父の肖像画を奪ったりしたことがわかる。公的なものへの関心をあらわにしていたとみることもできる。以上のことから、三島倭寇（前期倭寇）を壱岐・対馬・肥前松浦という地域に限定するのは難しい面がある、しかし九州地方の有力武士団を母体としているとは言えるだろう。奪略行為を繰り返していくなかで、地域間の交流が少ないことや、公的権力の介入もあって、組織として複雑化していったと考えられる。これが境界人の国際性や多様性などの後期倭寇の特質に繋がっていったと思われる。

第2項　前期倭寇と関わりがある人々

第 1 項を踏まえ、対馬と壱岐に視点を絞って当時の倭寇の活動域に住んでいたと思われる人々の歴史背景などを整理する。まず、地政学的側面を見ると、対馬・壱岐どちらもとも本島とは離れており、海に囲まれている。海を渡ってくる倭寇にとってアクセスしやすい環境であることがわかる。

対馬は「国境の島」と言われている。たとえば、「九州よりも朝鮮半島の方が近いという地理的特性から、古来より日本列島と朝鮮半島との交流の窓口としての役割を担ってきた。対馬は、古代から近世にかけて新羅使や遣唐使、朝鮮通信使などの外交使節が行き来し、日本列島と朝鮮半島を結ぶ通交経路であった。古代には対馬経由のルートが公的かつ安定したルートであると考えられ、その経路上の重要な島であったことから令制国に準じる扱いの「嶋」がおかれた」（柿沼亮介、2021、P.13）。

つまり、対馬は交流の最前線として恩恵を甘受する立場である一方で、対立の最前線でもあった。前期倭寇の動きが活発する前の 13 世紀には蒙古襲来の被害を受け、15 世紀初頭には倭寇の拠点として朝鮮から襲撃される応永の外寇（朝鮮側では己亥東征）が起こった。『朝鮮軍の軍行行動は短期で終わりましたが、対馬と朝鮮との関係はしばらく断絶したままになりました。朝鮮との交易を生活の手段とする対馬の人びとにとって、これは大変困った事態でした』（村井章介、2021、『中世日本の内と外』、P.211）、というように大きな影響を受けた。

司馬遼太郎は対馬と倭寇の関係について、「良田無し、ということで、この島民が室町に倭寇になり、朝鮮沿岸の米倉をねらって荒らした。李朝はこれをやめさせるために島主宗氏とその重臣 に官位をあたえ、毎年いくらかの米を送っ た。この関係はきに断絶したが、江戸期もつづき、幕末 までおよんでいる。対馬藩主宗氏は三百諸侯の一つでありながら、同時に朝鮮との関係では両属のかたちをとった点、琉球が中国との関係において中国によりつよく力点を置きつつ両属のかかわりを結んだことに似ている」と述べている。（司馬遼太郎、2014、P12）

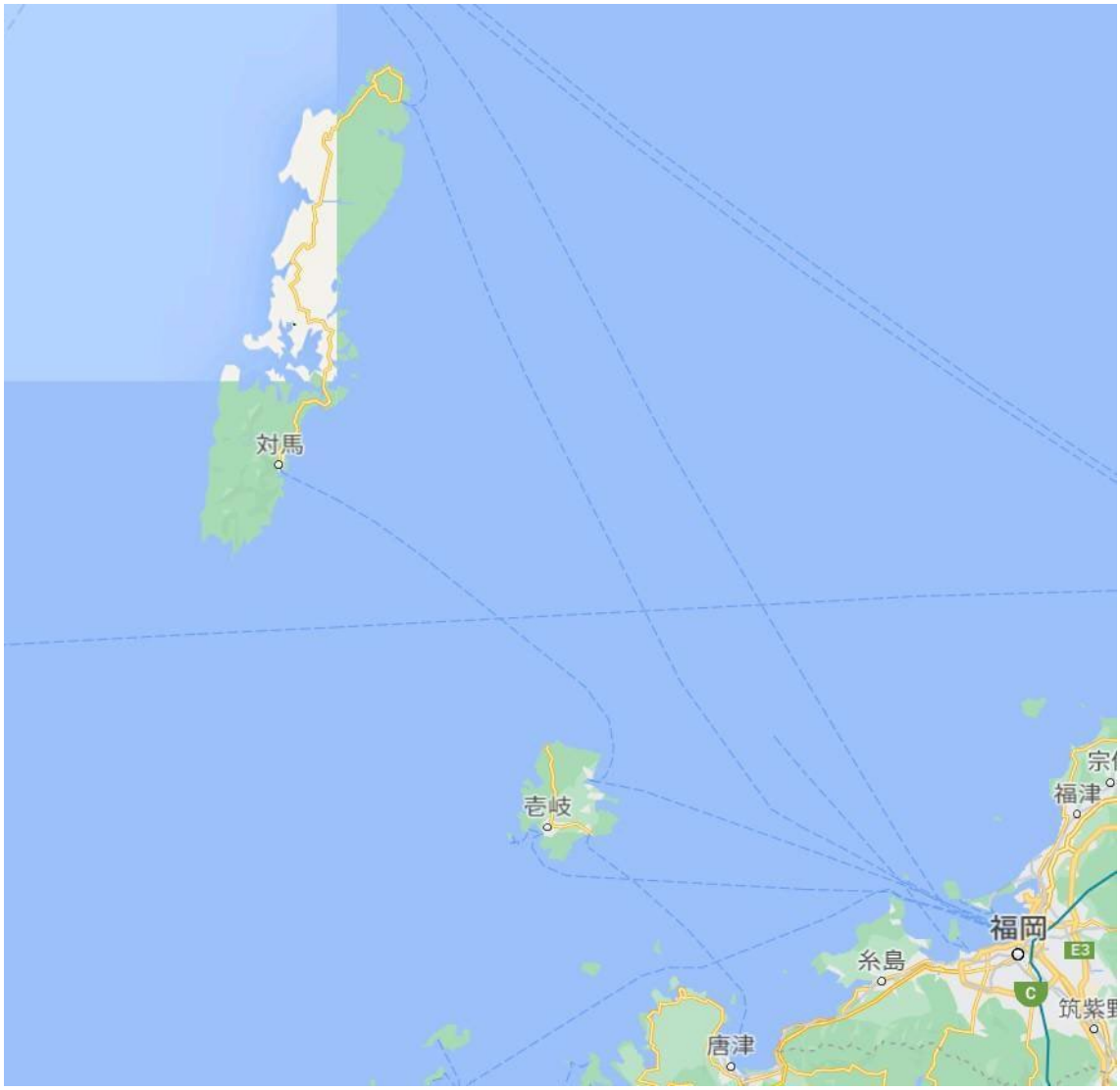


図 19　対馬と壱岐の地形的位置づけ

出所：Google 地図から引用

次は壱岐について述べていく。壱岐のことも司馬遼太郎は次のように述べている。「専門の神道者がこの術を用いたが、かれらの奇妙さは壱岐・対馬に集中的にいたということである。大和の王朝がわざわざ玄界灘の洋上からかれらをよんで宮廷の科学を担当させた。このことは壱岐・対馬を考える上でとくに重要なことではないか。」（司馬遼太郎、同、P.21）

壱岐は地形を活かした漁業なども主流であったことがわかる。

> 港に営まれる漁村集落を「浦（うら）」と呼び、内陸の農村を「触（ふれ）」、と呼ぶ。江戸期には触に 60～300 戸の農家があり、サスガシラ（百姓頭）が触れて回る範囲であったと云われている。この触をいくつかまとめた単位を「在（ざい）」と呼び、それぞれに庄屋が置かれた。（中略）
>
> 白村江の戦い後、朝廷が派遣した遣新羅使は壱岐を中継地とした。その一行に雪連宅満が居り、壱岐で病没したことが万葉集に記され、同行者による悼む歌が残されている。また宅満の墓が石田町に残る。
>
> （壱岐市、2019、P.24、P.27）

対馬と壱岐はどちらも外国との貿易中継地帯として栄え、その一方で国防の要としての役割も担っていたのである。

第6節　後期倭寇について

第1項　後期倭寇に属していた日本人たちについて

鄭若曽（ていじゃくそう）の『籌海図編(ちゅうかいずへん)』では、後期倭寇の日本人構成は薩摩(さつま)、肥後、長門(ながと)の人がもっとも多く、大隅(おおすみ)、筑前(ちくぜん)、日向(ひゅうが)、摂津、播磨(はりま)、紀伊、種子島、豊前(ぶぜん)、豊後(ぶんご)、和泉(いずみ)の人々であったという。

> 陳貴等七名、節年故違明禁、下海通番、貨賣得利。今次適遇潮陽海船二十一隻、稱水一千 三百名、彼此爭利、互相殺傷。
> 陳貴等七名、節年故より明禁を違へ、下海通番、貨売して利を得。今次適たま潮陽の海船 二十一艘、水一千三百名と稱するに遇ひ、彼此利を爭ひ、互に相ひ殺傷す
> （『明経世文編』巻219、嚴嵩南宮奏議 嚴嵩「琉球國解送通番人犯疏」、金沢陽、2016、P.112）

船は五島または薩摩を発し、大小琉球（沖縄、台湾）を経て、江南、広東(カントン)、福建に至ったという。このようなところからも、この地域と後期倭寇の繋がりの強さがうかがわれる。

中国は東シナ海に面した浙江、福建、広東の海岸沿いに非常に多くの島があり、その地形を活かして日本などの船と交易を進めていたことが伺える。当時の貿易陶器を研究する金沢氏は、日本の五島列島や薩摩あたりの島々が主に交易を進めていたと、述べている。このようなことからも後期倭寇との関係が築きやすい環境であったことがわかる。

薩摩や肥後は後期倭寇に何故加わっていたのかという視点も考察する。元々、薩摩の島は、大陸から台湾・沖縄・奄美を経て、様々な貿易品の入手地として栄えていた。後期倭寇の特色として「貿易」という面がかなり強く出ている。明の海禁政策によって彼らが生活の生業としていた貿易が憚られるようになり、その対抗手段として、武器をとり自由な貿易を求めたのではないだろうか。

また、琉球国が近くにあったということも大きいと思われる。琉球は、海禁政策の中でも交易を行っていた国であった。

> 15 世紀から 16 世紀にかけて中継貿易にもたらしたのは、明の海禁政策と対外関係だった。明は自国民の海外渡航を厳しく制限し、諸国との外交関係も皇帝への朝貢に限定していた。その明に来た舶来品の調達窓口となっていたのが琉球で、那覇港に集結した物資は皇帝への「進貢」と言う名のもとに大陸へ送り込まれていった。あたかも「明の総合商社」の役割を果たしていた琉球にとっては、明との関係性が国家の屋台骨となっていたのである。
> （国立歴史民俗博物館、2021、P83）

後期倭寇が明の沿岸部で活動が活発となるにつれて、琉球との間に摩擦も生じた。

> 1530 年代から、明の沿岸部では倭寇の活動が目立ちはじめた。倭寇は反体制勢力であるとともに、東シナ海を行きかう交易集団となり、明国内で需要が増した日本銀を運び入れるなどをしたため、明はその統制・鎮圧に膨大なエネルギーを費やすことになる。琉球では当初、倭寇を取り締まることはなかったが、1542 年の陳貴事件を契機として、明皇帝の厳命のもとに倭寇勢力をシャットアウトするようになった。このため、琉球も倭寇から攻撃されるようになる。倭寇の襲来を恐れ、那覇港では防衛のため、入り口の南側には王府の

命で 1553 年に屋良座森城が竣工し、北側の三重城も同じ頃に築かれた。どちらも岩礁の上に築かれた城塞で、海中道路で陸地と連絡し、さらに砲台の機能をもつ。天然の地形を巧みに利用して、那覇港は厳重に守られた港へと変貌したのである
（同、P85）

倭寇が明の沿岸部の活動を活発にしたことで、明は倭寇を害と見なした。次に、明の動きに倣って琉球が倭寇を警戒した。倭寇は琉球を攻撃対象と見なし、実際に攻撃している。倭寇にとって地域的に近く、唯一貿易を行った琉球は地形的に近く標的にしやすかったのだと考えられる。倭寇の動きから、彼らはただ闇雲に誰かに問わずに攻撃していたのではないことがわかる。

第2項　後期倭寇と関わりがある人々について

第 1 項の「後期倭寇に属していた日本人たちについて」をでは、後期倭寇の活動域としては、五島または薩摩を発し、大小琉球（沖縄、台湾）を経て、江南、広東(カントン)、福建に至ったということがわかった。後期倭寇の日本人の構成としては、薩摩(さつま)、肥後、長門(ながと)の人がもっとも多く、大隅(おおすみ)、筑前(ちくぜん)、日向(ひゅうが)、摂津、播磨(はりま)、紀伊、種子島、豊前(ぶぜん)、豊後(ぶんご)、和泉(いずみ)の人々であったということを述べた。そこで、九州に住んでいる人々や地域に関わっていた人々にスポットを当てて調べていきたい。まず、そこで博多商人の動きについて少し纏めていく。理由としては、15 世紀に博多商人が朝鮮・日本・琉球を行き来するようになると、航路を記した琉球の絵図があらわれていったからである。九州と沖縄の間の、吐噶喇列島や奄美諸島はかなり詳しく描かれている。これにより、琉球やそれらの中心を外国人が見ていることがわかる。16 世紀に東アジアに進出してきたヨーロッパ人は「レキオス」すなわち琉球を知り、世界地図に琉球が登場することになる。台湾と琉球の間に無数に描かれた島々は、八重山や宮古の諸島であると考えられる。これらの島々は、南の世界に開かれたのである。近世になって薩摩藩により作られた国絵図は、八重山、宮地、琉球、青海朝、石高など詳細な情報が盛り込まれていた。厳然たる支配者による地図であると同時に、海外の人々がどのようにこの地帯を捉えていたのかなどの繋がりも見えてくるものでもある。

図 20　　琉球国図　1696 年

出所:大学共同利用機関法人　人間文化研究機構　国立歴史民俗博物館、2021、海の琉球、P09（沖縄県立博物館・美術館蔵）

越前福岡藩士竹森道悦が太宰府天満宮に奉納した地図。「海東諸国紀」所収 琉球物国之図と酷似しており、同じ原図から描かれたと想定されている。博多から琉球にたどる経路と途中の島々が詳細に書かれており、博多と琉球を行き来した商人の知識が反映されている。

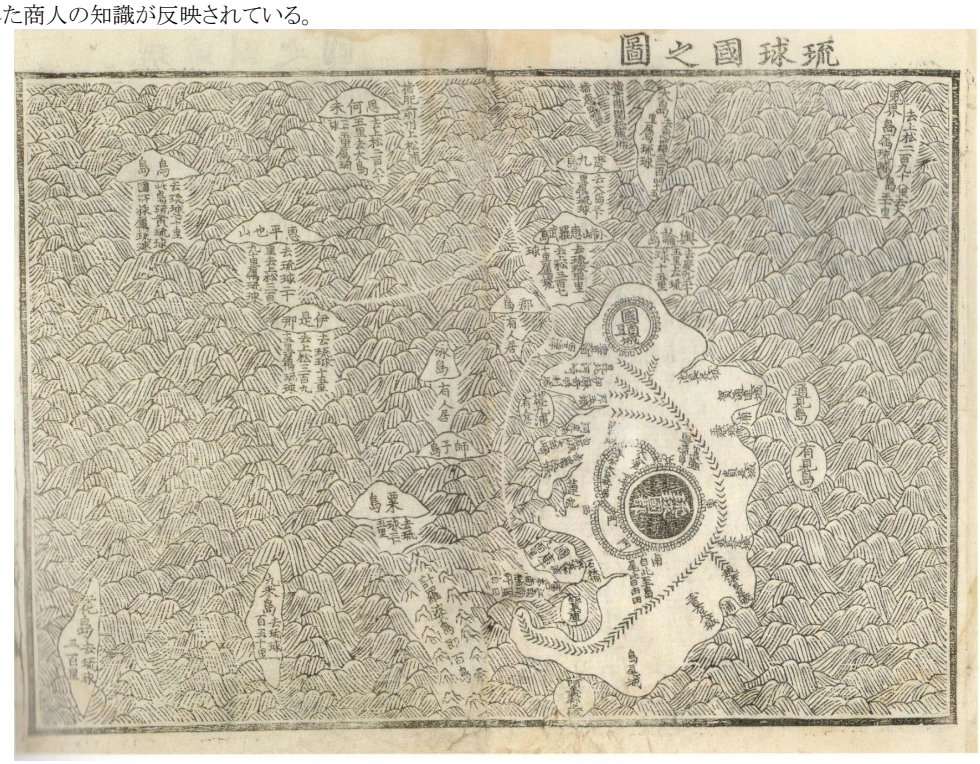


図 21　「海東諸国紀」所収 琉球物国之図　1471 年

出所:：同上、P09（東京大学史料編纂所蔵）

朝鮮の申叔船が編纂した「海東諸国紀」には、日本、琉球、三浦(朝鮮の日本向け貿易港)の地図が収録されている。琉球の地図は 1453 年に博多商人同案が朝鮮に献上した地図が元になっていると考えられる。

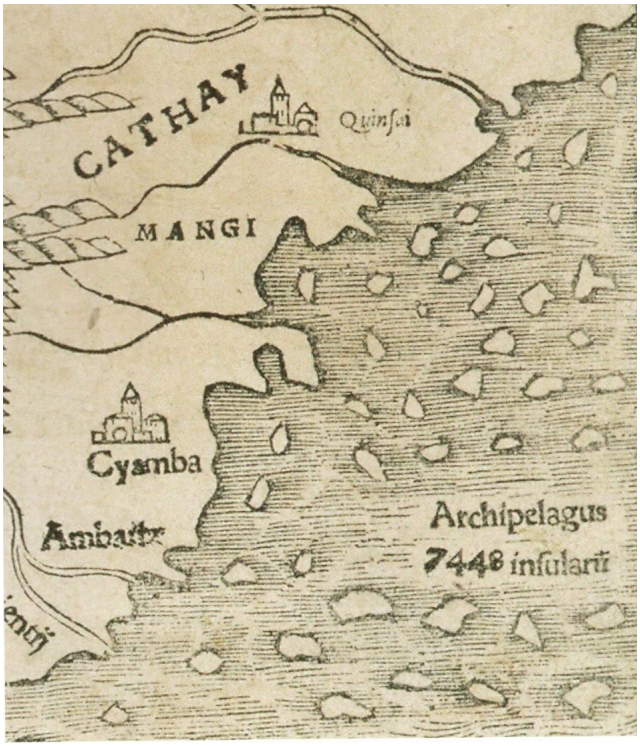


図 22　　ミュンスター アジア図　16 世紀

出所：：同上、P10（国立歴史民俗博物館蔵）

ドイツの神学者・地理学者であるミュンスターによって、16 世紀半ばに作成された地図。琉球おろか日本に関する地理情報がまだ乏しく、中国大陸の東の渦中には島々が点在するだけである。

図 23　　リンホーテン「東方案内記」所収　1596 年

出所：：同上、P11（国立歴史民俗博物館蔵）

オランダ人のリンスホーテンが出版した、ポルトガル領インドへの旅行生に掲載された地図。エビ状の日本列島は東西方向を無視して右上に位置する。九州島から中国大陸の間には Lequeo grande(大琉球)、Lequeo pequeno(小琉球)、すなわち琉球、台湾があり、その間に宮古、八重山と思われる島々が描かれている。

図 24　オルテリウス アジア図　1575 年

出所：:海の琉球、P13（国立歴史民俗博物館蔵）

オランダの地理学者であるオルテリウスが制作した世界地図は、広く流布した。日本の地図についてはいくつかのパターンがあるが、このアジア図のように 1569 年に刊行のメルカトルの世界地図にある日本図をしばしば採用している。琉球と台湾の間の島々は都、八重山と思われるが、”Fermosa”（台湾)とも書かれており、情報の錯綜が伺える。

薩摩を発し、大小琉球（沖縄、台湾）は海外の人々とのつながりがあったことが地図からもわかる。また、小林信三によると「15 世紀から 16 世紀にかけてヨーロッパ人は活発的な進出をはかり、15 世紀末にはポルトガル人がインドに到達し、さらに東シナ海に入って当時アジアで展開されていた中継貿易に参入した。またスペイン人もアメリカ大陸から太平洋を渡ってフィリピンに根拠地を築いた。そして 16 世紀半ばにはポルトガル人が種子島に現れ、九州各港を中心にポルトガル・スペインとのいわいる南蛮貿易が展開されるようになる。」（小林信三、2017、P9）とあるほか、「1543 年（一説には 1542 年）にポルトガル人が種子島に現れていこう、九州の諸港を中心に貿易が展開されてこと、鉄砲やキリスト教がもたらせれたこと、また石見銀山などから産出された大量の銀がポルトガル人やスペイン人の手を通じて中国にもたらされたこと、さらに中国からおもに生糸が日本にもたらされたことなどを確認する。」（同、P9）と、中国との関係性もあることがわかる。本州と比べて、他国との関わりも深いのではないかとここから感じ取ることができる。中世の日本は現代のように日本という国自体も一つではなかった。

「日本」と意識されていた北東の津軽から南の鬼界ヶ島（実際には北端は佐渡、東が津軽、西が五島列島、南が鬼界ヶ島である）にいたる領域の中で「国王」と認知され、自らも「公方」と称していた室町殿は自己の支配する領域を次のように把握していた。「遠国事ヲハ少々事雖不如上意候、ヨキ程ニテ被閣之事ハ非当御代計候。等持寺殿以来代々此御計ニテ候ケル由伝承様候」「南部方へ下国和睦事、以御内書可被仰出事、若不承引者、御内書等不可有其

曲歟事、遠国事自昔何様御成敗毎度事間、不限当御代事歟。仍御内書可被成遣条、更不可有苦云々。以上畠山意見〔二ヶ条也〕。山名申事、南部方へ御内書事ハ畠山同前也」ここから見える室町殿周辺の意識について本郷和人氏は「東北、関東、九州地方は「鄙」であり、政治的遠国、辺境なのであって、幕府が実際に掌握すべき地域は「畿内近国」「瀬戸内」「中部」の三ブロック」であると論じた。このような統治理念が「倭寇」への取り組みを消極的にし、結果「遠国」たる「鎮西」の一部＝少弐氏の支配地域たる壱岐・対馬が倭寇システムに組み込まれていった、とはいえるだろう。（秦野裕介、2002、P97-P98）

九州は国とまではいかないが、それでも中央にとり京周辺にくらべて治安維持の重要性の低い地域とされていた。異国と日常的に関わることで本州の人々とはまた違う価値観を形成していた可能性が高いとわかった。

第7節　　当時の日本人は倭寇をどう位置付けしたのか

当時の日本人は倭寇を善でも悪でも割り切っていなかったのではないかと思われる。そもそも海賊という存在は日本各地に存在しており、それは当時の日本人とっては当たり前なものであった。そして、倭寇というものはあくまでも人々が生きるための手段の一つであったという面が強いと思われる。実際に全国統一され法がある程度整備されれば倭寇などの奪略という方法を取る集団は徐々に減少していった。また、餓死や生きていくことに困難である場合ある程度グレーゾーンの行いをするのは仕方ないというような考えが潜在的にあったのではないかと思われる。例えば、鎌倉時代で起こった寛喜の大飢饉では人身売買が黙認されていたということがあった。

清水氏によれば、鎌倉時代は 1293 年 4 月に以下のような法令を出している。

> 寛喜の大飢饉（一二三〇～三一）のとき、餓死に瀕して売られた者については、彼らを買い取って養育した主人の所有を認可した。本来、人身売買はかたく禁じられていることであり、これは飢饉の年だけの特例措置である。しかし、その後になって、 身売りした者を飢饉のときの安い物価で買い戻そうというのは、虫が良すぎる話である。ただし、売買した双方が納得ずくで現今の相場で買い戻すのなら問題はない。
>
> （清水克行、2021、P110）

と述べられている。寛喜の大飢饉は日本中世を襲った飢饉のなかでも最大級のものであった。そのなかで、飢饉における人身売買は特例であるという認識が浸透していたことがここでわかる。ここから、生きていくためという点において罪悪を重ねる倭寇は当時の日本人とって絶対の悪という訳ではなかったと考えられる。前期も後期もあくまでも倭寇は選択肢のなか一つであったのだ。

第4章過去現在の世界の海賊

第1節　　海賊の起源

海賊は、海上で船を襲い人々を連行・殺害し、沿岸の町では財産を強奪・破壊するような存在である。しかし、世の中には英雄として描かれているような漫画や映画が存在している。今回テーマにしている倭寇についても、略奪や人々を襲う側面もあったものの、貿易商人として活動していた一面もある。歴史上における世界の海賊も、様々な側面があり、歴史に与えた影響は大きいのではないか。では、そもそも海賊はいつの時代に生まれたのであろう。まずは史料に残る最古の海賊から記載したいと思う。

海賊の歴史は古く、後述するポリュクラテスが登場する以前にも、海洋では海の民と呼ばれる人々が現代で言う海賊行為を行っていたと言われている。歴史の父と呼ばれるヘロドトスが綴った逸話のひとつに、サモス島の支配者であるポリュクラテスの物語がある。このポリュクラテスこそ、古代ギリシアの海賊王とも言える人物である。ヘロドトス自身がポリュクラテスを海賊と呼んでいたわけではないものの、海上において見境なく船を襲い、沿岸の町を略奪するような行為は現代人から見ると海賊にほかならない。この、ポリュクラテスが活動していた地域は、エーゲ海南東部のサモス島である。紀元前 6 世紀のサモス島は、交易の拠点として経済的に発展するとともに、最高神ゼウスの妃であるヘラの誕生の地として宗教的にも文化的にも栄えた地域であった。紀元前 538 年には、ポリュクラテスはサモア島で反乱を起こし、権力を握って支配者となった。さらに、勢力の拡大を目指し、ガレー船団を編成してエーゲ海に進出していった。ガレー船 100 隻、弓兵 1,000 人を擁したガレー船団は、周辺海域を支配・征服して略奪行為に及んだ。このような海賊行為に対して、敵対心を持つ者が現れる。ペルシア帝国の影響下にあった都市サルディスの総督オロイテスがそのうちの一人であった。オロイテスは、ポリュクラテスに対して、支配下に入りたいと巧みに近づき、自らの町に誘い込んだ。ポリュクラテスの警戒心を解いたところでオロイテスはポリュクラテスを殺害したのであった。ポリュクラテスの死体は、サルディスの町で磔にされ続けた。（桃井、2017、P.4-6）

このように、略奪行為など傍若無人な振る舞いをしていたポリュクラテスであったが、ヘロドトスはこれを非難するのではなく、「海上制覇を企てた最初のギリシア人」として「高邁な志」を持ち、「ギリシアの独裁者中、その気宇の壮大なる点においてポリュクラテスに比肩しうるものは一人だにない」賞賛している。

このように、残虐性を持つ無法者とみる者もいれば、力によって相手を圧倒して略奪行為を行うことは力を持つ者のみが行える行為としてむしろ誇らしいとみる者もおり、海賊の古い事例からみても海賊が絶対悪と受け取られていたわけではないと考えられる。

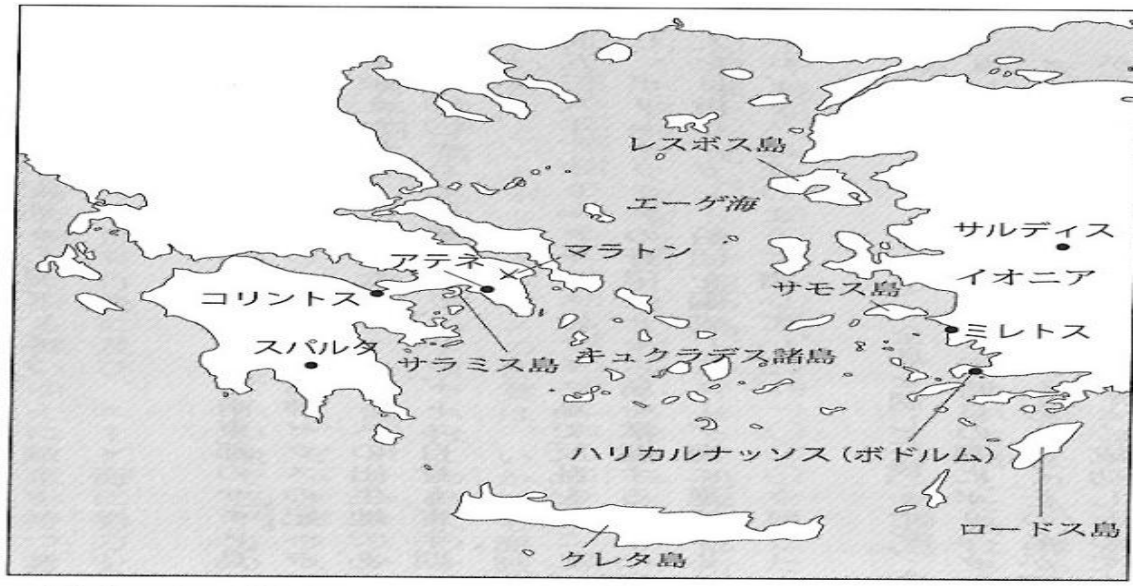


図 25　ギリシャ・エーゲ海の地図
出所：桃井 2017,P.3

第2節　　16 世紀から 17 世紀のアドリア海における海賊行為

本節では、ナタシャ・シュテファネッツ(2020)を主に参照した。

第1項　　16 世紀から 17 世紀のアドリア海における地政学的状況

アドリア海域は、11 世紀からヴェネツィアの支配的領域であった。ヴェネツィアは、ドゥブロブニク共和国の征服を試みながら、ダルティマ及びイストリアの都市と島の大半を買収・征服することに成功し、自らアドリア海とその交易の誰もが認める統治者であると宣言した。しかし、15 世紀に入るとオスマン帝国の侵略に脅かされるようになる。オスマン帝国の軍勢は、アドリア海域の南東海岸とその広大な後背地を征服することで、地中海全域の支配者になっていった。しかしながら、アドリア海においては、ヴェネツィアの優位を認め、交易ルールを受け入れてきた。オスマン帝国の商船は、アドリア海では武装することは禁止されており、旅券の所持を義務付けられ、定められたルートを辿る必要があり、ヴェネツィアでのみ関税を支払っていた。この一方で、オスマン商人は、ヴェネツィア領土内ではヴェネツィア臣民と同じ権利を与えられた。16 世紀の南東ヨーロッパ・アドリア海の沿岸部では、ヴェネツィア共和国、ハプスブルク帝国、オスマン帝国という 3 つの大国が政治的、領土的、経済的な利害で衝突していた。

地中海の東部にあるアドリア海は、内海であるために航行がしやすく、沿岸の地形にも恵まれていたため、様々な海洋都市が古くから栄えていた。古来、海上交通が盛んであり、これにより発展したアドリア海域では、都市間の交易のために金品や物資を積んだ商船が多く行き交っていた。このように、交易が発展、内海で航海がしやすいといった特徴があり、積み荷を狙った海賊には絶好の場所となっていた。

アドリア海での交易は、通常、強くて危険な風と霧の出る冬は避けられ、大半が夏に、ときには春と秋にも行われた。アドリア海では、より良い気象状況や、その海岸線がより多くの避難場所や航行の指針を提供したため、東岸の方が好まれた。アドリア海沿岸諸都市の市や縁日がいつ開かれるかによって、現地交易の頻度と時期が決まった。地元の貿易船隊は、慎重に指定された市の日に特定の都市を訪問した。（シュテファネッツ、2020、P.19）

図 26　アドリア海の地図

出所:越村 2020,P12

第2項　16 世紀から 17 世紀の海賊「ウスコク」の実態

ウスコクは、1650 年代頃から 1720 年代までのいわゆる海賊の黄金時代の 100 年以上前に地中海に存在していた海賊である。ウスコクは、アドリア海の東岸よりの海域を行き交う商船を襲撃し、その金品を奪っていた。活動時期は、1530 年代から 1618 年までである。当時の情勢は次の通りである。

オスマン帝国が勢力を拡大し、オーストラリアに侵攻した 16 世紀から 19 世紀まで、ハプスブルク帝国はオスマン帝国に対する防衛ラインを辺境の地に設定していた。これを「軍政国境地帯」といい、大半が現在のクロアティアを横断し、アドリア海まで伸びていた。ウスコクは、この軍政国境の存在と大きくかかわっているのだ。(越村、同、P17)

そもそもウスコクという名前は、どのような意味を持っているのであろうか。越村は以下のように記載している。

そもそもウスコクという名の語源はクロアティア語の動詞「ウスコチティ」=「飛び込む」で、当初「ウスコク」とは避難民全般を指す言葉だったのが、次第に、クロアティアのセーニという町にやってきて住み着いた国境兵士のこと、最後にはオスマン帝国の台頭から元いた土地を捨てて国境の非正規兵として住みついた海賊を指す言い方になっていく。(越村、同、P.17)

このように、ウスコクの語源は難民を指すことばであったことがわかる。では、なぜウスコクは難民から海賊に転身したのであろうか。越村は以下のように述べている。

> ではなぜかれらが“海賊”になったかというと、ウスコクの多数は無給の兵士であり、暮らしていくための方策のひとつとして略奪行為を選んだためである。軍政国境を守備する兵でありながら、ハプスブルク帝国の国境警備当局にはなんら財政負担をかけず、自分たち

でやりくりしていた。それどころかウスコクは、部隊の指揮官や警備当局に利得の一部を献上していた。国境警備の体制を維持したい帝国にとっては極めて都合のよい存在だったといえるだろう。
（同、P.17-18）

ウスコクは、ハプスブルク帝国を守る兵士であったにも関わらず、基本的にハプスブルク帝国からは給与を受け取っていなかった。このように、ウスコクの多くは兵士としてただ働きしていたため、生活をするために海での略奪や強盗のように海賊行為をする必要があった。

ウスコクが滅亡するきっかけとなったのが、1615 年にヴェネツィア共和国がハプスブルク帝国に宣戦布告したウスコク戦争である。当初優勢であったヴェネツィア共和国の軍は、これを維持することができなかった。ハプスブルク帝国においても、皇位継承問題に見舞われてしまう。このような環境において、両者は 1617 年にマドリードで和平交渉を締結する。ハプスブルク帝国側はヴェネツィア共和国を悩ませていたウスコクを拠点のセーニから追放し、船を焼き払うことに同意した。ウスコクは抵抗したが、その多くがクロアティア軍政国境地帯の内陸部に移住させられた。このようにして、ウスコクは歴史から消えていったのである。

第3項　ウスコクは英雄なのか

これまで、ウスコクとはどのような海賊だったかについて論じてきた。ではウスコクは英雄だったのだろうか。それとも悪人であったのであろうか。越村は以下の通り記載している。

日本ではほとんど知られていないが、本国クロアティアでは数多くのうたに詠まれた英雄でもある。
ウスコクについては、熱心な支持者もいれば、反感を持つ者もいた。たとえばハプスブルクの大公そして皇帝も、オスマンの攻撃からヨーロッパを守る者としてウスコクを信頼し、かれらをキリスト教世界の守り手とたたえた。この見方をローマ法王も支持していたが、他方、当時ヴェネツィアの神学者で歴史家であったパオロ・サルピ師は、「ウスコクなど海賊や盗賊の類にすぎぬ」と決めつけている。こちらの見方は、アドリア海の安全に責任を負うヴェネツィアの将校たちや、航海の安全に不安を抱く商人たちの立場を反映したものだった。（越村、同、P.20）

このように、立場が変われば支持も変わることがわかる。では、ウスコクが海賊行為を行っていた国境付近に暮らす人々はどう感じていたのか。海賊行為を間近で見ており、恐怖を感じていたのではないかと思うが、ウスコクを最も根強く支持していたのが国境付近に暮らす人々だと越村はいう。

一方で、ウスコクをもっとも根強く支持したのが、国境付近に暮らす村びとたちだった。かれらはウスコクについての証言をほとんど残してない。しかし、どんなに禁じられても、長い目で見ればかれらこそがウスコクの蛮行による最大の犠牲者であるにもかかわらず、村人たちはウスコク贔屓を続けた。はるか後の世になって国境地帯の農民や牧人たちは、叙事詩を借りてウスコクの記憶を語り継ぎ、その勇猛さ、犠牲の精神、そして名誉を尊ぶ厳しい掟に触れながら、ウスコクを英雄とみなし、かれらをあらゆる権力からの自由の象徴とみなして讃えたのである。
（越村、同、P.20-21）

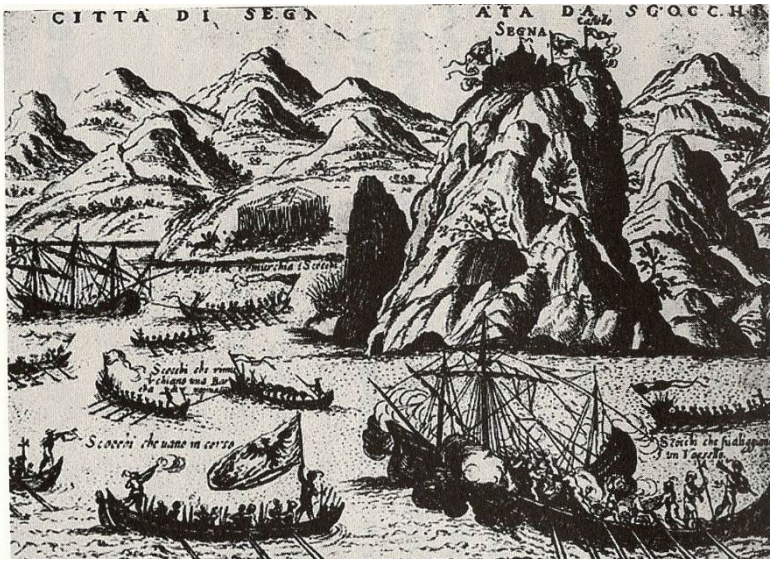


図 27 ウスコクを肯定的に描いた版画 USKOCI uskockinapad na mletacki brodisprad Senja,XVI センジャにおいてウスコクがベネチアの船を攻撃している 16 世紀バチカン図書館所蔵
出所:越村 2020,P.24

第3節　　フィールドワーク(ヒアリング):16 世紀から 19 世紀初頭の北アフリカ海賊－近代国際秩序の形成－

インターゼミ・アジアダイナミズム班では、フィールドワークとして、2021 年 10 月 9 日に清泉女子大学准教授の桃井治郎氏をお招きし、寺島文庫にて講演をいただいた。

桃井准教授の専門は北アフリカ海賊であり、大変専門的で深く有意義な講義を受講させていただいた。講義は、「16 世紀から 19 世紀初頭の北アフリカ海賊」をテーマに近代国際秩序の形成まで幅広いお話を伺うことができた。

16 世紀頃の地中海では、大きく分けるとスペイン帝国・オスマン帝国という 2 つの帝国が向かい合っていた。1492 年にスペインがグラナダを支配し、レコンキスタ(再征服)を完成させた。これに伴い、イベリア半島を追われたイスラーム教徒やユダヤ教徒などが北アフリカに移住をしていった。スペインを追い出されたことによる復讐心から略奪を行う者もおり、それが北アフリカ海賊の始まりとなった。

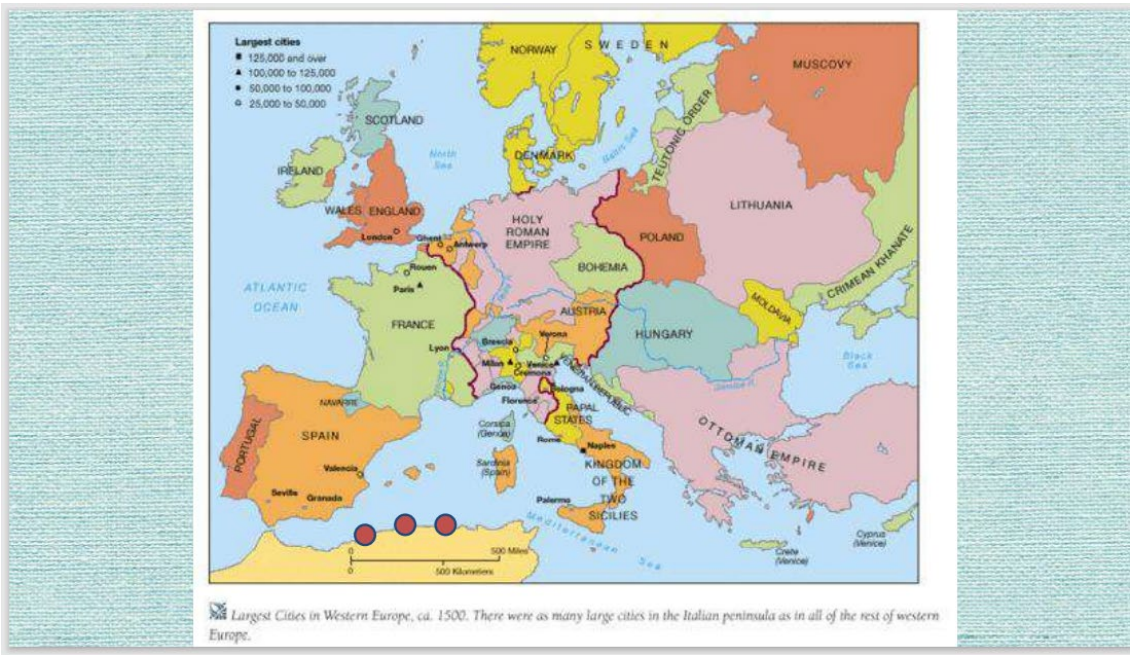


図 28 フィールドワーク資料

出所:清泉女子大学・桃井准教授

倭寇は貿易商人という面を持っていたが、北アフリカの海賊は単純な略奪者である。スペインは海賊の鎮圧のために、艦隊を派遣し、北アフリカの港であるオラン、ベジャイア、アルジェなどを攻撃し、砦を建設することで、海賊を封じ込めた。その後、オスマン帝国から新たに海賊がやってきた。特に有名なのがエーゲ海レスボス島生まれの兄弟、ウルージ(Arrudye)とハイルッディーン(Hayreddin)である。1516 年、アルジェを征服し、ウルージはアルジェの支配者になった。ウルージは、対立する近隣のアラブ人首長を破り、周辺地域を支配アルジェリア西部にあるザイヤーン朝の首都トレムセンに遠征した。しかしながら、スペインも対抗し、1518 年、スペイン新王カルロス1世はトレムセンに軍を派遣して、ウルージはスペイン軍に敗れ、死去した。ウルージの死後、弟ハイルッディーンはアルジェの首長を継承したものの、スペインからの脅威に直面していた。そこで、ハイルッディーンは、オスマン帝国のスルタン、セリム 1 世 (在位 1512-20 年) に使者を送り、援軍を要請した。セリム 1 世はアルジェに援軍を派遣、アルジェはオスマン帝国の属領となり、ハイルッディーンはオスマン帝国アルジェ領総督となった。

1534 年、オスマン帝国第 10 代皇帝であるスレイマン 1 世 (在位 1520-66 年)は、ハイルッディーンを北アフリカ総督に任命され、与えられたガレー船 40 隻を率い、ハフス朝チュニスを攻略した。しかし、西地中海までオスマン帝国が進出してくることに懸念を持ったスペインは、1535 年にカール 5 世(前述、スペイン新王カルロス 1 世)自ら出陣チュニスに遠征し、チュニスを奪い返した。

このように、オスマン帝国とスペインの覇権争いが北アフリカをめぐって展開される時代がやってきた。ハイルッディーンは援軍要請のため、再びイスタンブールに赴いた。スレイマン 1 世は、ハイルッディーンをオスマン帝国の海軍大提督に任命し、ハイルッディーンに対して、チュニス奪回ではなく、南イタリア襲撃を指示した。これに対して、1538 年、神聖ローマ帝国、ヴェネツィア、ローマ教皇領は、神聖同盟を結成し、同年、ギリシア西岸のプレヴェザで、オスマン帝国軍と交戦したものの、全面対決を前に神聖同盟側の艦隊司令官であるドーリアが撤退し、戦闘は終結した。その後も、アルジェを拠点とする海賊が横行した。1541 年、カール 5 世は大軍を率いてアルジェ遠征したものの、アルジェ沖で嵐に会い、敗北した。その後、1571 年、レパントの海戦でオスマン帝国艦隊と神聖同盟艦隊が戦ったものの、ここでも最終的な決着はつかなかった。

大航海時代を経て、17～18 世紀の地中海世界は、ヨーロッパ諸国の関心が、地中海から大西洋やカリブ海、インド洋などに移っていった。オスマン帝国は、スペインと対立しているフランス、イングランド、オランダとカピチュレーションを結んだ。カピチュレーションとは、オスマン帝国のスルタンが恩恵的にヨーロッパの国々に特権を与えてあげるというものであった。これは、オスマン帝国にとって不利な内容であったものの、ヨーロッパの国々と比較してオスマン帝国は絶対的な優位にあったため、恩恵を与えるようなものであった。このように、北アフリカ諸領とヨーロッパ諸国の間で、和平条約が締結したがその見返りに、北アフリカ諸領は貢納を要求し、ヨーロッパの国々から大砲や木材などを受領していた。これにより、貢納の代価としてそのヨーロッパ諸国のみは襲わなくなり、結果的に、北アフリカ海賊の活動は沈静化していった。

18 世紀後半にアメリカ合衆国はイギリスから独立した。イギリス領であったころは、和平条約を結んでいたので襲撃対象外であったが、独立したアメリカは、北アフリカ海賊の攻撃対象になった。1785 年、地中海を航行するアメリカ商船 2 隻がアルジェ領のガレー船に拿捕された。1795 年 9 月、アメリカは、2 万 1600 ドル分の銃器や船舶資材を毎年アルジェ領に貢納するという条件で、アルジェ領と和平条約を締結し、続いて 1797 年にはトリポリ領と和平条約を締結した。しかしながら、アメリカ国内でこのような関係は不適切であるという考えが増加していった。1801 年 5 月、条約内容を不服として、トリポリ領に対して条約を破棄し、宣戦布告し、トリポリ領による海賊行為に対し、アメリカは艦隊を派遣した。1805 年、アメリカ艦隊はトリポリ港を砲撃し、同年 6 月、和平条約締結した。その後、米英戦争の期間、アルジェ領はアメリカとの和平条約を破棄し、アメリカ船を拿捕した。1815 年、アメリカ艦隊がアルジェに遠征し、アメリカ人の解放、和平条約の締結、貢納の廃止、アルジェ領による賠償金の支払いを勝ち取った。この影響がヨーロッパにも及び、19 世紀初頭、イギリス退役軍人シドニー・スミスが北アフリカ海賊廃絶に向けて各国へ呼びかけをおこなっていった。

ナポレオン戦争後の 1814 から 15 年、ウィーン会議が開催され、これ以後の国際秩序はウィーン体制と呼ばれるようになる。ウィーン体制は、正統性主義・力の均衡・協調外交が特徴であり、その後、列強間で国際問題に関する協議が行われ、北アフリカ海賊の廃絶の決議がなされる。それまでの各国個別の外交関係とうってかわりヨーロッパ諸国が一丸となってヨーロッパの価値観を異文化の国へと押し付けることができるようになったのである。また、産業革命のもとでヨーロッパの周縁地域はヨーロッパ経済圏に飲み込まれ、それまで生産していなかったワインのためにブドウ畑を開いたりするようになった。このような状況下で、1830 年にフランスはアルジェを植民地支配、チュニスと条約を締結し、アルジェとチュニスは、海賊の廃絶を明言しなかったものの、実質的には消滅した。

第4節　「海賊行為」と「私掠行為」

本節では海賊行為そのものの実態についての理解を深めると共に、「海賊」と呼ばれた人々を正しく理解することを目的とする。

まず海賊というものを理解する上で「海賊行為」の定義を正しく認識する必要性がある。現在の「海賊行為」は国連海洋法条約を紹介する逸見によると、

> 「私有の船舶の乗組員、または旅客」によるものであること、「私的目的のために行う」行為であること、自船内での暴力行為の含まれない「他の船舶」に対する行為であり、併せて「公海上」及び「いずれの国の管轄権にも服さない場所」での行為であること
> （逸見、2009）

と定められている。

我々現代人は「海賊行為」と聞くと一概に犯罪行為であると認識しがちである。しかし 16 世紀ヨーロッパでは必ずしも違法行為というわけではなかった事実がある。この事を理解する上で大切なのが「海賊行為」と「私掠行為」を正しく区別することである。16 世紀のヨーロッパにおける「海賊行

為」の定義は、

「公的権力の認可を受けない、あるいは公的権力が許した範囲を逸脱して行われる非合法な海上での、あるいは海からおこなわれる掠奪行為」（薩摩　2013、P202）

であり、犯罪行為として処罰の対象であった。対して「私掠行為」は、

「拿捕許可状により公的権力の許可を受けた民間人（私掠者）による合法的な掠奪行為」（薩摩、2013、P202）

である。その対象は敵国や一部の国の船舶に限定されること、原則として戦時にのみ有効であるといった諸条件付きではあったが法律に反してはいない行為である。つまり「私掠行為」とは民間人が船舶を利用して掠奪行為を行うという点において海賊行為と共通する点はあるものの、当時ではあくまでも公的権力によって認められた合法行為であったということだ。この「私掠行為」であるが、フランス、オランダ、スペイン、イギリス、スウェーデンといったヨーロッパ地域で行われてきた歴史がある。

第5節　　イギリスにおける海賊

第1項　国家主導での略奪行為

本節では、イギリスにおける海賊と呼ばれた人々の「私掠行為」に触れる。

16 世紀当時イギリスは経済力を伸ばし世界の先頭を走るスペインやポルトガルといった国々に遅れをとっていた。また、経済的な面だけでなく政治的な面においても周辺国から圧力をかけられていた。カトリック勢力とプロテスタント勢力の対立が深まったことにより、プロテスタント国家であるイギリスはカトリック国家からの侵略をされる可能性があった。経済的、そして政治的に追い詰められた中、当時の長であるエリザベス一世が頼みの綱としたのが国家先導での海上における「略奪行為」であった。海上で遠洋貿易の帆船を襲撃し、高価な金品を略奪させた。その後、ロンドンへと略奪した金品を持ち帰る。その持ち帰った金品をロンドンやアントワープといった地に持ち込んで売却することで国の新たな資金源とした。これは第一項において解説した定義においては「私掠行為」にあたる。

そんな「私掠行為」をしていた海賊の中で、エリザベス女王が特に寵愛していた海賊がいる。その海賊の名はフランシス・ドレークである。ドレークはイギリス人として初めての世界一周航海を成し遂げた人物でもある。このドレークによる海上での「私掠行為」によって、イギリスは多くの富をもたらされることとなった。

ドレークが「私掠行為」において持ち帰った物品は竹田によると

ドレークは世界各地で略奪の限りを尽くしたが、その中身を覗いてみると”金と銀”のコインや延棒が中心で、これらに加えて大量の砂糖やワインなどが含まれていた。

（竹田　2011 第 1 章、第 1 項、9 段落）

とある。また、その利益は以下の通りである。

イギリスに約 60 万ポンドをもたらし、エリザベス女王は少なくとも、半分に当たる30万ポンドを懐に入れたという。この金額は文献によって異なるが、当時の国家予算は20万ポンド前後と見積もられており、ドレークは実に三年分の国家予算に相当する”海賊マネー”をイギリスに持ち帰ったことになる。

（竹田　2011 第 1 章、第 1 項、29 段落）

このようなイギリス、およびエリザベス女王に対しての功労から 1582 年にプリマスの市長に就任、またエリザベス女王から「ナイト」の称号を与えられることとなる。社会的特権階級であるナイトとなったドレークは名実ともに国家の英雄として讃えられその一生を終える。

ではどのようにしてこれほどまでの大規模な「私掠行為」を行わせていたのか。それは「海賊シンジケート」の存在が大きい。シンジケートとは、「組合」や「出資者の集団」といった言葉を意味する。海賊シンジケートのシステムは次の通りである。掠奪行為を行うに際して複数の海賊船団を編成させる。その際に必要となる帆船、船員や船上での食糧といった必要な物資を、女王とその他の投資家が資金を持ち寄って用意する。女王とその他の投資家はその見返りとして掠奪行為で他の国から奪った金品の一部をリターンとして受け取り、その利潤を得た。

シンジゲートを結成する際、海賊船団の指揮官にエリザベス女王が口頭で伝えるか、側近であるウォールシンガム秘書長官を通じて伝達する手法をとり、決してエリザベス女王が直接関与した痕跡が残らないように行われた。表面上では民間主導での「私掠行為」と見せかけながら、女王が秘密裏にスポンサーとして参加し、帆船や航海に用いる資源の援助を行っていたのである。つまりこれこそが、裏でエリザベス女王が操る「国家私掠ビジネス」であったのだ。

例え海賊船がスペインに追われ、捕らえられイギリス人の海賊が逮捕されたとしても、「スペインやポルトガルによる厳重な講義を受けても、□王は海賊□為への関与を決して認めることはなく、表□的にはスペインやポルトガルとの友好関係を装うことは忘れていなかった」(竹田、2011、第 1 章、第 1 項、47 段落)とあるように、責任を逃れることのできるシステムが取られていたのだ。

写真 5　エリザベス女王がフランシス・ドレークにナイトの称号を与える様子

出所:ジョン・ギルバード(1817～1897)

「Queen Elizabeth I knighting Sir Francis Drake on biard his ship, the Golden Hind, Deptford」(Photo by Universal History Archive)

第2項　イギリスの海賊行為の台頭と弾圧

エリザベス女王1世の死後、1603 年にジェイムズ1世が即位し対スペイン戦争が終結すると一時的に私掠行為は禁止されることになる。しかしそれまで「私掠行為」を行なっていた人々が海賊として非合法な「私掠行為」に手をつけ始めることが増え始めることになる。この要因として挙げられるのが過剰な労働力の存在である。

戦時中における「海軍行為」、「私掠行為」においては、多くの水夫労働力が求められ、水夫に対する需要が大きくなった。しかし戦争が終結すると、海軍における水夫の数が削減され、拿捕許可状（私掠行為を認可する証書）が失効して合法的な私掠行為ができなくなる。このような要因によって、水夫の労働力が過剰となり、失業や賃金低下といった問題を引き起こした。労働条件の悪化によって生きていく術を失った海賊たちは、非合法で弾圧の対象となる「海賊行為」へと走ることとなった。

先述した通り、違法の海賊行為は取り締まりによって弾圧される対象であり、すぐに収束するはずであった。しかしながら一定の間、海賊たちが「海賊行為」を続けられた影の要因がある。一つ目が市場の存在である。

> 海賊たちは奪った獲物を処分しなければならなかったが、そうして処分された品物を安価で買い取っていたのは彼らと結託していた商人たちであった。海賊行為は暴力による略奪という違いはあるものの、密貿易と同じく、商品を非合法的なルートで正規のルートよりも安価に入手する手段であった。そのため海賊と結んでいた商人たちないし地方や植民地の有力者や官史は、自己の利益になる限りにおいて海賊行為を歓迎していた
> （薩摩、2013、P188）

イギリスには「海賊行為」によってもたらされた違法な金品を受け入れる非合法な市場があり、「海賊行為」を行うことの価値が保障されていたと言える。

そして二つ目に、国の政府による黙認がなされていたということがある。政府は「海賊行為」であってもその利益が自国にとってあれば、積極的には取り締まることをしなかった。

> 民間人が所有する暴力は、未だ専門的な海軍やそれを支える財政的基盤が不十分な時代や地域にあっては本国に財政負担を強いることなくスペインなどの敵対国に打撃を与えうる重要な手段であった
> （薩摩、2013、P188）

法の上では違法でありながらも、その利潤に目がくらんだ英国政府は黙認していた。これらの要因が海賊たちの活動継続を手助けしていたのだ。

しかし、18 世紀に入ると、「海賊行為」や「私掠行為」といった自国や植民地での略奪行為に頼らずとも、正規の貿易で利潤を上げられるようになる。そうなると、貿易の障害となる海賊が邪魔になってくる。政府は海賊の鎮圧を推し進めるようになった。海賊を捕らえるための拿捕許可状を民間人に発行し、直接的な討伐を強いたり、海賊行為に対する法律である海賊法を、締め付けの強い内容へ修正を行なったりした。16 世紀では国家の英雄としてその評価を受けていた海賊たちは、一気に悪者へと吊し上げられたのだ。イギリスにおける「海賊」と呼ばれた人々は 18 世紀初頭までに鎮圧され、以降はイギリス人を主体とする「海賊行為」は見られなくなった。

第3項　被害者的側面を持つ海賊

海賊は悪であるかのように見られることが多いが、彼らは被害者としての側面も持ち合わせていたと言える。海賊たちの立場や生活基盤は、国や国王の権力、社会体制の変化など、抗いようのないものに振り回されてきた。前述した通りイギリスの海賊たちは 16 世紀においては国王の鉾とし

て従順に従って生きていた。しかしながら利用価値がなくなったと判断された途端に支援は打ち切られ、それだけでなく悪者として吊し上げられた。つまり都合が良い時だけ利用されたと言えるのではないだろうか。こうして生きていく術を失った人々は、弾圧を受けながらも生きていくために「海賊行為」を行なっていたのである。このような事実からしても、本当に海賊とは悪と言い切れるのであろうか。もちろん殺戮や略奪行為そのものに正当性があるというわけではない。しかしながら影に隠れて利潤だけを受けていた大きな権力者、ひいては社会に対して目線を向けて考えることも必要である。私はそこに大きな悪が存在するのだと考える。

力を保有する者、社会があるべき姿とは弱者が安心して生活できる環境の整備に尽力することである。これは現代においても変わらない。望まない悪行や犯罪行為をこれ以上増やさないためにも、迅速に取り組むべき問題であると考える。

おわりに

倭寇の発生は、前期倭寇においては高麗国と日本の進奉貿易の後退が背景にあり、後期倭寇においては明の海禁政策により貿易が限定され密貿易化したことが背景にあったことは、これまでの研究により明らかである。

特に 16 世紀の後期倭寇において、明からの視点で見ると、朝貢貿易という管理・規制の下での貿易体制を構築する一方で、銀の需要に対応した銀の流入が経済の回復・安定に果たした影響を考えると、倭寇という民間貿易は必要なものであったともいえる。つまり、明という国家そのものに、規制と実体経済の狭間におけるジレンマが存在したと考えるのである。

1567 年に海禁が解除されて貿易が公に認められ、明の治安も安定するに至るのであるが、需要と供給の変化に対応した経済が先行し、国家としての対応は経済に遅れて判断・整備されていったと言えるのではないだろうか。

13 世紀のモンゴル帝国・大元ウルスによる、東西ユーラシア陸路と東南アジア・インド洋までの海路による交易が開かれた時代と、17 世紀以降のモンゴル帝国の継承とも言われる、満州族支配の大清帝国による民間自由貿易・互市の時代の間に存在する明代の倭寇的状況は、政経分離・政冷経熱の時代であり、それが倭寇というある種特殊な海賊を生んだのだと考える。

特殊な海賊という点では、2021 年 8 月のフィールドワークでの信州大学准教授・豊岡氏のレクチャーを参照するならば、カリブ海賊、マラッカ・ソマリア海賊など、貿易ルートに現れて通行料を獲る商業寄生型海賊に対して、倭寇は貿易規制があるが故に武装し、儲かるからこそ存在する商業主体型海賊であるとしている。商業主体型海賊は、ある国にとっては海賊ではなく商人であり、即ち倭寇は日本にとっては海賊ではなかったという見解であった。さらに現代は、自由貿易主義であることから、商業主体としての海賊は生まれないとのことである。

倭寇は、いわゆる海賊とは同列に扱うことのできない、規制という政策が生んだ国家に属する国民としての立ち位置とも一線を画し、貿易商人・海商という側面が大きい存在であったといえる。

そして、モンゴル帝国史というフィルターを通して倭寇を研究することにより、モンゴル帝国・モンゴル帝国後の北方モンゴル族・ポストモンゴル時代との繋がりも発見することができたのである。

一方で、今後研究をさらに深めるべく新たな研究課題も明らかになったので、以下の通り箇条書きで記しておく。

・倭寇が後世に武装集団や人攫いの加害者、いわゆる海賊として語り継がれた本質的な理由

・海や陸を渡って直接、もしくは間接的に伝わった文化や宗教は各地でどのように解釈され、独自性は誰が生んだのか。華僑勢力の影響はどの程度あったのか。

・倭寇と華僑へのつながり、モンゴル帝国・元の時代の華人の移住・定住、19 世紀アヘン戦争期以降の華僑形成、現代の華僑・大中華圏にどのような関連性が存在するのか

・何故琉球だけは明は貿易国として認めたのか

・薩摩・壱岐の人々は元々どのような生活をしていたのか、海賊や貿易との関係性

・海賊を発生させる根本的な原因

以上、モンゴル帝国史を切り口に積み上げてきた過去の研究成果、並びに本研究の成果と今後に向けた課題をベースに、引き続き全体知の視座から今日に活きる歴史を紐解いて参る。

関連年表

世紀	中国・モンゴル帝国	高麗・朝鮮	日本
13世紀	1252年　ビルマよりペスト流入 1271年　**元　建国**	1223年　『高麗史』に倭寇の記事がはじめて記載される 1244年　日本船高麗に漂着、略奪	1274年　**文永の役** 1281年　**弘安の役** 1297年　徳政令を発令
14世紀	1305年　元が5つに分裂 1363年　倭寇が蓬州を襲う 1368年　**明　建国** 1383年　明で海禁の制を厳重にする	1358年　高麗では倭寇により財政が窮乏 1372年　琉球の中山王が明に朝貢 1392年　高麗が滅亡し **李成桂即位**	1350年　倭寇が高麗の各地を襲う(倭寇の活動が激化) 1366年　高麗の使者が出雲に着岸し、室町幕府に倭寇の禁止を要求
15世紀		1404年　室町幕府と国交回復、日朝貿易が盛んになる	1419年　**応永の外寇** 1467年　**応仁の乱**がはじまる
16世紀		1510年　**三浦の乱**が起こる	1523年　**寧波の乱** 1543年　種子島に鉄砲が伝わる 1592年　**文禄・慶長の役**

参考文献一覧

【書籍】

1. 浅川滋男『東アジア漂海民家船住居』(鳥取環境大学紀要創刊号(2003.2)pp.41-60, 2003)
2. 池端雪浦編『新装世界各国史 6 東南アジア史②島嶼部』(山川出版, 1999)
3. 井沢元彦『逆説の日本史 9 戦国野望編　鉄砲伝来と倭寇の謎』(小学館文庫, 2005)
4. 五木　寛之『サンカの民と被差別の世界』(ちくま文庫, 2014)
5. 伊藤　潔『「台湾」』(中公新書, 1993)
6. 岩井 茂樹『朝貢・海禁・互市ー近世東アジアの貿易と秩序』(名古屋大学出版会, 2020)
7. 岩井 茂樹『東洋史研究叢刊　中国近世財政史の研究』(京都大学学術出版会, 2004)
8. ウィリアム・H・マクニール『世界史(下)』(中公文庫, 2008)
9. 上里　隆史『海の王国・琉球』(ボーダーインク, 2018)
10. 上原　善広『幻の韓国被差別民「白丁」を探して』(河出文庫, 2019)
11. 宇山　卓栄『朝鮮属国史　中国が支配した 2000 年』(扶桑社新書, 2018)
12. 榎本　涉『僧侶と海商たちの東シナ海』(講談社学術文庫, 2020)
13. 太田　弘毅『倭寇ー日本あふれ活動史』(文芸社, 2004)
14. 大東　和重『「台湾の歴史と文化」』(中公新書, 2020)
15. 岡田英弘/神田信夫/松村潤『紫禁城の栄光』(講談社, 2006)
16. 岡本　隆司『日中関係史「政冷経熱」の千五百年』(PHP 新書, 2015)
17. 小川　雄『水軍と海賊の戦国史』(平凡社, 2020)
18. 沖浦　和光『天皇と賤民の国』(河出文庫, 2019)
19. 北尾悟, 西村 さとみ『倭寇とは何か:歴史教育と歴史研究をめぐって』(奈良女子大学教育システム研究開発センター, 2018)
20. 金柄徹『「倭寇」から眺める海域世界』(三田文学　No.139 秋季号 2019, 2019)
21. 厚生労働省『「外国人雇用状況」の届出状況まとめ【本文】(令和2年 10 月末現在)』, 2021
22. 国立社会保障・人口問題研究所『2017 年日本の将来推計人口,出生中位(死亡中位)推計)』, 2021
23. 近藤　浩一『東アジア海域と倭寇-9 世紀末の新羅海峡との比較史的考察を通して-』(京都産業大学論集.人文科学系列.47 巻.p.123-145, 2014)
24. 斉藤　忠『倭国と日本古代史の謎』(学研 M 文庫, 2015)
25. 清水克之『戦国大名と分国法』(岩波書店, 2018)
26. 白井米雄・桜井由躬雄編『新装世界各国史 5 東南アジア史①大陸部』(山川出版, 1999)
27. 鈴木董『文字と組織の世界史 新しい「比較文化史」のスケッチ』(山川出版社, 2018)
28. 瀬川　拓郎『縄文の思想』(講談社現代新書, 2017)
29. 瀬川　拓郎『アイヌと縄文ーもうひとつの日本の歴史』(ちくま新書, 2016)
30. 関　周一『対馬と倭寇ー境界に生きる中世びと』(高志書院, 2012)

31. 秦野裕介『「「倭寇」と海洋史観 ー「倭寇」は「日本人」だったのかー』(立命館大学人文科学研究所紀要, 2002)
32. 高田 貫太『海の向こうから見た倭国』(講談社現代新書, 2017)
33. 高橋 貞樹『被差別部落一千年史』(岩波文庫, 1992)
34. 高橋 典幸『中世史講義』(ちくま新書 , 2019)
35. 高野 澄『歴史を変えた水軍の謎』(祥伝社黄金文庫, 2012)
36. 高野 秀行『謎の独立国家ソマリランド』(本の雑誌社, 2013)
37. 竹田いさみ『世界を動かす海賊』(ちくま新書, 2013)
38. 田中 健夫『東アジア通行圏と国際認識』(吉川弘文館, 1997)
39. 田中 健夫『倭寇 海の歴史』(講談社学術文庫, 2012)
40. 田中 健夫『倭寇と勘合貿易』(ちくま学芸文庫, 2012)
41. 壇上寛『東洋史研究叢刊之七十八(新装版 16)明代海禁＝朝貢システムと華夷秩序』(京都大学学術出版会, 2013)
42. 津本 陽『天翔ける倭寇＜上＞』(角川文庫, 1993)
43. 東京大学史料編纂『描かれた倭寇「倭寇図巻と抗倭図巻」』(吉川弘文館, 2014)
44. 豊岡康史『<清朝史叢書>海賊からみた清朝一十八～十九世紀の南シナ海』(藤原書店, 2016)
45. 楊 合義『「台湾の変遷史」』(展転社, 2018)
46. 長野 正孝『古代史の謎は「海路」で解ける』(PHP 新書, 2015)
47. 荒野泰典/石井正敏/村井章介編『日本の対外関係 倭寇と「日本国王」』(吉川弘文館, 2010)
48. 村井章介『古琉球 海洋アジアの輝ける王国』(角川選書, 2019)
49. 荷見 守義『世界史リブレット人 38 永楽帝 明朝第二の創業者』(山川出版社, 2016)
50. 二谷 貞夫『倭寇対策と通信使の創設 : 室町時代の朝鮮通信使』(中等社会科教育研究巻 33, p.103-106, 2015)
51. 入間田宣夫/豊見山和行『北の平泉、南の琉球』(中央公論新社, 2002)
52. 羽田 正『東アジア海域に漕ぎ出す 海から見た歴史』(東京大学出版会, 2013)
53. 上里隆史『マンガ 沖縄・琉球の歴史』(河出書房新社, 2016)
54. ピーター・T・リーソン『海賊の経済学』(NTT 出版, 2011)
55. 模澤和夫『これならわかる 沖縄の歴史 Q &A 第2刷』(大月書店, 2020)
56. 渡邊大門『流罪の日本史』(ちくま新書, 2017)
57. 上田信『中国の歴史 09 海と帝国 明清時代』(講談社, 2005)
58. 真栄平 房昭『明朝の海禁政策と琉球 : 海禁・倭寇論を中心に』(交通史研究 67 巻(2008), 2008)
59. 岡田英弘『読む年表 中国の歴史』(ワック, 2015)
60. 宮本 常一『日本文化の形成』(講談社学術文庫, 2014)
61. 田村実造『中国文明の歴史7 大モンゴル帝国』(中公文庫, 2000)

62. 杉山正明『モンゴル帝国の興亡　下　世界経営の時代　』(講談社, 1996)
63. 村井　章介『中世倭人伝』(岩波新書, 1993)
64. 村井　章介『東アジアのなかの日本文化』(北海道大学出版会, 2021)
65. 村井　章介『古琉球 海洋アジアの輝ける王国』(角川選書, 2019)
66. 村井　章介『国境を超えて-東アジア海域世界の中世』(校倉書房, 1997)
67. 中島楽章『14-16 世紀,東アジア貿易秩序の変容と再編―朝貢システムから 1570 年システムへ―』(社会経済史学 76-4, 2011)
68. 出口治朗『全世界史(下)』(新潮社, 2018)
69. 森平雅彦『世界史リブレット 99―モンゴル帝国の覇権と朝鮮半島―』(山川出版社, 2011)
70. 麻生川静男『本当に悲惨な朝鮮史―高麗史節要を読み解く―』(角川新書, 2017)
71. 桃井　治郎『海賊の世界史』(中公新書, 2017)
72. 桃木至朗編『海域アジア史研究入門』(岩波書店, 2008)
73. 百瀬　宏『北欧史』(山川出版社, 1998)
74. 越村勲『アドリア海の海賊ウスコク』(彩流社, 2020)
75. 越村勲『16　世紀・17　世紀の海商・海賊アドリア海のウスコクと東シナ海の倭寇』(彩流社, 2016)
76. JCC 出版部『絵で解る　琉球王国　歴史と人物』(JCC 出版, 2011)
77. JCC 出版部『絵で解る　琉球王国　歴史と人物 2』(JCC 出版, 2018)
78. 比嘉政夫『沖縄からアジアが見える』(吉川弘文館, 2021)
79. 山内譲『海賊の日本史』(講談社現代新書, 2018)
80. 来間泰男『琉球王国の成立と展開』(日本経済評論社, 2021)
81. 森本　繁『台湾の開祖　国性爺鄭成功』(国書刊行会, 2014)
82. 久芳崇『東アジアの兵器革命』(吉川弘文館, 2010)
83. 榎本渉『僧侶と海商たちの東シナ海』(講談社, 2010)
84. 吉成　直樹『琉球王国は誰がつくったのか』(七月社, 2020)
85. 羽田正　小島毅『東アジア海域に漕ぎだす1　海から見た歴史』(東京大学出版会, 2013)
86. 山本進『朝鮮時代の火器』(東洋史研究会, 2016)
87. 吉成　直樹『琉球王国と倭寇』(森話社, 2006)
88. Regis Boyer(レジス・ボワイエ)『La vie quotidienne des Vikings(ヴァイキングの暮らしと文化)』(白水社, 2019)
89. 辟化元『「詳説　台湾の歴史　台湾高校歴史教科書」』(雄山閣, 2020)

【論文】

1. 寺島　実郎『脳力のレッスン 180 -鄭和の大航海と東アジアの近世-』(岩波書店, 2017)
2. 石沢徹『中世後期の経済学:名田経営・財貨経済を焦点とする楕円経済』(北海道教育大学紀要、第一部、B、社会科学編、19(2):83-97, 1968)
3. 稲本 守『欧州私掠船と海賊-その歴史的考察-』(東京海洋大学研究報告, 2009)

4. 柿沼 亮介『対馬をめぐる「国境」認識の歴史的展開』(早稲田教育評論 第 35 巻第1号, 2021)
5. 秀城哲『16 世紀「倭寇」を構成する人間集団に関する考察―「倭」と「日本人」の問題を中心に―』(千葉大学社会文化科学研究科研究プロジェクト報告書, 2003)
6. 清水克之『室町時代は今日もハードボイルド』(新潮社, 2021)
7. 全 彰煥『「壱岐・対馬の道」に見る司馬遼太郎の朝鮮観』(九州情報大学研究論集, 2012)
8. 宋鐘昊『村井章介の「境界人」の概念および＜倭寇＝境界人＞説の立論についての批判的検討』(コリア研究, 2017)
9. 永積洋子『日本から見た東アジアにおける国際経済の成立』(城西大学大学院経済学研究会, 1993)
10. 三宅 亨『倭寇と王直』(桃山学院大学総合研究所紀要 第 37 巻第3号, 2012)
11. 豊岡康史『清朝と旧明領国際関係(1644-1840)』(中国史学会 中国史学 第 22 巻, 2012)
12. 山本秀也『習近平と永楽帝 中国帝国皇帝の野望』(新潮社, 2017)
13. 吉成 直樹『琉球・沖縄文化の形成と外的衝撃 古代～中世平行期を中心に』(法政大学学術機関リポジトリ, 2013)
14. 秋山謙蔵『「倭寇」による朝鮮・支那人奴隷の掠奪とその送還及び売買』(社会経済史学会, 1932)
15. 川越泰博『倭寇及び被虜人と明海防軍』(史学研究会, 1994)

【Web】

1. 『壱岐市歴史文化基本構想『第３章 壱岐市内にある文化財の総合的把握』』 https://www.city.iki.nagasaki.jp/soshiki/shakai_kyoikuka/bunkazai/5776.html (2022/1/18)
2. 外務省 『ソマリア沖・アデン湾における海賊問題の現状と取組』 https://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/pirate/africa.html (2021/11/19)

2021 年アジアダイナミズム班年間スケジュール

回	月	日	議　題	文献調査	フィールドワーク	備　考
1	4	17	初回学長講話 自己紹介 今年度テーマ方向性			Facebookグループ作成
2		24	各自問題意識を報告			
3		8	分担発表	次回ベース文献疑問など報告		Google driveシェア アジア班メンバー確定
4		15	分担発表	次回ベース文献疑問など報告		年間スケジュール確定
5		22	分担発表 研究計画発表ＰＰＴ作成	次回ベース文献疑問など報告		
6		29	研究計画発表ＰＰＴ作成	次回ベース文献疑問など報告		
7	6	5	研究計画発表	次回ベース文献疑問など報告		
8		12	分担発表 中間発表ＰＰＴ確認・修正	文献集計・目次		
9		19	分担発表 中間発表ＰＰＴ確認・修正	文献集計・目次		
10		26	分担発表 中間発表ＰＰＴ確認・修正	文献集計・目次	FW検討（仮）	
11	7	3	分担発表 中間発表ＰＰＴ確認・修正			
12		10	分担発表 中間発表ＰＰＴ確認・修正			
13		17	分担発表 中間発表ＰＰＴ確認・修正			
14		24	分担発表 中間発表ＰＰＴ確認・修正			
18	8	26	◆夏季合宿（中間発表） 箱根水明荘	発表者（役割分担）：1.研究概要、2.目次、3.内容、4.参考文献・研究計画・ＦＷ		
19		27	◆夏季合宿（中間発表） 箱根水明荘	発表者（役割分担）：1.研究概要、2.目次、3.内容、4.参考文献・研究計画・ＦＷ		
23	9	18	下期進行確認 分担発表	各執筆原稿の発表(状況報告)		年間スケジュール再確認 下期加入メンバー確定
24		25	分担発表	各執筆原稿の発表(状況報告)		
25	10	2	分担発表	各執筆原稿の発表(状況報告)		
26		9	分担発表	各執筆原稿の発表(状況報告)		
27		16	分担発表	各執筆原稿の発表(状況報告)		
28		23	分担発表	各執筆原稿の発表(状況報告)		
29		30	PPT目次レビュー 分担確認 論文推敲全体確認	各自完成版を持ち寄る		
31	11	13	PPT目次レビュー 分担確認 論文推敲全体確認	全体を印刷して確認		
32		20	PPT目次レビュー 分担確認 論文推敲全体確認	全体を印刷して確認		
33		27	PPTレビュー AL祭・最終発表に向けて			
34	12	4	PPTレビュー AL祭・最終発表に向けて			
35		11	◆アクティブラーニング祭	アクティブラーニング(AL)祭　（多摩キャンパス）		
36		18	◆論文発表			
37		25	◆論文提出日			メール送付期限
38		8	2021年度最終講義			
39		22	◆論文提出/懇親会 （年度最終日）	最終論文（完成版）提出日		

最終発表スライド

研究目的・方法

1

✓ アジア班が**目指す論文**は、歴史の視点から現代・将来を展望する

✓ **文献研究**と**フィールドワーク**を中心に研究活動を行う

✓ **歴史的観点**、**経営組織論**、**国際経営論**からも分析

✓ フィールドワークは社会情勢や訪問先の都合等も踏まえ計画

✓ 2020年は新型コロナウイルスによる世界的な感染拡大を踏まえ、
パンデミックの歴史研究を通じ、**ポストコロナの世界**を考えた

2021年度のテーマは・・・・・**倭寇**

2017年～2020年　論文の結論

2

2017　「モンゴル帝国のユーラシア興隆史」　総107頁

得られた示唆
1. 「経済連携」による「平和と安定」
2. リーダーの「思想」と「視野」

2018　「モンゴル帝国の興隆と衰退」総244頁

得られた示唆
1. 拡大から縮小過程の生き方：成長だけではない生き方
2. リーダーの資質：資質とガバナンスの低下
3. 祖国という感覚が薄いからこそ世界統一ができたのか

2019　「モンゴル帝国と朝鮮半島」総84頁

得られた示唆
1. 大帝国の属国でありながらも自らの価値を最大化する立ち回り
2. 柔軟な思考と強固なアイデンティティによる国家（組織）維持

2020　「パンデミックのユーラシア史とポストコロナ」総 118頁

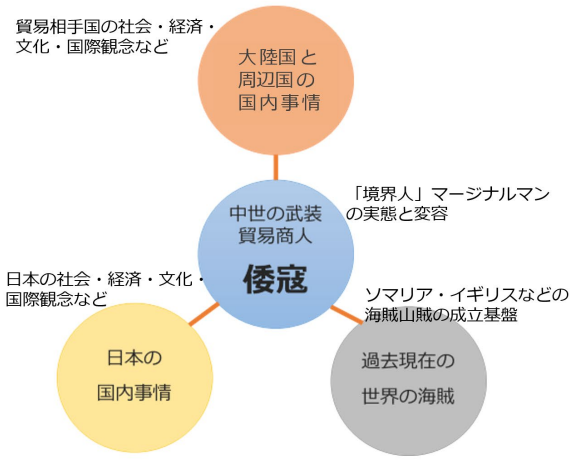
得られた示唆
1. パンデミック発生時における人間の心情・行動変化
2. 現代に活きる日本人特有の衛生観念と気質・文化

2021年のテーマ（モンゴル帝国史5年目）

3

現代の**保護貿易路線**と**当時の貿易状況**を照らし合わせつつ、過去の**モンゴル研究を活かし**、倭寇を研究する

下記図を基に問題意識を抽出



テーマ構成

4

1章 中世の武装貿易商人 倭寇

2章 大陸国と周辺国の国内事情

3章 日本の国内事情

4章 過去・現在の世界の海賊

問題意識（合計13件）

5

1．中世の武装貿易商人　倭寇

- 王直とは何者〖谷ヶ崎〗
- 「境界人」として、アデンティティとは何なのか〖田中〗
- 武器の変遷から見る倭寇〖羽田〗
- マージナル・マンが当時の日本国の政治に及ぼした影響〖森田〗

2．大陸国と周辺国の国内事情

- 【中国】後期倭寇の南方中国人と、華僑の始まりとの関連性はあるのか〖光永〗
- 【中国・モンゴル・朝鮮】歴史の分岐点をつくった李成桂は、モンゴル（北元）中国（明）女真族（満州）倭寇とどの様に向き合い、対峙・対処してきたのか〖光永〗
- 【中国】元・明の国としての権勢が弱まった時に倭寇が活発になったのではないか〖杉〗
- 【朝鮮】他の国から日本（対馬）はどういった認識だったのか〖天野〗
- 【琉球】倭寇がもたらした琉球・奄美への影響～思想・文化・言語の形成～〖森〗

3．日本の国内事情

- 当時の日本の国内事情は倭寇発生にどのような影響を与えたのか〖多田〗
- 日本から見た倭寇はどのような位置づけになっていったのか〖田中〗

4．過去現在の世界の海賊

- 海賊は絶対的な悪なのか〖三田〗
  国家に振り回された海賊〖山埜〗
- ソマリランドの海賊から倭寇を俯瞰して見えるものとは。時代が生む海賊について〖北山〗

関連年表（13～16世紀）

6

世紀	中国･モンゴル帝国	高麗･朝鮮	日本
13世紀	1252年　ビルマよりペスト流入 1271年　**元　建国**	1223年　『高麗史』に倭寇の記事がはじめて記載される 1244年　日本船高麗に漂着、略奪	1274年　**文永の役** 1281年　**弘安の役** 1297年　徳政令を発令
14世紀	1305年　元が5つに分裂 1363年　倭寇が蓬州を襲う 1368年　**明　建国** 1383年　明で海禁の制を厳重にする	1358年　高麗では倭寇により財政が窮乏 1372年　琉球の中山王が明に朝貢 1392年　高麗が滅亡し **李成桂即位**	1350年　倭寇が高麗の各地を襲う（倭寇の活動が激化） 1366年　高麗の使者が出雲に着岸し、室町幕府に倭寇の禁止を要求
15世紀		1404年　室町幕府と国交回復、日朝貿易が盛んになる	1419年　**応永の外寇** 1467年　**応仁の乱**がはじまる
16世紀		1510年　**三浦の乱**が起こる	1523年　**寧波の乱** 1543年　種子島に鉄砲が伝わる 1592年　**文禄･慶長の役**

出典：倭寇 海の歴史（田中健夫）倭寇関連年表より筆者作成

時代背景

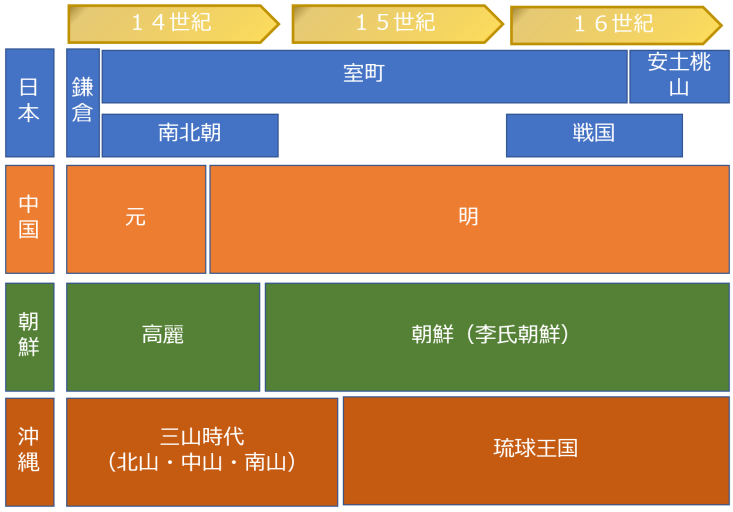
7

前期倭寇

14～15世紀

後期倭寇

16世紀



出典：「東アジアと志布志城の関係年表」（志布志市教育委員会『国指定史跡「志布志城跡」』　2014年4月1日改訂）より谷ヶ崎作成

倭寇とは

8

- 一般的に認識されている**「倭寇」**は、
  〔A〕 **14～15世紀の倭寇**（主に海賊活動）と、
  〔B〕 **16世紀の倭寇**（主に密貿易活動）とに大別
- 倭寇は東アジアの沿海諸地域を舞台とした海民集団の一大運動であり、**構成員は日本人に加え、朝鮮人・中国人・ヨーロッパ人**
- **倭寇の活動**は東アジア諸国の国内事情を母体とし、**国際関係の歪みを引き金として発生**
  （〔A〕蒙古の高麗侵入による進奉貿易の断絶／
  〔B〕明の海禁政策による密貿易化）
- 中国大陸・朝鮮半島・日本列島・琉球列島・台湾・フィリピン・南方諸島地域の**諸国人民と歴史に関わりながら消滅**していった

出典：東京大学史料編纂所の所蔵「倭寇図巻」富豪宅から獲物を持ち出す倭寇たちか

14～15世紀の倭寇

9

行動目標　：米穀などの生活必需品、ヒト
活動地域　：高麗（朝鮮）の南部沿岸
　⇒ 内陸・奥地への深侵入、明沿岸・・・朝鮮と交互
根拠地　　：対馬・済州島
人数規模　：兵数～3,000／船数～400余隻　・・・大規模なもの／騎馬隊有り
構成　　：倭人*1～2割、沿岸地域の賤民*倭服・倭語を用いる海民、高麗・朝鮮人含む

〔対抗措置〕
朝鮮による倭寇の懐柔策

①投化倭人
　内容　：官職に取り立て〔日本居住者含む／接待・貿易権利〕
　　⇒朝鮮政府中枢へ進出
　構成　：対馬・壱岐・松浦の出身者等
　対応　：倭人同士で連携出来ないよう各州群に分置
②使送倭人・興利倭人
　内容　：使人として認定／商業活動許可者として認定
　構成　：西日本諸大名（海賊大将軍）の家臣等
　　・・・対馬宗氏、九州探題渋川氏、肥前松浦党の諸氏、筑前宗像社、薩摩島津氏等
　対応　：開港場としての三浦〔富山浦・乃而浦・塩浦〕　⇒倭人居留地
③もとのまま海賊
　⇒中国大陸へ　・・・〔対抗措置〕明による「沿岸警・防備の厳重化／日本への外交折衝」

前期倭寇

14世紀～15世紀の日本は、鎌倉幕府滅亡期であり、モンゴル時代の富の残影を求め、武装勢力（倭寇）が海賊行為を行っていました。

16世紀の倭寇

10

行動目標　：密貿易の調停、諜報活動　＋官憲対策のため武装　⇒癒着・略奪・侵寇
活動地域　：中国大陸沿岸〔浙江・福建・広東〕　⇒フィリピン・南海地域
根拠地　　：五島・薩摩・平戸（日本）、中国大陸沿岸、琉球（沖縄本島・台湾）
人数規模　：兵数50,000～60,000／船数～1,000余隻
構成＊　　：明人主体、倭人、朝鮮人、ポルトガル人
＊明官憲が自分の功績とするために明の盗賊やポルトガル商人も倭寇とひとくくりにしていたケース有り

〔対抗措置〕
明による倭寇対策

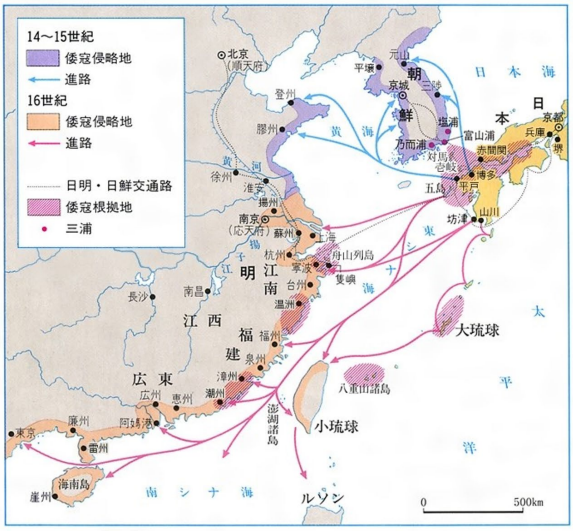
①警備強化
内容　：沿海の要衝に築城・官兵配置、沿海住民の内陸部疎開（清野の法）
効果　：一部地域での一時掃討も、倭寇からの反撃あり一進一退の攻防
②倭寇首領の説得・謀略
内容　：最大勢力であった王直（倭寇国の王）に海禁を緩め、貿易を許すと説得
結果　：望郷の念に駆られた王直は明政府に投降（後に斬首）
効果　：王直の就縛が他の倭寇集団に失脚につながり、弱体化　⇒転戦の末消滅へ
③海禁令の解除
背景　：倭寇の主原因が海禁と深い関係を持っていることが世論によって指摘された
結果　：200年続いた海禁令を解除＊（中国内地人の海外渡航許可・密貿易の公許化）
＊南海方面への出航貿易に限定、日本渡航と禁制品の海外帯出は継続禁止

後期倭寇

足利義満の明朝服属・日本国王拝受も今は昔、貿易をめぐる現地での暴力行為が原因で国営貿易は途絶。ふたたび密貿易の時代へ。中国側はいよいよ富裕になり、周囲からその富を狙われている。

倭寇の活動地域

11



出典：倭寇の侵略地と根拠地©日本大百科全書（ニッポニカ）

（現在でいう）
日本・韓国・中国・台湾の
沿岸部・海域

テーマ構成

1章 中世の武装貿易商人 倭寇

2章 大陸国と周辺国の国内事情

3章 日本の国内事情

4章 過去現在の世界の海賊

1章 中世の武装貿易商人 倭寇

1.倭寇の原点と実像　（担当：谷ヶ崎）

ー　古代海人族から新羅商人そして、中世倭寇へと繋がるもの

日本古代の海人族

九州を拠点とした
安曇氏 等

海人族
（かいじんぞく、あまぞく）
弥生BC5世紀～3世紀に活躍

・航海、漁労など海上において活動
・目のふちに入れ墨
・4世紀以降は海上輸送で力をつける

朝鮮古代の新羅商人

新羅商人
7世紀～9世紀に活躍

・内乱と天候不順で治安悪化
・海賊から商人へ

14-15世紀の倭寇

・モンゴル帝国の侵攻（元寇）に
よるダメージ
・命をつなぎとめるための海賊行為

中世倭寇国の王・王直

王直
中世16世紀の時代に活躍
<生年不詳－1560年没>

・智略に富み、人に惜しみなく施し、
信望は厚かった
・学問もあり計数にも明るく、衆望
をあつめる性格をそなえていた

P.15

1章 中世の武装貿易商人 倭寇

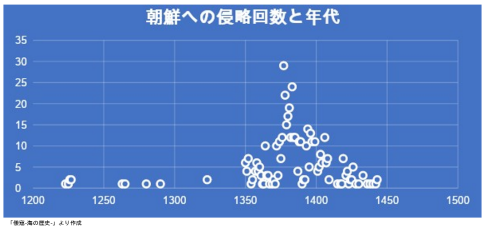
1.中世倭寇の活動と実態　　（担当：羽田）

ー　武器の変遷から見る倭寇

【海賊行為を行う倭寇】
そもそも前期倭寇の出現及び、海賊行為の増長はモンゴル帝国の衰退、東アジアの秩序が崩れたことが大きい。ここで注目したいのは、前期倭寇の海賊行為が100年を超える長期に渡ったことである。

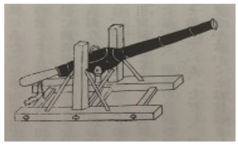
【1380年の倭寇撃退】
1220年頃から徐々に顔を現す倭寇は、1350年頃を機に各地を襲うようになる。1380年の倭寇との対峙で李成桂の活躍。同時期、崔茂宣による『火砲』の製造及び使用が倭寇を撃墜したとあり、当時の勝利を祝し「賀崔元帥茂先破鎮浦倭船ー公始作火砲」という詩が残っている。その後、侵攻が徐々に減っているのが窺える。崔茂宣の登場を機に、朝鮮では火器が発展し「火薬修練法」を後世に残す。

【火器の進化】
火器の登場によって朝鮮が倭寇を撃退したが、上記のような勝利は多くなかった。その時代背景として、倭寇も時代と共に侵攻方法が変化する。その一つとして、「船」である。前期倭寇に見られる船は、小さい船を幾十幾百隻で侵攻してきたが、後期倭寇になると大船による侵攻に変化する。右図のような、矢を飛ばす火器では対処が追いつかなくなる。しかし、こういった関係が、朝鮮・明における火器の進化につながる。



「倭寇-海の歴史-」より作成

https://www.chosonsinbo.com/jp/2007/09/sinbo_0709009/


大船に対抗するために用いられた仏狼機砲「東アジアの兵器革命」　P.20

P.15

1章 中世の武装貿易商人 倭寇

15

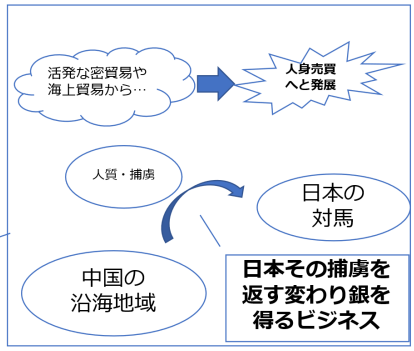
3.中世倭寇の影響力と爪痕　　（担当：森田）

ー　史料に残された記述から推察する中央政府と後世へのインパクト～アウトローが築いた国家のルール

詔安乌山风景区攻略_万图壁纸网
wantubizhi.com

断崖絶壁の街は
悪人には最高の立地
であった !!

【海賊とのつながりが公に存在していた地域の事例】
中国の詔安県（しょうあんけん）の沿海地域に位置する梅嶺（ばいれい）では密貿易経営を行うとともに海賊勢力とも結びついていた。
郷里で暮らす者たちは、海賊となった親族を恥じることなく資金が送られてくることを地域社会の中で得意気に自慢していたという。



テーマ構成

1章 中世の武装貿易商人 倭寇

2章 大陸国と周辺国の国内事情

3章 日本の国内事情

4章 過去・現在の世界の海賊

後期倭寇とモンゴル帝国の関連性（15-16世紀）

出所：世界の歴史まっぷ

北虜（モンゴル帝国没後・北元→オイラト）	南倭（倭寇対策）
1429年：南京→北京遷都 1449年：土木の変　オイラト部エセン・ハンが正統帝を捕虜に 1550年：庚戌の変　タタール部アルタン・ハンが北京包囲	明は朝貢貿易以外を認めない『海禁政策』により 密貿易・後期倭寇が発生
北辺防備軍事費・税の銀収 ～明国内『銀』の枯渇～	⇔ 大量の日本銀流入（密貿易） 後期倭寇の要因の１つ

1567年：隆慶帝（穆宗）　財政再建と経済繁栄の為に
倭寇とモンゴルに貿易を認める柔軟策実施
「モンゴルと和議」「海禁解除、民間貿易認可」

↓

北虜南倭の終息・経済安定へ

↓

貿易商人の海外移住→華僑社会形成の初期
（東南アジア港湾都市：ﾏﾆﾗ・ﾎｲｱﾝ・ﾌﾟﾉﾝﾍﾟﾝ・胡椒港…）

倭寇の活発化は、元・明の経済・通貨政策が揺らいだタイミングで起こった

●経済が混乱し通貨の価値が揺らぐ＝両王朝の統制力が低下 ⇒周辺地域で海賊・海商が活発化

●広大な帝国を維持するコストをまかなえるだけの財政政策を実行することは、この時代には難しかった？

● 現代は？ 通貨は国のどこでも同価値で使える。通貨・金融政策は国の政策を反映しつつ、経済の専門家が取り仕切る

元(1260－1368)

- 世界初の紙幣を発行。西方貿易に銀が必要で補完のため
- 皇帝の後継者争いの激化、日本出兵などの戦費負担の増大などから紙幣を乱発
- 1200年代末から発行残高が急増、1280年→1320年に物価は8倍強に！

明(1368－1644)

- 元末の紙幣混乱を避けるため銅銭を発行。しかし銅不足から供給は限定され、現物経済に依存した
- 1375年、紙幣の発行に踏み切るが、今度は大量発行が続き、価値低下が止まらず。財務規律が機能しなかった
- 実質GDPは明代を通して0.26%と低くとどまった。明末1620年の一人当たり実質GDPは980年と同水準だった

第２章 大陸との国内事情

朝鮮から見た倭寇

前期倭寇と高麗

高麗は主に被害にあっていた国である。

- 穀物や人間が略奪をされていた。
- 高麗が滅び、朝鮮王朝が始まった要因の一つである。

後期倭寇と朝鮮

倭寇の影響をかなり受けた国である。

- 前期に受けた被害の解決に努める。
- 倭寇の鎮圧と懐柔。
- 民衆に大きな負担をかけた。

新羅

国家規模で海賊行為をしていた国である。

- 飢饉の影響で日本に対して襲撃をしていた。
- 変化が多い時代で政治的に不安定な時期も多い。→日本に帰化する人多数。

中世の琉球・奄美・台湾と倭寇

琉球：以前からヤコウガイ交易、奄美でカムイ焼きの生産、輸出
奄美は日本本土からの流刑地、移住先にも
１３、１４世紀には３人の王が統治三山時代　15世紀に統一
他国と活発な交易→中継貿易により繁栄
倭寇の被虜人や漂着した朝鮮人を本国へ送還
倭寇が密貿易　倭寇が琉球国王を名乗り貿易を行う
琉球から倭寇に参加した者も琉球に倭寇が入り込む

明・・・元との戦争の為、馬、硫黄が必要になる。
倭寇に悩まされる。→海域の秩序を守る。

明からの優遇措置・・・他国よりも多い朝貢回数船や人材の贈与

しかし、世界情勢の変化に伴い衰退、倭寇的な交易に変化していく。

台湾：統一されてない。様々な原住民が暮らす未開の地、密貿易の拠点
逃げた倭寇がたどり着く地、交易を行う原住民も
オランダ東インド会社による統治
英雄・最後の倭寇 鄭成功による統治

テーマ構成

21

１章 中世の武装貿易商人 倭寇

２章 大陸国と周辺国の国内事情

３章 日本の国内事情

４章 過去・現在の世界の海賊

3章 日本の国内事情

1.倭寇発生当時の政治・経済状況　（担当：多田）

政治

- **北朝と南朝二つの朝廷が併存**
- **王権分離状態**
- 日本の各地の守護や国人たちが**北朝**あるいは**南朝**に与し、**それぞれが勢力を拡大**し、**長期化**
- **朝廷同士の争いから**
  日本全国に広がる戦乱
- **大規模な戦が続き**
  南北朝の動乱

経済

- **自給自足の荘園経営の崩壊**
  経営権の主体：荘園領主→中小名主級
  手に荘園領主の隷属関係から独立
- 経済の中心が京都から地方に移る
- 地方経済が発展し
  それに伴う貧富の差の拡大
- **貧しいものが徒党を組んで**
  倭寇の土台に

- **財貨経済**
  多くの金銀財宝・米銭を蓄積して、有徳な百姓、有徳人を生み出す経済
- 価値観変化
  （土地 → 財貨を重視）
- 名工・名匠が名器・名作を発表　金銀が流通貨幣というより、財宝。
- 職人気質の発生し産業化が進む。
- **倭寇にとって有力な武器、輸出モチベーション、　貿易の土台となった。**

第3章国内事情

2.当時の日本人はどう倭寇が映ったのか（担当：田中）

前期倭寇（14世紀-15世紀）

三島倭寇について

壱岐・対馬・肥前松浦の士豪・商人・漁民が中心に、一部高麗の民も加えた武装集団。

→専門家でも活動域はいくつか説が出ている

前期倭寇に関わっていた人々

対馬と壱岐に絞り、その地域の人々の環境や時代背景について調べていった。どちらも貿易中継地であり、国防の要でもある。

後期倭寇（16世紀）

後期倭寇に属していた日本人

薩摩、肥後、長門などが構成として多かった。明の「海禁」をきかっけに止められたことにより、貿易を行うために行われたと思われる。

後期倭寇に関わっていた人々

後期倭寇の活動域で描かれた地図などを元に海外ではどのように把握されていたのかを把握しつつ、歴史的な背景などを見ていった。

人々にとって倭寇は悪でも善でもなかった。

→室町時代には全国に「海賊」がいた。
→前期＆後期も「生きるための手段」の一つでしかなかったのではないかと思われる。

テーマ構成

24

1章 中世の武装貿易商人 倭寇

2章 大陸国と周辺国の国内事情

3章 日本の国内事情

4章 過去・現在の世界の海賊

4章 過去・現在の世界の海賊

25

海賊行為と私掠行為

※私掠（しりゃく）

海賊行為

⇨ 平時に公的権力の認可を受けない海上での 非合法な掠奪行為

私掠行為

⇨ 戦争状態に公的権力から敵国の船を攻撃し船や積み荷、荷物を奪う（**私掠**免許）許可を受けた民間人（私掠者）による 合法的な掠奪行為

共通点：海上での**略奪行為**

相違点：政府の認可があるか否か 戦時中か否か

出典:オーシャントラスト

※エリザベス女王からナイトの称号を受ける海賊フランシス・ドレーク

時代に振り回された海賊

・戦時中は**英雄**として国家から讃えられる

・非戦時中は**悪者**として国家から弾圧を受ける

海賊は国家にうまく利用された被害者的側面を持つのではないか？

４章 過去・現在の世界の海賊

出典：アドリア海の海賊ウスコクP.12

ウスコクとは？	
活動時期	16世紀～17世紀
活動場所	クロアティア セーニ
特徴	多数が無給の非正規兵
	一部ハプスブルク帝国兵士として給与を与えられた
	暮らしていくために略奪 ただし、帝国に利得の一部を献上

ハプスブルク帝国

ヴェネツィア共和国

オスマン帝国

都合の良い海賊？

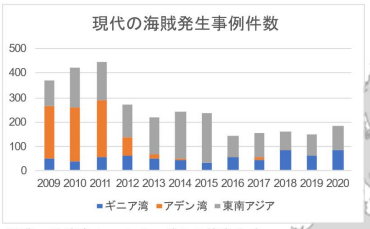
- ✔ 海賊は悪かと言われると、倭寇やウスコクを見ても必ずしも悪というわけではない
- ✔ 右記の通り、米同時多発テロから20年が経過した。テロ行為は断固として認めてはならないが、タリバンは絶対的悪なのであろうか。
- ✔ メディアの論法を鵜呑みにすることなく、自らの頭で考えることが必要となる

出典：日本経済新聞2021年9月11日米同時多発テロ20年特集

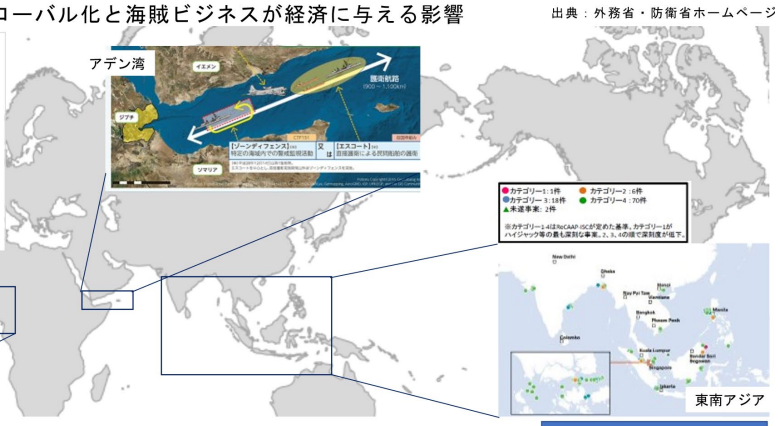
４章 過去・現在の世界の海賊

現代における海上輸送が拓いたグローバル化と海賊ビジネスが経済に与える影響

出典：外務省・防衛省ホームページ



出典：外務省ホームページより筆者作成



貧困 → 海賊ビジネス ⇄ 生活の安定 / 各国の海賊対策

まとめ

13世紀・モンゴル帝国・元　14世紀～ 明　17世紀～清（モンゴル継承）
ユーラシア東西交易（陸・海）　海禁→倭寇と北虜（モンゴル）　互市（ある種自由貿易）

海禁という規制が生んだ倭寇、政経分離・政冷経熱の時代

非合法な行為は否定すべきだが、倭寇は貿易商人・海商である

倭寇は商業寄生型海賊（いわゆる海賊）ではない商業主体型海賊（特殊）

出所：信州大学・豊岡准教授レクチャー

フィールドワーク

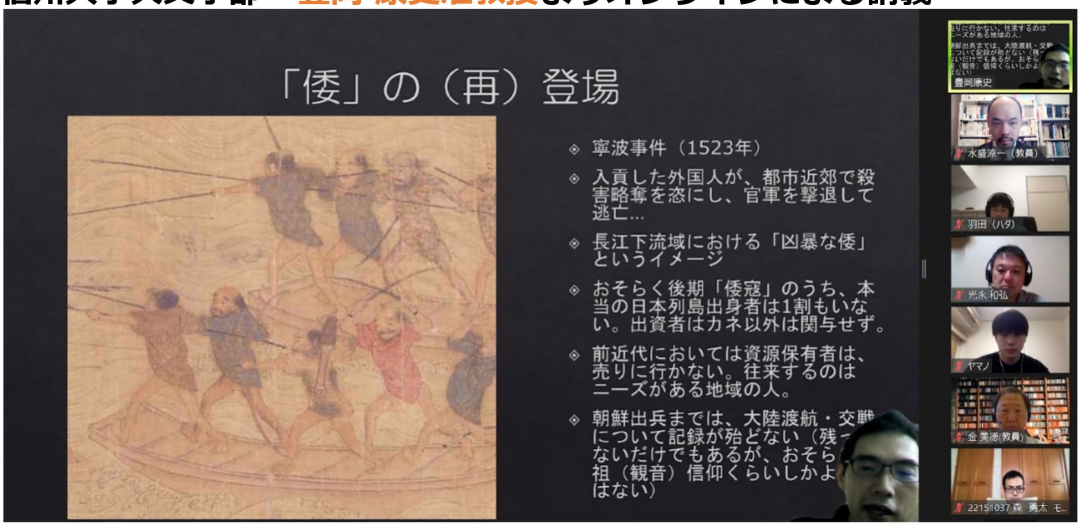
29

インタビュー者名	所属等
豊岡 康史	信州大学人文学部 准教授
桃井 治郎	清泉女子大学准教授

フィールドワーク2021.8月8日

30

信州大学人文学部　豊岡 康史准教授よりオンラインによる講義



フィールドワーク2021.8月8日

信州大学人文学部　豊岡 康史准教授よりオンラインによる講義

フィールドワーク2021.8月8日

信州大学人文学部　豊岡 康史准教授よりオンラインによる講義

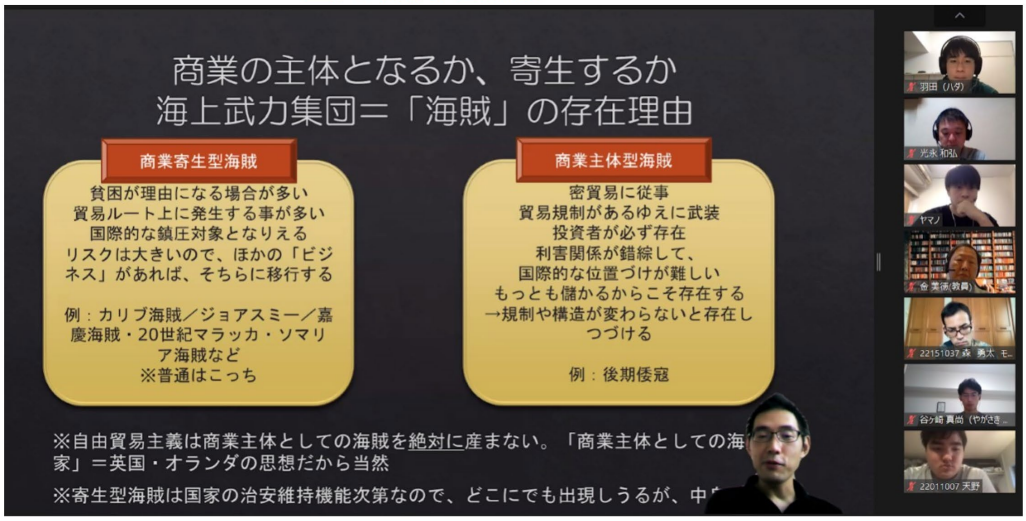
- 明朝の経済発展が、銀流入により進展
  - →周辺国の貿易ニーズが高まるが、明朝は治安維持と貿易利益独占の観点から民間貿易を禁絶
  - →経済的なニーズと、国家管理が衝突：武装した貿易当事者の登場

北辺防衛という、銀流通のポンプ（マッチポンプ？）

：宋代も同様：経済発展のひとつの要

フィールドワーク2021.8月8日

信州大学人文学部　豊岡 康史准教授よりオンラインによる講義



フィールドワーク：清泉女子大学　桃井准教授

テーマ：「16世紀から19世紀初頭の北アフリカ海賊」をテーマに近代国際秩序の形成まで

清泉女子大学桃井 治郎 准教授

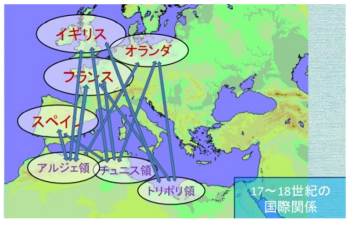
フィールドワーク：清泉女子大学　桃井准教授

- ✓ 16世紀頃の地中海では、大きく分けるとスペイン帝国・オスマン帝国という　2つの帝国が向かい合っていた
- ✓ 1492年にスペインがグラナダを支配し、レコンキスタ（再征服）を完成
- ✓ イベリア半島を追われたイスラーム教徒やユダヤ教徒などが北アフリカに移住
- ✓ スペインを追い出されたことによる復讐心から略奪を行う者もおり、それが北アフリカ海賊の始まりとなった（有名なのが ウルージとハイルッディーン）
- ✓ 1538年、神聖ローマ帝国、ヴェネツィア、ローマ教皇領は、神聖同盟を結成し、同年、ギリシア西岸のプレヴェザでオスマン帝国軍と交戦
- ✓ 全面対決を前に神聖同盟側の艦隊司令官が撤退し、戦闘は終結

プレヴェザの海戦

フィールドワーク：清泉女子大学　桃井准教授

- ✓ 17～18世紀の地中海世界は、ヨーロッパ諸国の関心が、地中海から大西洋やカリブ海、インド洋などに移っていった
- ✓ ナポレオン戦争後の1814から15年、ウィーン会議が開催され、これ以後の国際秩序はウィーン体制と呼ばれるようになる
- ✓ ウィーン体制は、正統性主義・力の均衡・協調外交が特徴であり、その後、列強間で国際問題に関する協議が行われ、北アフリカ海賊の廃絶の決議がされる
- ✓ このような状況下で、 1830年にフランスはアルジェを植民地支配、チュニスと条約を締結し、アルジェとチュニスは、海賊の廃絶を明言しなかったものの、実質的には消滅



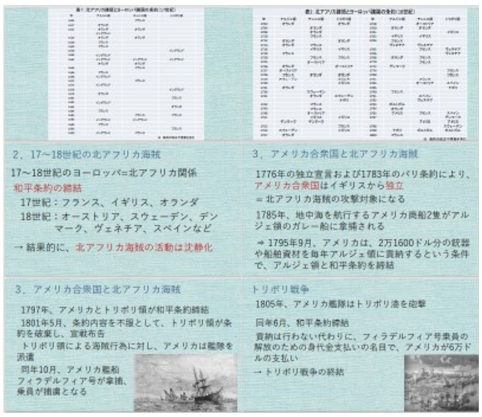
ウィーン会議

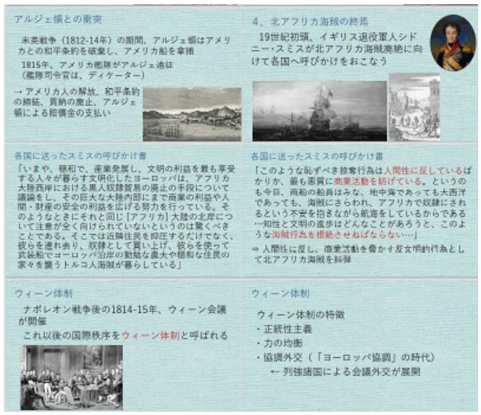
信州大学人文学部　豊岡 康史准教授

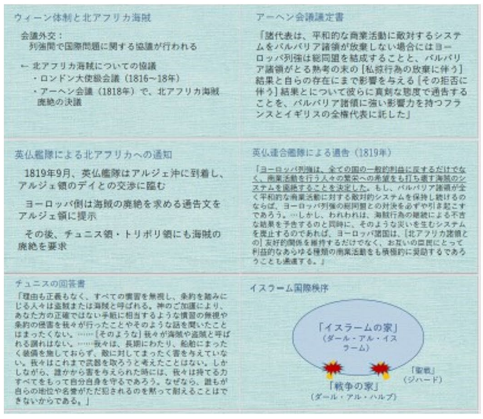
37

信州大学人文学部　豊岡 康史准教授

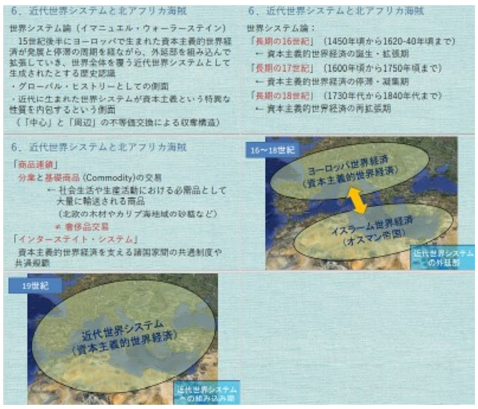
39






ウィーン体制と北アフリカ海賊
会議外交：
列強間で国際問題に関する協議が行われる
← 北アフリカ海賊についての協議
・ロンドン大使級会議（1816~18年）
・アーヘン会議（1818年）で、北アフリカ海賊
廃絶の決議
アーヘン会議議定書
英仏艦隊による北アフリカへの通知
1819年9月、英仏艦隊はアルジェ沖に到着し、
アルジェ領のデイとの交渉に臨む
ヨーロッパ側は海賊の廃絶を求める通告文を
アルジェ領に提示
その後、チュニス領・トリポリ領にも海賊の
廃絶を要求
英仏連合艦隊による通告（1819年）
チュニスの回答書
イスラーム国際秩序
「イスラームの家」
（ダール・アル・イスラーム）
「聖戦」
（ジハード）
「戦争の家」
（ダール・アル・ハルブ）

両者の主張の相違
ヨーロッパ側：
北アフリカ海賊は、人道上の面からも、商業活動を
妨げる面からも不正である
アルジェ・チュニス側：
従来の条約や外交慣習は遵守している。条約未締結
国とは戦争状態にある。自衛のために海軍力は放棄し
ない
・ 国際政治における正／不正認識の相違
4．北アフリカ海賊の終焉
・アルジェとチュニスは、海賊の廃絶を明言しなかっ
たが、実質的には消滅
1830年の解決
アルジェ：フランス軍の侵攻 → 植民地支配
チュニス：フランスとの条約締結
（海賊の廃止やサンゴ漁のフランスへの独占権付与、
ヨーロッパ商人の活動自由化）
－ フランスによる政治経済的支配
5．近代国際秩序の形成
19世紀の国際秩序
・国際社会の萌芽期
（「ヨーロッパ協調」の時代）
・植民地支配の拡大
イギリス
オランダ
スペイン
プロイセン
ロシア帝国
オスマン帝国
アルジェ領
チュニス領
トリポリ領
ウィーン体制の成立
「ヨーロッパ協調」
5．近代国際秩序の形成
（国際社会の萌芽期／植民地主義）
「内の論理」：
国際社会内部では、お互いの主権を尊重する「寛容」
に基づく国際秩序
＝ ヨーロッパ協調の時代
「外の論理」：
国際社会の外部に対しては、ヨーロッパの規範やルー
ルを強要する「文明化」に基づく国際秩序
＝ 植民地支配の時代


6．近代世界システムと北アフリカ海賊
世界システム論（イマニュエル・ウォーラーステイン）
15世紀後半にヨーロッパで生まれた資本主義的世界経
済が発展と停滞の周期を経ながら、外部を組み込んで
拡張していき、世界全体を覆う近代世界システムとして
生成されたとする歴史認識
・グローバル・ヒストリーとしての側面
・近代に生まれた世界システムが資本主義という特異な
性質を内包するという側面
（「中心」と「周辺」の不等価交換による収奪構造）
6．近代世界システムと北アフリカ海賊
世界システム論：
「長期の16世紀」（1450年頃から1620-40年頃まで）
← 資本主義的世界経済の誕生・拡張期
「長期の17世紀」（1600年頃から1750年頃まで）
← 資本主義的世界経済の停滞・凝集期
「長期の18世紀」（1730年代から1840年代まで）
← 資本主義的世界経済の再拡張期
6．近代世界システムと北アフリカ海賊
「商品連鎖」
分業と基礎商品（Commodity）の交易
← 社会生活や生産活動における必需品として
大量に輸送される商品
（北欧の木材やカリブ海地域の砂糖など）
＊ 奢侈品交易
「インターステイト・システム」
資本主義的世界経済を支える諸国家間の共通制度や
共通規範
16~18世紀
ヨーロッパ世界経済
（資本主義的世界経済）
イスラーム世界経済
（オスマン帝国）
近代世界システム
への外延部
19世紀
近代世界システム
（資本主義的世界経済）
近代世界システム
への組み込み部

年間スケジュール

42

春

月	日	議　題	文献調査	フィールドワーク	備　考
6	5	研究計画発表	次回ベース文献疑問など報告		
	12	分担発表 中間発表ＰＰＴ確認・修正	文献集計・目次		
	19	分担発表 中間発表ＰＰＴ確認・修正	文献集計・目次		
	26	分担発表 中間発表ＰＰＴ確認・修正	文献集計・目次	FW検討（仮）	
7	3	分担発表 中間発表ＰＰＴ確認・修正			
	10	分担発表 中間発表ＰＰＴ確認・修正			
	17	分担発表 中間発表ＰＰＴ確認・修正			
	24	分担発表 中間発表ＰＰＴ確認・修正			
8	26	◆夏季合宿（中間発表） 箱根水明荘	発表者（役割分担）：1.研究概要、2.目次、3.内容、4.参考文献・研究計画・ＦＷ		
	27	◆夏季合宿（中間発表） 箱根水明荘	発表者（役割分担）：1.研究概要、2.目次、3.内容、4.参考文献・研究計画・ＦＷ		
	下旬	◆フィールドワーク実施？			

年間スケジュール

43

秋

9	18	下期進行確認 分担発表	各執筆箇所の発表(状況報告)		年間スケジュール再確認 下期加入メンバー確定
	25	分担発表	各執筆箇所の発表(状況報告)		
10	2	分担発表	各執筆箇所の発表(状況報告)		
	9	分担発表	各執筆箇所の発表(状況報告)		
	16	分担発表	各執筆箇所の発表(状況報告)		
	23	分担発表	各執筆箇所の発表(状況報告)		
	30	分担確認 論文提出全体構成	各自完成版を持ち寄る		
11	13	分担確認 論文提出全体構成	全体を印刷して確認		
	20	分担確認 論文提出全体構成	全体を印刷して確認		
	27	PPTレビュー AL祭・最終発表に向けて			
12	4	PPTレビュー AL祭・最終発表に向けて			
	11	◆アクティブラーニング祭	アクティブラーニング(AL)祭　（多摩キャンパス）		
	18	◆論文発表			
	25	◆論文提出日			メール送付期限

参考文献・論文等(全91件)

文献

[1]田中　健夫 倭寇　海の歴史 講談社学術文庫 2012
[2]羽田　正 東アジア海域に漕ぎ出す　海から見た歴史 東京大学出版会 2013
[3]田中　健夫 倭寇と勘合貿易 ちくま学芸文庫 2012
[4]東京大学史料編纂 描かれた倭冠 「倭冠図巻と抗倭図巻」 吉川弘文館 2014
[5]吉成　直樹 琉球王国と倭冠 森話社 2006
[6]高野　秀行 謎の独立国家ソマリランド 本の雑誌社 2013
[7]村井　章介 中世倭人伝 岩波新書 1993
[8]寺島　実郎 脳力のレッスン180 -鄧和の大航海と東アジアの近世- 岩波書店 2017
[9]宇山　卓栄 朝鮮属国史　中国が支配した2000年 扶桑社新書 2018
[10]荷見　守義 世界史リブレット人 38　永楽帝　明朝第二の創業者 山川出版社 2016
[11]岡田英弘/神田信夫/松村潤 紫禁城の栄光 講談社 2006
[12]岩井 茂樹 朝貢・海禁・互市―近世東アジアの貿易と秩序 名古屋大学出版会 2020
[13]岩井 茂樹 東洋史研究叢刊　中国近世財政史の研究 京都大学学術出版会 2004
[14]村井　章介 東アジアのなかの日本文化 北海道大学出版会 2021
[15]吉成　直樹 琉球王国は誰がつくったのか 七月社 2020
[16]榎本　渉 僧侶と海商たちの東シナ海 講談社学術文庫 2020
[17]桃井　治郎 海賊の世界史 中公新書 2017
[18]上里　隆史 海の王国・琉球 ボーダーインク 2018
[19]ピーター・T・リーソン 海賊の経済学 NTT出版 2011
[20]山内譲 海賊の日本史 講談社現代新書 2018
[21]竹田いさみ 世界を動かす海賊 ちくま新書 2013
[22]鈴木 董 文字と組織の世界史 新しい「比較文化史」のスケッチ 山川出版社 2018
[23]桃木至朗編 海域アジア史研究入門 岩波書店 2008
[24]豊岡康史 <清朝史叢書>海賊からみた清朝ー十八～十九世紀の南シナ海 藤原書店 2016
[25]塩上覚 東洋史研究叢刊之七十八（新装版 16）明代海禁＝朝貢システムと華夷秩序
京都大学学術出版会 2013
[26]ウィリアム・H・マクニール 世界史（下） 中公文庫 2008
[27]白井米雄・桜井由躬雄編 新装世界各国史5 東南アジア史①大陸部 山川出版 1999
[28]池端雪浦編 新装世界各国史6 東南アジア史②島嶼部 山川出版 1999
[29]津本　陽 天翔ける倭寇＜上＞ 角川文庫 1993
[30]太田　弘毅 倭寇ー日本あふれ活動史 文芸社 2004
[31]関　周一 対馬と倭寇ー境界に生きる中世びと 高志書院 2012
[32]斉藤　忠 倭国と日本古代史の謎 学研M文庫 2015
[33]長野　正孝 古代史の謎は「海路」で解ける PHP新書 2015
[34]五木　寛之 サンカの民と被差別の世界 ちくま文庫 2014
[35]沖浦　和光 天皇と賤民の国 河出文庫 2019
[36]宮本　常一 日本文化の形成　講談社学術文庫 2014
[37]上原　善広 幻の韓国被差別民「白丁」を探して 河出文庫2019
[38]高田　貫太 海の向こうから見た倭国 講談社現代新書 2017
[39]瀬川　拓郎 縄文の思想 講談社現代新書 2017
[40]瀬川　拓郎 アイヌと縄文ーもうひとつの日本の歴史 ちくま新書 2016
[41]高橋　貞樹 被差別部落一千年史 岩波文庫 1992
[42]高橋　典幸 中世史講義 ちくま新書 2019
[43]村井　章介 古琉球 海洋アジアの輝ける王国 角川選書 2019
[44]岡本　隆司 日中関係史「政冷経熱」の千五百年 PHP新書 2015
[45]高野　澄 歴史を変えた水軍の謎 祥伝社黄金文庫 2012
[46]小川　雄 水軍と海賊の戦国史 平凡社 2020
[47]清水克之 戦国大名と分国法　岩波文庫　2018
[48]井沢元彦 逆説の日本史9戦国野望編　鉄砲伝来と倭冠の謎 小学館文庫 2005
[49]田中　健夫 東アジア通行圏と国際認識 吉川弘文館 1997
[50]村井　章介 国境を超えて-東アジア海域世界の中世 校倉書房 1997
[51]百瀬　宏 北欧史 山川出版社 1998
[52]Regis Boyer （レジス・ボワイエ） La vie quotidienne des Vikings （ヴァイキングの暮らしと文化）白水社 2019
[53]伊藤　潔「台湾」中公新書 1993
[54]辟化元「詳説　台湾の歴史　台湾高校歴史教科書」雄山閣 2020
[55]大東　和重「台湾の歴史と文化」中公新書 2020
[56]楊　合義「台湾の変遷史」展転社 2018
[57]荒野泰典/石井正敏/村井章介編 日本の対外関係　倭冠と「日本国王」吉川弘文館 2010
[58]村井章介 古琉球　海洋アジアの輝ける王国 角川選書 2019
[59]入間田宣夫/豊見山和行 北の平泉、南の琉球 中央公論新社 2002
[60]上里隆史 マンガ　沖縄・琉球の歴史 河出書房新社 2016
[61]模澤和夫 これならわかる　沖縄の歴史　Q &A　第２刷 大月書店 2020
[62]渡邊大門 流罪の日本史 ちくま新書 2017
[63]榎本渉 僧侶と海商たち(東シナ海)講談社学術文庫　2020
[64]宝賀寿男古代氏族の研究①和珥氏国江南から来た海神族の流れ垣出版2012

参考文献・論文等

[65]海賊の文化史（海野弘）
[66]世界史を作った海賊（武田いさみ）
[67]上田信（中国の歴史09　海と帝国　明清時代）
[68]岡田英弘（読む年表　中国の歴史）
[69]田村実造（中国文明の歴史７　大モンゴル帝国）
[70]杉山正明（モンゴル帝国の興亡　下　世界経営の時代）
[71]中島楽章（14-16世紀,東アジア貿易秩序の変容と再編 ―朝貢システムから1570年システムへ―）
[72]山本秀也（習近平と永楽帝　中国帝国皇帝の野望）
[73]出口治朗（全世界史（下））
[74]森平雅彦（世界史リブレット99―モンゴル帝国の覇権と朝鮮半島 ―）
[75]麻生川静男（本当に悲惨な朝鮮史 ―高麗史節要を読み解く ―）
[76]越村勲（アドリア海の海賊ウスコク）
[77]越村勲（16世紀・17世紀の海商・海賊アドリア海のウスコクと東シナ海の倭冠）

論文

[1] 三宅　亨 倭冠と王直 桃山学院大学総合研究所紀要 第37巻第３号 2012 https://www.andrew.ac.jp/soken/pdf_3_-1/sokenk193-2.pdf
[2]北尾悟, 西村 さとみ 倭冠とは何か:歴史教育と歴史研究をめぐって 奈良女子大学教育システム研究開発センター 2018 https://opac2.lib.nara -wu.ac.jp/webopac/TD00003412
[3] 吉成　直樹 琉球・沖縄文化の形成と外的衝撃 古代～中世平行期を中心に 法政大学学術機関リポジトリ 2013 http://hdl.handle.net/10114/9293
[4]稲本 守 欧州私掠船と海賊-その歴史的考察- 東京海洋大学研究報告 2009 http://id.nii.ac.jp/1342/00000342/
[5]真栄平　房昭 明朝の海禁政策と琉球 ：海禁・倭冠論を中心に 交通史研究67巻(2008)　2008 https://doi.org/10.20712/kotsushi.67.0_61
[6]二谷　貞夫倭冠対策と通信使の創設 ：室町時代の朝鮮通信使 中等社会科教育研究巻 33, p.103-106　2015
https://tsukuba.repo.nii.ac.jp/records/53231#.YKduKqj7RPZ
[7]近藤　浩一東アジア海域と倭冠-9世紀末の新羅海峡との比較史的考察を通して -京都産業大学論集.人文科学系列.47巻.p.123-145 2014
https://www.google.com/url?sa=t&rct=j&q=&esrc=s&source=web&cd=&ved=2ahUKEwja4Kqzv9zwAhXJUN4KHaT3CCIQFjAAegQIAxAD&url=https%3A%2F%2Fksu.repo.nii.ac.jp%2F%3Faction%3Drepository_uri%26item_id%3D1407%26file_id%3D22%26file_no%3D1&usg=AOvVaw0hOE22LbHf07_-r8HWi-Dmp
[8]浅川滋男 東アジア漂海民家船住居 鳥取環境大学紀要創刊号(2003.2)pp.41-60　2003
[9]逸見　真 国際法における海賊行為の定義 https://www.ymfor.jp/wp-content/uploads/58_8.pdf
[10]中島楽章4-16世紀東アジア貿易秩序の変容と再編―貢システムから1570年システムへ
[11]豊岡康史清朝と旧明領国際関係（1644-1800）

その他

[1]外務省 ソマリア沖・アデン湾における海賊問題の現状と取組 https://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/pirate/africa.html
[2]金柄徹「倭冠」から眺める海域世界 三田文学 No.139秋季号2019 2019
[3]コトバンク　https://kotobank.jp/word/%E6%B0%B4%E5%A4%A7%E337

謝辞

最後に、本論文を作成するにあたり、インターゼミ主宰の寺島実郎学長を始めとする多くの先生方、卒業生より、毎回のゼミにおいて高い視座と広い視野から多くの助言を頂きました。

アジアダイナミズム班の指導教員である金　美徳教授、水盛　涼一准教授にはテーマ設定から文献研究、ヒアリング、論文執筆に至るまでの研究の大きな指針と共に、倭寇とモンゴル帝国史、グローバルヒストリーから紐解く現代的意義、 現代の私たちがもつべき視座について、大胆且つきめ細かい指導を頂きました。

また、2021 年度のフィールドワークは、信州大学　豊岡准教授、清泉女子大学　桃井准教授より、それぞれの研究からの深い知見、発見、見解を惜しみなく教示頂き、文献研究だけでは得られない歴史的背景を教示頂きました。

この場を借りて、本論文を執筆するにあたりご協力頂いた全ての皆さまに感謝の意を表します。誠にありがとうございました。

2022 年 1 月 21 日

多摩大学インターゼミ・アジアダイナミズム班一同

執筆担当

はじめに　光永　和弘

第1章
- 第1節　谷ケ崎 真尚
- 第2節　羽田 キッティパッド
- 第3節　森田 耕一郎

第2章
- 第1節　光永　和弘
- 第2節　光永　和弘
- 第3節　光永　和弘
- 第4節　光永　和弘
- 第5節　光永　和弘
- 第6節　杉　由紀
- 第7節　杉　由紀
- 第8節　杉　由紀
- 第9節　森　勇太
- 第10節 天野　真一朗
- 第11節 天野　真一朗
- 第12節 天野　真一朗

第3章
- 第1節　多田　敏男
- 第2節　多田　敏男
- 第3節　多田　敏男
- 第4節　田中 千尋
- 第5節　田中 千尋
- 第6節　田中 千尋
- 第7節　田中 千尋

第4章
- 第1節　三田　大祐
- 第2節　三田　大祐
- 第3節　三田　大祐
- 第4節　山埜 彦樹
- 第5節　山埜 彦樹

おわりに　　光永　和弘

参考文献　　三田　大祐

年間スケジュール　三田　大祐

図目次

図 1 朝鮮への行動回数と年代 20
図 2 明への行動回数と年代 21
図 3　スペイン・ポルトガルの進出地図 24
図 4　倭寇の侵略と根拠地 28
図 5　明代のモンゴルと倭寇の脅威（北虜南倭） 30
図 6　フィールドワーク資料 31
図 7　フィールドワーク資料 32
図 8　モンゴル系図 34
図 9　復元された至元通行宝鈔 37
図 10　交鈔の残高と物価の推移 38
図 11　明初洪武年間の鈔 40
図 12　中国の夏季地表温度異常値と人口推計 41
図 13　琉球諸島 47
図 14　倭寇の侵略 49
図 15　朝鮮4代王「世宗」 世宗大王遺跡管理所 50
図 16　明治十二年大蘇芳年「大日本史略図会」の「第十五代神功皇后」仲哀天皇九年以降の三韓征伐 51
図 17　本研究での時代背景一覧（著者作成） 52
図 18 南北朝時代区分　（参考文献を整理） 53
図 19　対馬と壱岐の地形的位置づけ 59
図 20　　琉球国図　1696 年 62
図 21　「海東諸国紀」所収 琉球物国之図　1471 年 62
図 22　　ミュンスター アジア図　16 世紀 63
図 23　　リンホーテン「東方案内記」所収　1596 年 63
図 24　オルテリウス アジア図　1575 年 64
図 25　ギリシャ・エーゲ海の地図 67
図 26　アドリア海の地図 68
図 27　ウスコクを肯定的に描いた版画 USKOCI uskockinapad na mletacki brodisprad Senja,XVI センジャにおいてウスコクがベネチアの船を攻撃している 16 世紀バチカン図書館所蔵 70
図 28　フィールドワーク資料 71

写真目次

写真 1　明人の描いた野人と倭人 12
写真 2　 中国　 諸安県梅嶺 23
写真 3　カムィ焼き（伊仙町歴史民族資料館にて撮影） 43
写真 4　伊仙町カムィ焼き陶器窯跡（現地にて筆者撮影） 44
写真 5　エリザベス女王がフランシス・ドレークにナイトの称号を与える様子 74